

山 賀

(その5・6)

— 河内平野における初期農耕遺跡の調査 —

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

大阪府教育委員会
財団法人 大阪文化財センター

山 賀

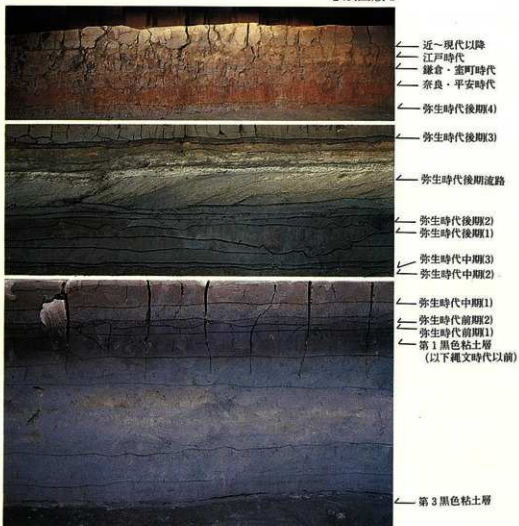
(その5・6)

— 河内平野における初期農耕遺跡の調査 —

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

大阪府教育委員会
財団法人 大阪文化財センター

卷頭図版 1

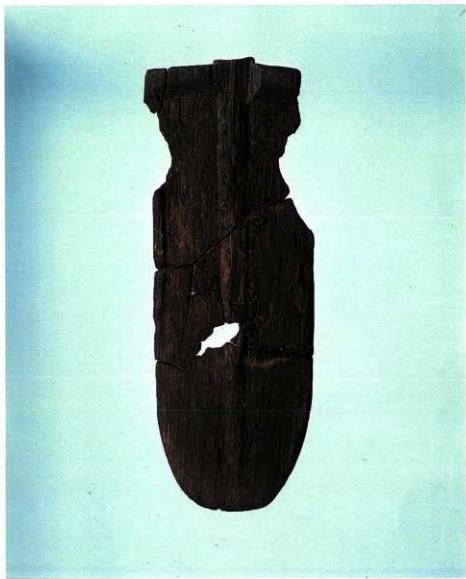


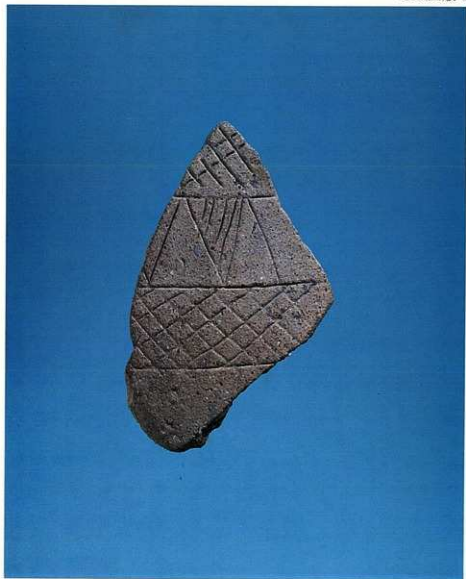
層序の一例(3区北壁)

卷頭図版 2



弥生時代前期溝11と埴





特殊な文様を持つ手焙形土器破片

序 文

縄文海進により上町台地と生駒山地の間には、大きな湾が形成されるに至ったが、その後、南半部は海退と旧大和川水系の沖積作用により南から北に向って陸化していき、人間の足跡が加わっていったことは、近畿自動車道天理～吹田線建設に先立って行われた河内平野南半を縦断するこれまでの発掘調査によって、その様子を極めて具体的に我々に示すところとなった。

山賀遺跡は、その中でも最も早く、その足跡を印した遺跡で、単に縄文式土器だけでなく、まさにその足跡と共に筥や木杭等が検出され、豊富な漁類資源のもと漁撈活動を活発に行い、次には、いち早く農耕を取り入れ瓜生堂遺跡と並ぶ河内平野最大の集落を形成したことが明らかとなった。

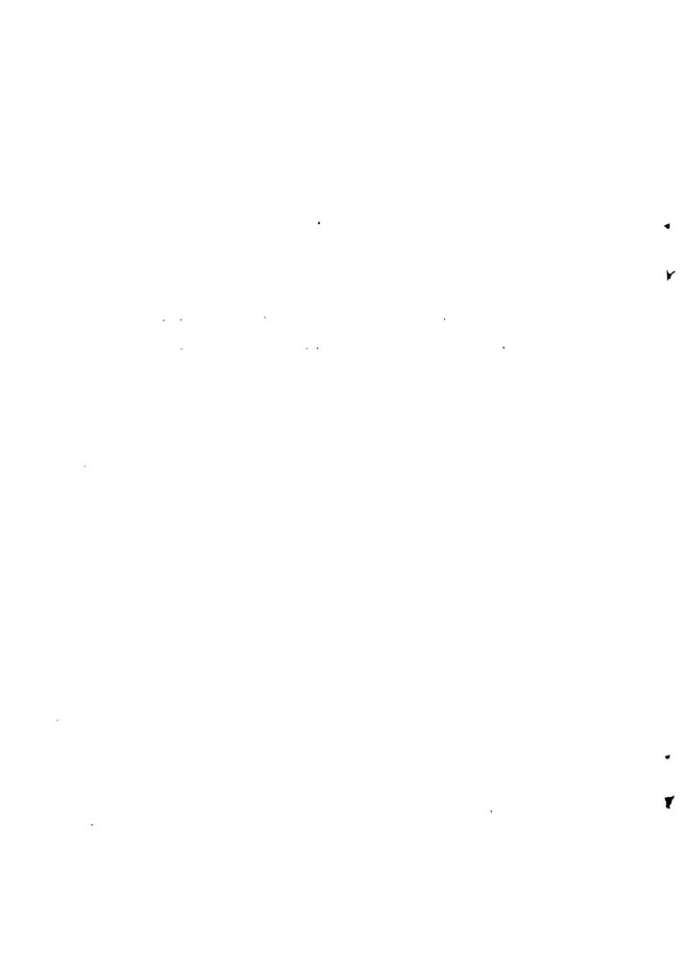
本書は、本線に附属して建設が予定されている八尾バリアの工事に先立って調査を実施した部分の概要報告書で、先の調査結果を更に補充するものとなった。

これらはひとえに日本道路公団大阪建設局、財団法人大阪文化財センターはじめ調査関係各位並びに多数の方々のご協力、ご援助の賜物と深く感謝すると共に、今後とも温かいご支援を賜わるよう切望してやまない。

昭和60年8月

大阪府教育委員会

文化財保護課長 吉 房 康 幸



序 文

河内平野の形成と、古代人の活躍が、近畿自動車道天理～吹田線関連遺跡の一連の発掘調査で徐々に明らかになってきた。三角州平野の形成は自然環境に大きく影響されるが、また、そこに住んだ人々が、この大地に加えた各種の行為が、その時々微妙な影響を与えることもある。

近畿自動車道天理～吹田線にかかる15遺跡の調査は、大阪府教育委員会、日本道路公団より継続的に調査を依頼され、すでに長原遺跡、瓜生堂遺跡、巨摩庵寺遺跡、新家遺跡、西岩田遺跡、友井東遺跡、若江北遺跡、山賀遺跡、美園遺跡、佐堂遺跡、久空寺遺跡、亀井遺跡、大掘城遺跡等の調査を完了し、城山遺跡、亀井北遺跡の調査を実施している。

本書は、昭和60年8月に調査を完了した東大阪市若江西新町から八尾市新家町に所在する山賀遺跡（その5）・（その6）発掘調査の概要を記したものである。

調査は、府道中央環状線に設置された幅約7m程度のグリーンベルト内を中心とした劣悪な条件の下で実施したものであるが、過去の山賀遺跡の一連の調査結果を検証し、新しい事実を併せて、山賀遺跡の実態の解明に重要な意味をもつ資料を得られたものと確信している。

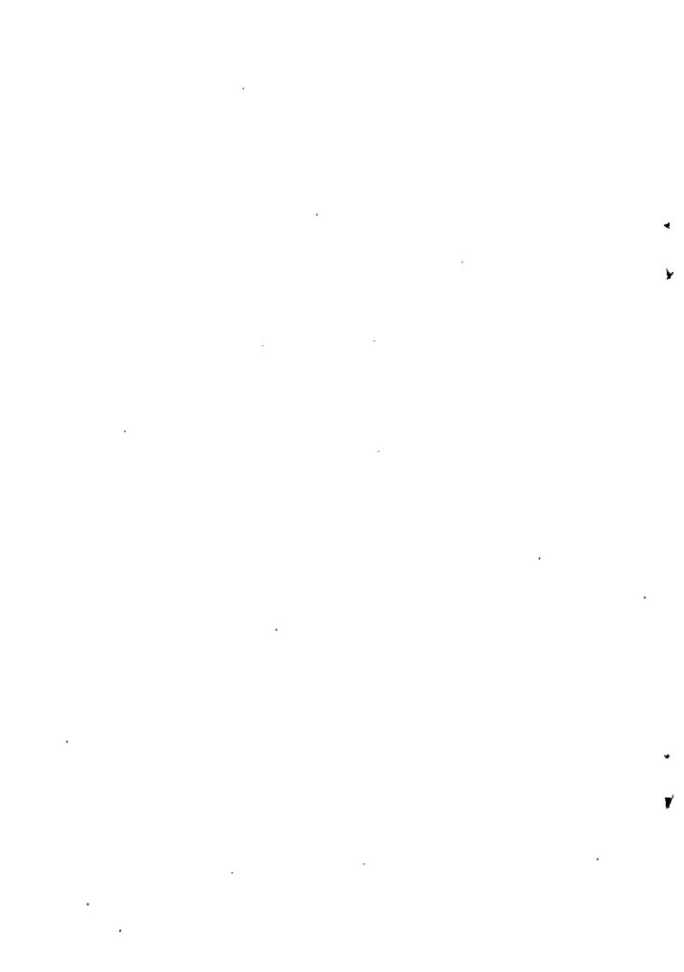
河内平野形成の歴史は、自然と人間とのかかわりの歴史であり、人文科学としての河内古代史であろう。本書が、これらの理解に貢献できれば幸いである。

最後に、当文化財センターは、設立以来10年、埋蔵文化財の保護、普及事業を積極的に実施する中で、その使命を果しながら、着実に発展してきた。今後も初期の目標を見失うことなく、一層研鑽、努力することを約すると共に、関係各位のより一層のあたたかい御理解、御支援を願ってやまない。

昭和60年8月

財団法人 大阪文化財センター

理事長 加藤 三之雄



例 言

1. 本書は、日本道路公団が建設を進めている近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査のうち、東大阪市若江西新町5丁目、八尾市新塚町3・4・6・7丁目付近における山賀遺跡（その5・6）調査区の発掘調査概要報告書である。
2. 本調査は、大阪府教育委員会及び財団法人大阪文化財センターが、日本道路公団大阪建設局の委託を受けて1983年6月1日から1985年6月30日まで実施したものである。また、本書作成にかかる整理作業は、調査と並行して実施し、1985年8月31日終了した。
3. 本調査に要した費用、179,437,000円はすべて日本道路公団が負担した。
4. 本調査は、大阪府教育委員会の指導の下に財団法人大阪文化財センターが実施した。調査並びに本書作成に関係した者は以下のとおりである。

調査関係者組織表

事務局	理事兼事務局長	小林廣喜（1985年1月まで）
	事務局長	畦 謙造（1985年3月まで）
	専務理事兼事務局長	村田和三郎（1985年4月から）
	事務局次長兼総務課長	尾田勝之
	主幹兼庶務係長	阪上允子、主査 田中喜代子、主事 秋山芳廣、 仄木明子、千野和久、田口宗義、鎗山洋子、宮本 哲男
	主幹兼普及係長	福岡澄男、技師 杉本直子、主事 小島容子
調査総括責任者	業務課長	石神 恰（1984年3月まで）
	同	泉本知秀（1985年4月まで）
	同	中西靖人（1985年5月から、第1係長兼務）
	業務課主幹	吉村信男
長田分室	業務課長兼第1係長	中西靖人（1985年4月まで業務課主幹兼第1係 長）
	業務第3係長	国乗和雄（1985年4月まで第1係主査） 主査 井藤暎子、技師 片山彰一（写真）、村上 年生、森屋美佐子、高橋雅子（1985年3月まで）、 田中和弘、尾谷雅彦（1984年9月まで）、寺川史 郎（1985年3月まで）、金光正裕（1985年3月ま で）、柄本哲、山口誠治（保存処理）、森屋直樹 （1985年3月まで）、岸本道昭

本調査は、業務第1係のうち(その5)が国乗和雄・田中和弘・岸本道昭、(その6)が田中和弘・岸本道昭の担当によって実施されたものである。調査に際しては、日本道路公団大阪工事事務所など関係各機関に格別の配慮を受けた。調査及び遺物整理においては、以下の学生諸氏の助力を得た。

大政 直、金井礼子、黒崎 修、高間正年、中井 靖、中川恵美、中谷秀次、土生 稔、藤川 幸右、基本 浩、松岡俊光、松下清之、松田 操、森田 豊、森田容子、森脇 敏、山本広幸

5. 本調査中、土層の観察について立命館大学教授日下雅義氏の御教示を受けた。
6. 本調査における花粉分析・珪藻分析・リン分析(岡崎基主体部)については、株式会社パリーノ・サーデュイに委託した。
7. 本書の執筆は、主に田中と岸本が行なった。分担は目次に示すとおりである。国乗担当分については担当者の報告を受けて田中・岸本が執筆した。編集は、田中・岸本が行なった。
8. 遺構写真は各担当が撮影し、遺物写真撮影と焼付は片山彰一・金井礼子・森田豊が行なった。
9. 本調査にあたっては、写真・実測図などの記録を作成すると共にカラースライドも多数作成した。広く各方面で利用されることを希望する。

凡 例

1. 本調査の遺構実測基準は、近畿自動車道の道路中心線（センターライン）を利用した。これは日本道路公団が道路の予定路線上に設置している道路センター杭を基準とするものであって STA.88+10などと表示される。STAはステーション、数字は近畿自動車道大阪線門真インターを0基点として、100m単位にセンターライン（C.L.と略）を割った整数値とその端数距離（単位m）である。これによって各地点の基点からの位置が表示される。基準線と直交方向の位置については、E52（C.L.から東へ52m）、W29（C.L.から西へ29m）などと表示する。
2. 本書の平面図の方位は、国土座標北（G.N.）である。本調査区付近のC.L.は直線区間であってその方向は、 $N15^{\circ}26'56.6''E$ を採っている。真北はG.N.より東へ18'にある。
3. 本書の図面の高さの基準はT.P.（東京湾標準潮位）を用いた。
4. 遺構は、遺構の種類ごとに番号が付され、遺構面ごとに完結する。同一遺構と思われるものでも、検出調査区が異なれば違った番号を付した。
5. 遺物は、土器・土製品・瓦などについてそれぞれ通し番号を付している。木器はW、石器はSを頭に付して通し番号が与えられる。実測図と写真の遺物番号は同一のものなら共通するが実測図あるいは写真だけのものもある。原則として土器は1/4、石器は1/2に縮小して掲載している。
6. 遺物のうち弥生土器、須恵器についての編年的位置付けなどは次の書物による。
佐原 真『畿内地方』『弥生式土器集成』本編2 東京堂出版 1968年
田辺昭三『陶器古窯址群I』平安学園考古学クラブ 1966年
7. 石器の説明について、実測図は原則として腹面（主要剝離面側）を右におき、逆の背面側を左に示してある。また、打点あるいは打面側を上図示した。側面や断面の図示は対象によって異なる場合がある。ポジティブな剝離面、ネガティブな剝離面という使い分けを行っている。石質は、特に断らないかぎりサスカイトである。
8. 村図のうち、断面図は水平1/400、垂直1/400で作成してある。原則として、砂層は微砂であっても粗砂であっても流水性の堆積の場合粗スクリーントーンを使用して表示してある。弥生時代前期以前に観察される黒色粘土層については、各調査区に認められ対応が明らかなので上から第1～第4黒色粘土層として統一名称を付した。これらの層には黒く表現されるスクリーントーンを使用した。弥生時代後期遺構面(1)～(3)及び古墳時代にそれぞれ観察される黒色の砂混粘土層については、灰色に表現されるスクリーントーンを使用した。
9. 土層の説明の中に、炭酸カルシウム粒とか、ビビアンナイトという語が使用されている。これについて以下解説しておく。

・炭酸カルシウム粒—粘土層を観察すると層中に大小(0.5~3 cm程度)の黄色あるいは白色の粒が含まれていることがある。色の変化だけで土に溶けこんでいるものもあれば、固まっているものもある。また、まれに2枚貝の形をとどめているものがある。これらを一括して炭酸カルシウム粒と呼ぶ。これは、土中に生息していた貝や節足動物の骨等の遺体がカルシウムの固まりとして残ったり再集したものである。

・ビビアンナイト (Vivianite) —粘土層を観察すると層中に青色(藍色)を呈する小粒が認められることがある。これは淡水性粘土に含まれる鉱物である。藍鉄鉱—リン酸第一鉄($\text{Fe}_3(\text{PO}_4)_2$)と呼ばれており、本書ではビビアンナイトと称した。

10. 遺構面の設定と前回調査の遺構面との関連については、今回の調査で再検討したものである。その結果、遺構の位置付け等に若干の変化が生じている。

11. 本文中では註などでいちいち斯わっていないが当センター既刊の次の概要報告書を参考にし、多くを引用している。参照されることを望む。

「山賀」(その1)~(その4) 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1983年
(その3)のみ1984年。

山 賀 (その5・6)

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

目 次

巻頭カラー図版	1 層序の一例 (3区北壁)
	2 弥生時代前期溝11と堤
	3 鋤
	4 特殊な文様を持つ手焙形土器破片
序 文	
例 言	
凡 例	
第Ⅰ章 調査に至る経過	中西靖人 1
第Ⅱ章 位置と環境	田中和弘 4
第Ⅲ章 調査の方法	岸本道昭 12
第Ⅳ章 遺跡の概要	田中 15
第Ⅴ章 層位と遺構面	岸本 17
第Ⅵ章 調査の結果	27
第1節 縄文時代の遺構と遺物	田中 27
a 後期	27
b 晩期	27
c まとめ	30
第2節 弥生時代前期の遺構と遺物	田中・岸本 32
a 前期(2)～(3)	32
b まとめ	91
第3節 弥生時代中期の遺構と遺物	岸本 93
a 中期(1)	93
b 中期(2)	99
c 中期(3)	102
d まとめ	111
第4節 弥生時代後期の遺構と遺物	田中 112

a 後期(1)	112
b 後期(2)	116
c 後期(3)	116
d 後期(4)	121
e 後期(5)	121
f まとめ	123
第5節 古墳時代の遺構と遺物	岸本 125
第6節 奈良・平安時代の遺構と遺物	田中 129
第7節 鎌倉・室町時代の遺構と遺物	田中 132
第8節 江戸時代以降の遺構と遺物	田中 135
第Ⅳ章 理化学分析の成果	143
1 花粉・珪藻分析結果と山賀遺跡の自然環境	田中・榎ハリノ・サージュエイ 143
2 1号周溝墓主体部のリン分析	岸本・榎ハリノ・サージュエイ 192
第Ⅴ章 越冬期における土層断面の剥ぎ取り転写法の報告	山口誠治 194
第Ⅵ章 考察	199
第1編 河内平野中央部における農耕社会形成期の様相	田中 199
第2編 河内平野の埋没小古墳研究予察	岸本 212
第Ⅶ章 総括	田中・岸本 222

挿 図 目 次

第1図 調査区位置図	3
第2図 遺跡分布図	7~8
第3図 調査区呼称図	12
第4図 Bラインにおける調査区状況模式図	13
第5図 全体遺構面模式図	18
第6図 後期1・2区平面図	27
第7図 晩期5-2区平面図	28
第8図 晩期7区平面図	28
第9図 晩期23区・5-3区平面図	29
第10図 晩期25・26・29区平面図	30
第11図 17区西壁晩期河川6	31
第12図 前期(2)7区平面図	32
第13図 7区河川2出土土器・土製品	33

第 14 図	7 区河川 2 の氾濫堆積層出土土器・土製品	34
第 15 図	6 区河川 2 の氾濫堆積層出土土器	35
第 16 図	6・7 区河川 2 の氾濫堆積層出土石鏡・削器・剝片	36
第 17 図	前期(2) 14 区河川 3 平面図	37
第 18 図	14 区西壁河川 3 断面図	37
第 19 図	21 区西壁河川 3 断面図	37
第 20 図	前期(2) 28 区河川 3 平面図	38
第 21 図	16 区河川 3 出土土器	38
第 22 図	14 区河川 3 出土土器	38
第 23 図	16 区河川 3 出土土器	39
第 24 図	13 区河川 4 内杭の打ち込み状況	39
第 25 図	13 区溝 26 と河川 4 断面図(東南から)	39
第 26 図	13 区河川 4 出土土鏡	39
第 27 図	13 区河川 4 出土土器	40
第 28 図	前期(2) 1 区平面図	41
第 29 図	1 区溝 1 断面図(東から)	42
第 30 図	1 区溝 1 出土ヤス状木製品	42
第 31 図	1 区溝 1 出土石鏡	42
第 32 図	1 区北壁溝 2 断面図	42
第 33 図	弥生時代前期溝 2 出土土鏡	43
第 34 図	3 区溝 3 西提断面図(南西から)	44
第 35 図	3 区溝 3 断面図(西から)	44
第 36 図	前期(2) 3 区平面図	45
第 37 図	3 区溝 3 出土土器	46
第 38 図	3 区溝 3 提出土ヤス状木製品	46
第 39 図	3 区溝 5 出土土器	46
第 40 図	3 区溝 4・5・6・8・9・10 断面図	47
第 41 図	3 区溝 6 出土ヤス状木製品	48
第 42 図	3 区溝 7 断面図(北から)	48
第 43 図	3 区溝 8 出土土器	49
第 44 図	前期(2) 4・5 区平面図	50
第 45 図	4 区北壁断面図	51
第 46 図	5 区北壁断面図	52
第 47 図	4 区溝 11 出土削器・剝片	53

第 48 图	5 区溝12出土削器・剝片	54
第 49 图	前期 (2) 7 区平面図	54
第 50 图	7 区西壁断面図	55
第 51 图	7 区溝14出土土器	56
第 52 图	7 区溝14出土砥石・削器・剝片	58
第 53 图	溝16西側断面図 (9 区西壁)	59
第 54 图	9 区溝16出土土器	59
第 55 图	9 区西壁溝19断面図	59
第 56 图	9 区西壁溝15・17・18断面図	60
第 57 图	前期 (2) 9 区平面図	61~62
第 58 图	9 区溝19出土土器	63
第 59 图	前期 (3) 12区平面図	64
第 60 图	前期 (2) 10・12・13区平面図	65
第 61 图	12区西及び北壁断面図	66
第 62 图	12区溝23出土土器	66
第 63 图	12区溝24出土土器 (1)	67
第 64 图	12区溝24出土土器 (2)	67
第 65 图	13区溝26出土土器	68
第 66 图	15区北壁断面図	69
第 67 图	16区溝30出土石炭	70
第 68 图	前期 (2) 15・16区平面図	70
第 69 图	16区西壁及び北壁断面図	71~72
第 70 图	18区北壁 (部分) 断面図	73
第 71 图	前期 (2) 18区平面図	73
第 72 图	前期 (2) 20・29区平面図	74
第 73 图	20区北壁断面図	75
第 74 图	21区北壁断面図	75
第 75 图	前期 (2) 23・24区平面図	76
第 76 图	25区溝36断面図	76
第 77 图	26区北壁断面図	77
第 78 图	前期 (2) 25区平面図	78
第 79 图	28区溝38断面図	78
第 80 图	前期 (2) 26・28区平面図	79
第 81 图	31区溝40出土土器	79

第 82 图	29区溝39断面図	79
第 83 图	28区北壁断面図	80
第 84 图	31区北壁断面図	81
第 85 图	32区平面及び西壁断面図	82
第 86 图	前期(2)31区平面図	82
第 87 图	前期(2)5-5区平面図	83
第 88 图	5-5区西壁断面図	84
第 89 图	5-5区溝42出土石鏃・削器・石庵丁・剝片	85
第 90 图	7区土坑4出土土器	86
第 91 图	13区土坑5出土土器	86
第 92 图	13区土坑6出土土器	86
第 93 图	前期(2)11区平面図	87
第 94 图	11区暗灰色砂混粘土層出土遺物	88
第 95 图	9区攪乱層出土土器	89
第 96 图	6区暗青灰色微砂混粘土層出土土器	89
第 97 图	31区青灰色微砂混粘土層出土土器	90
第 98 图	31区褐灰色粘土層出土土器	90
第 99 图	6区暗青緑灰色粘土層出土土器	90
第 100 图	11区暗灰色砂混粘土層出土石槍	91
第 101 图	9区前期(2)遺構面付近攪乱層出土土器	91
第 102 图	中期(1)7区平面図	93
第 103 图	第1号周溝基断面図	94
第 104 图	第1号周溝基木棺検出状況及び構造	94
第 105 图	7区1号周溝基出土土器	95
第 106 图	中期(1)4区平面図	96
第 107 图	中期(1)1・3区平面図	97
第 108 图	中期(1)5-2区・5-4区平面図	98
第 109 图	1~3区69層(暗灰色粘土層)出土ヤス状木製品	98
第 110 图	7区中期(1)灰褐色砂混粘土層出土土器類	99
第 111 图	7区灰褐色砂混粘土層出土土器	100
第 112 图	中期(2)1区(部分)足跡平面図及び断面図	100
第 113 图	中期(2)1区平面図	101
第 114 图	中期(2)2区平面図	102
第 115 图	6区明青灰色細粒砂層出土土器	102

第116图	7区白色粗砂層出土土器・土製品	102
第117图	31区灰色中粒砂層出土埴壺	102
第118图	7区白色粗砂層出土石器類	103
第119图	中期(3)5・7区平面図	104
第120图	中期(3)5-5区平面図	105
第121图	7区中期(3)土坑2出土土器	105
第122图	7区中期(3)土坑3出土土器	106
第123图	7区中期(3)土坑4出土土器	107
第124图	7区中期(3)土坑4出土土器	108
第125图	1区中期(3)道状遺構上面出土削器	108
第126图	中期(3)1区平面図	109
第127图	1区道状遺構出土ヤス状木製品	109
第128图	31区黒褐色砂混粘土層出土土甕丁	109
第129图	7区中期(3)遺構面直上出土磁石	110
第130图	後期(1)1区平面図	112
第131图	後期(1)30区平面図	112
第132图	1区後期(1)溝1出土土器	113
第133图	7区後期(1)溝2出土土器	113
第134图	後期(2)3区平面図	114
第135图	後期(2)1区平面図	114
第136图	後期(3)3区平面図	115
第137图	3区後期(3)~(4)河川1出土土器・土製品	117
第138图	3区後期(3)~(4)河川1出土手焙形土器	118
第139图	3区後期(3)~(4)河川1出土土器	118
第140图	後期(3)4・5・31区平面図	119
第141图	後期(3)5・6・7区平面図	120
第142图	後期(5)5-1区河川1出土土器	122
第143图	各包含層出土土器	123
第144图	各包含層出土土器(1)	125
第145图	古墳時代後期7・30区平面図	126
第146图	7区溝1出土土器	127
第147图	各包含層出土土器(2)	127
第148图	円筒埴輪	128
第149图	奈良・平安時代2区平面図	129

第150図	2区溝1出土瓦	129
第151図	奈良・平安時代3区平面図	130
第152図	2区灰色粘土層Ⅰ出土土器	130
第153図	3区灰色粘土層Ⅱ出土瓦	130
第154図	鎌倉、室町時代2・30区平面図	132
第155図	包含層出土土器・陶器	133
第156図	鎌倉、室町時代1区平面図	133
第157図	6区茶灰色シルト層出土土器	134
第158図	江戸時代3区平面図	135
第159図	江戸時代1・3区平面図	136
第160図	江戸時代2・26・27区平面図	137
第161図	各包含層出土土器、陶器	138
第162図	3区江戸時代溝3出土土器	138
第163図	現代1・2区平面図	139
第164図	3区旧耕土出土瓦	139
第165図	現代1・2区平面図	140
第166図	現代5・26・28・29区平面図	141
第167図	3区分析試料採取層位図	144
第168図	弥生時代前期(2)溝3分析試料採取層位図	145
第169図	山賀遺跡(その6)、№1~17試料主要花粉・胞子化石ダイアグラム	149~150
第170図	山賀遺跡(その6)、№18~32試料主要花粉・胞子化石ダイアグラム	153~154
第171図	花粉・胞子化石顕微鏡写真(1)	158
第172図	花粉・胞子化石顕微鏡写真(2)	159
第173図	山賀遺跡(その6)、№1~17試料主要珪葉化石ダイアグラム	169~172
第174図	山賀遺跡(その6)、№18~32試料主要珪葉化石ダイアグラム	183~186
第175図	珪葉化石顕微鏡写真(1)	188
第176図	珪葉化石顕微鏡写真(2)	189
第177図	弥生時代前期の溝の上面状況(写真)	194
第178図	溝の土層断面の状況(写真)	194
第179図	土層断面の削り出し(作業図1)	194
第180図	接着剤の塗布(作業図2)	194
第181図	剥ぎ取り作業(作業図3)	195
第182図	剥ぎ取り土層断面の保存作業(作業図4)	195
第183図	土層断面の剥ぎ取り転写の作業状況(①~⑥連続写真)	196

第184図	剥ぎ取った土層断面のパネルによる保存作業 (①～⑥連続写真)	197
第185図	河内平野とその周辺における長原式土器・畿内第Ⅰ様式土器出土遺跡	202
第186図	河川1とその周辺の交通	207
第187図	埋没小古墳の各例	213
第188図	河内平野の埋没小古墳と地域首长墳	217
第189図	埋没小古墳の承認試案	218
第190図	埋没小古墳と上位集団の政治関係	220

表 目 次

第1表	遺跡地名表	9～10
第2表	遺跡全体遺構面対応関係一覧 (縄文～古墳時代)	23～24
第3表	(その6) 各調査区遺構面及び基盤層一覧	25～26
第4表	試料一覧表	145
第5表	山賀遺跡 (その6) No.1～17試料花粉分析結果	147～148
第6表	山賀遺跡 (その6) No.18～32試料花粉分析結果	151～152
第7表	検出花粉・胞子化石名一覧表	155～156
第8表	顕微鏡写真説明 (花粉・胞子化石)	157
第9表	山賀遺跡 (その6) No.1～17試料珪藻分析結果	162～168
第10表	山賀遺跡 (その6) No.18～32試料珪藻分析結果	173～182
第11表	顕微鏡写真説明 (珪藻化石)	187
第12表	長原式土器・畿内第Ⅰ様式土器出土遺跡一覧 (河内平野とその周辺)	203～204

付 図 目 次

付図1	1～7区西壁断面図 (水平 $\frac{1}{400}$ 、垂直 $\frac{1}{40}$)
付図2	8・9区合成断面図 (水平 $\frac{1}{400}$ 、垂直 $\frac{1}{40}$)
付図3	10～16区合成断面図 (水平 $\frac{1}{400}$ 、垂直 $\frac{1}{40}$)
付図4	17～24区合成断面図 (水平 $\frac{1}{400}$ 、垂直 $\frac{1}{40}$)
付図5	25～30区西壁断面図 (水平 $\frac{1}{400}$ 、垂直 $\frac{1}{40}$)
付図6	縄文時代晩期遺構概略
付図7	弥生時代前期(1)遺構概略
付図8	弥生時代前期(2)遺構概略
付図9	弥生時代中期(1) (Ⅰ様式)遺構概略

- 付図10 弥生時代中期(3) (Ⅱ~Ⅲ様式) 遺構概略
 付図11 弥生時代後期(1) 遺構概略
 付図12 弥生時代後期(3) 遺構概略
 付図13 弥生時代後期(4) 遺構概略
 付図14 弥生時代後期(5) 遺構概略
 付図15 庄内期遺構概略
 付図16 古墳時代後期遺構概略
 付図17 奈良・平安時代遺構概略
 付図18 鎌倉・室町時代遺構概略
 付図19 江戸時代井戸及び現代暗渠

図版目次

- 図版1 遺跡の位置 1/5000 1980年発行(地図)
 1/5000 1961年撮影(写真)
- 図版2 遺跡の環境と調査状況 山賀遺跡から生駒山を望む
 18区工業用水管の間の残存部(北から)
- 図版3 縄文時代 1区溝1(南から)
 24区河川5底の足跡(北から)
- 図版4 弥生時代前期(2) 1区溝1・2(南から)
 同上(北から)
- 図版5 弥生時代前期(2) 1区溝1断面(南から)
 1区溝2断面(東から)
- 図版6 弥生時代前期(2) 3区溝3(南から)
 3区手前から溝3・6・8・5・10・9・4(南から)
- 図版7 弥生時代前期(2) 3区溝3と堤(西から)
 3区溝3断面(西から)
- 図版8 弥生時代前期(2) 4区溝11(南から)
 4区溝11断面(南から)
- 図版9 弥生時代前期(2) 5区溝13(東から)
 5区溝12と溝13との関係(東から)
- 図版10 弥生時代前期(2) 5区溝12に倒れ込んだ柳の木(東から)
 5区溝12断面(南から)
- 図版11 弥生時代前期(2) 7区溝14・土坑4(南から)
 7区河川2・溝14(南から)

- 図版12 弥生時代前期 (2) 9区溝16・19 (南から)
9区溝16・19 (北から)
- 図版13 弥生時代前期 (2) 9区溝15 (北から)
9区溝18断面 (東から)
- 図版14 弥生時代前期 (2) 13区河川4と堰・溝25・26・27 (南から)
13区河川4に伴う堰 (南から)
- 図版15 弥生時代前期 (2) 16区河川3溝30、下方の砂は縄文時代河川6 (北東から)
16区溝29・30断面 (南から)
- 図版16 弥生時代前期 (2) 28区溝38 (北から)
28区溝38断面 (北から)
- 図版17 弥生時代前期 (2) 5-5区溝42 (東から)
15区溝28 (南から)
- 図版18 弥生時代中期 (1) 7区全景 (南から)
7区1号岡溝墓 (北から)
- 図版19 弥生時代中期 (1) 7区1号岡溝墓主体部 (北から)
同上1号岡溝墓盛土と主体部掘方 (南西から)
- 図版20 弥生時代中期 (1) 1区足跡 (南から)
5-2区畦 (南から)
- 図版21 弥生時代中期 (3) 7区全景 (南から)
7区土坑3土器出土状況、右上は磁石 (西から)
- 図版22 弥生時代中期 (3) 1区道状遺構 (北から)
同上断面 (西から)
- 図版23 弥生時代後期 (1)・(2) 後期 (1) 30区溝3断面 (東から)
後期 (2) 7区土坑・ピット (南から)
- 図版24 弥生時代後期 (3) 3区河川1 (南から)
同上断面 (北東から)
- 図版25 弥生時代後期 (3) 5区大畦 (南から)
同上断面 (南から)
- 図版26 弥生時代後期 (2)・古墳時代後期 弥生時代後期 (2) 5区カニ穴 (南から)
古墳時代後期 7区溝・ピット (南から)
- 図版27 古墳時代後期 30区足跡と畦 (南から)
30区足跡 (北から)
- 図版28 鎌倉・室町時代、現代 鎌倉・室町時代1区道状遺構 (西から)
現代 2区 溝 (南から)

- 図版29 現代 26区そだ暗渠（北から）
29区竹管暗渠（南から）
- 図版30 弥生時代前期土器（1） 7区河川2（1・2）、6・7区河川2 氾濫堆積層（12・15・16）
- 図版31 弥生時代前期土器（2） 7区河川2 氾濫堆積層
- 図版32 弥生時代前期土器（3） 6区河川2 氾濫堆積層
16区河川3
- 図版33 弥生時代前期～中期土器（1）・土製品 13区河川4
- 図版34 弥生時代前期～中期土器（2）・焼土塊 河川3（38）、河川4（39・40）、前期（3）溝23（81・焼土塊）、前期（3）溝24（86）
- 図版35 弥生時代前期土器（4） 前期（2）溝14
- 図版36 弥生時代前期土器（5） 前期（2）溝14
前期（2）溝16
- 図版37 弥生時代前期土器（6） 前期（2）溝19
前期（3）溝24
- 図版38 弥生時代前期土器（7） 前期（2）溝26
前期（2）溝26
- 図版39 弥生時代前期土器（8） 前期（2）土坑5（100～104）、前期（2）土坑6（106・107）
- 図版40 弥生時代前期～中期土器（3） 11区暗灰色砂混粘土層
同 上
- 図版41 弥生時代前期～中期土器（4） 11区暗灰色砂混粘土層（122・123）、9区攪乱層（124）
9区攪乱層（125～128）
- 図版42 弥生時代前期～中期土器（5） 前期（2）溝40（98）、31区褐灰色粘土層（137）、7区褐灰色砂混粘土層（143）
6区暗青灰色粘土層（129・259）、6区明青灰色細粒砂層（260・261）
- 図版43 弥生時代前期～中期土器（6） 31区青灰色微砂混粘土層
31区青灰色微砂混粘土層（136）、中期（1）1号周溝基盛土内（138・139）
- 図版44 弥生時代前期～中期土器（7） 7区褐灰色砂混粘土層（140～142・262）
6区明青灰色細粒砂層（144・145・147）
- 図版45 弥生時代前期（榎痕付土器）～中期土器（8） 7区褐灰色砂混粘土層（263）、7区河川2 氾濫堆積層（264）、前期（2）溝26（265）以上矢印極底 7区白色

粗砂層 (149・150)、31区 灰色中粒
砂層 (153)

- 図版46 弥生時代中期土器 中期(3) 土坑3
- 図版47 弥生時代前期～中期土器(9)・土製品 各層、各遺構出土紡錘車・土製品、中期
(3) 土坑4 (167・169) 後期(3)～(4)
河川1 (203・204)
- 図版48 弥生時代後期土器・土製品(1) 後期(1) 溝1 (170・171)
後期(1) 溝2 (172・174・175)、後期(3)～(4)
河川1 (176)
- 図版49 弥生時代後期土器・土製品(2) 後期(3)～(4) 河川1
- 図版50 弥生時代後期～古墳時代土器 後期(5) 河川1 (205・206)、7区 灰黑色砂混粘土層
(207)、5-5区 暗灰色粘土層Ⅲ (209)、3区 明褐色混
灰色粘土層 (212)、10区 褐灰色粘土混砂層 (213)
- 図版51 古墳時代～室町時代(各時代の土器) 工事中表採 (227)、9区 攪乱層 (228)、3区
明褐色混灰色粘土層 (222・223)、29区 灰色砂
混粘土層 (226)、2区 灰色粘土層Ⅱ (230)、
7区 茶灰色シルト層 (235)、3区 近世溝3
(238)、3区 茶灰色シルト層 (236・266)、6
区 茶灰色シルト層 (267)
- 図版52 平安時代瓦 2区 溝1
3区 灰色粘土層
- 図版53 江戸時代土器・陶器、弥生時代前期胡桃 1区 灰色砂混粘土層 (239)、27区 緑灰色シ
ルト層 (240・242)、5-5区 暗灰色粘土層
Ⅰ (241)、28区 黄灰色粘土層 (243)、2・3
区 茶灰色シルト層 (244・245) 9区 溝19 灰
褐色砂混粘土層
- 図版54 弥生時代前期～中期木製品(ヤス) 前期(2) 溝1 (W-2)、前期(2) 溝3 西堀
内 (W-3)、前期(2) 溝6 (W-4～W-6)、
1～3区 暗灰色粘土層 (W-7～W-9)、中期
(3) 1区 道状遺構内 (W-10)
- 図版55 弥生時代前期～中期の木製品(鏝)、石製品(石庖丁) 溝2
31区 黒褐色砂混粘土層 (S-
33)、5-5区 暗茶褐色粘土層
(S-19)

- 图版56 弥生時代前期~中期石器(1) 石槍・石鏃・削器 前期(2) 溝1(S-6)、7区暗青灰色粘土混微砂層(S-1)、前期(2) 溝30(S-14)、前期(2) 溝42(S-17)、11区暗灰色砂混粘土層(S-21)、7区白色粗砂層(S-27)、中期(3) 土坑4(S-31)
 前期(2) 溝12(S-10)、6区河川2 氾濫堆積層内(S-3・4)、7区灰褐色砂混粘土層(S-25)
- 图版57 弥生時代前期~中期石器(2) 削器・剝片 前期(2) 溝11(S-7)、前期(2) 16区河川3(S-5)、前期(2) 溝42(S-18)、7区灰褐色砂混粘土層(S-24)、7区白色粗砂層(S-26)、中期(3) 道状遺構上面(S-30)
 前期(2) 溝11(S-8)、前期(2) 溝12(S-9)、6区河川2 氾濫堆積層(S-2)、前期(2) 溝14(S-11・12) 前期(2) 溝42(S-15・16)、7区白色粗砂層(S-28)
- 图版58 弥生時代前期~中期石器(3) 砥石・敲石 前期(2) 溝14(S-13)、6区暗青綠灰色粘土層(S-20)、7区灰褐色砂混粘土層(S-23)、7区白色粗砂層(S-29)
- 图版59 弥生時代前期~中期石器(4) 砥石・台石 7区中期(3) 遺構面直上
 9区前期(2) 遺構面付近攪乱層



第I章 調査に至る経過

山賀遺跡は、昭和46年に大阪府土木部都市河川課が実施した楠根川改修工事の際に発見された遺跡で、東大阪市若江西新町～八尾市新家町一帯に広がる縄文、弥生、古墳、飛鳥、奈良、平安、鎌倉、室町と各時代が層をなしている複合集落遺跡である。

当該遺跡の発掘調査は、昭和47年、前年に引続いて下流部約100mの楠根川改修工事が実施されることに伴い、大阪府教育委員会の指導の下に、瓜生堂遺跡調査会によって、この部分の発掘調査が実施された。

結果は川の流れによる浸蝕が激しく、ヘドロの中に遺物は含まれているものの、遺構はほとんど検出されなかった。また、遺物の量も、前年度部分とは比較にならない程少量であって、遺跡の中心部よりは大きく北へはなれた地帯との結論が出ている。

その後、昭和49年度に八尾市教育委員会の手で、現在の金物田地交差点東北角において下水道管渠の堅坑部分の調査が行われたが、ここでも遺物は検出されず、また遺構も認められなかった。ただ、堅坑が地表下約13mまでの掘削を必要としたため、最後まで立ち合うことと、断面観察を行ったところ、ハイガイ等、海産の貝類の認められる層を確認し、河内湾時代の海がここにも達していたことが確認された。

さらに、昭和53年には、東大阪市若江中学校の校舎新築工事に伴う事前調査も、東大阪市教育委員会と東大阪市遺跡保護調査会の手で行われ、古墳時代や弥生時代の遺構が検出されたが、集落の中心部よりは、周辺部分にあたる事が指摘された。

近畿自動車関連の第1次発掘調査は、昭和49年度、山賀遺跡部分5ヶ所に5m×5mのグリッドを設定して行われた。この調査で№3トレンチと呼んだ部分からは、整然と堆積した砂と粘土の層序を確認すると共に、弥生時代前期から中期にかけての、多量の遺物の出土をみた。さらに、中期初頭（畿内第Ⅱ様式）の面では、カメ棺蓋と考えている遺構や、前期の川を検出し、集落の中心部に極めて近い部分ではないかと指摘するにおよんだ。

この様に、小規模、分散的な調査が、当該遺跡地内で実施されてはいたが、集落構造や規模は不明な点が多く、実態が把握されるまでには至っていないかった。

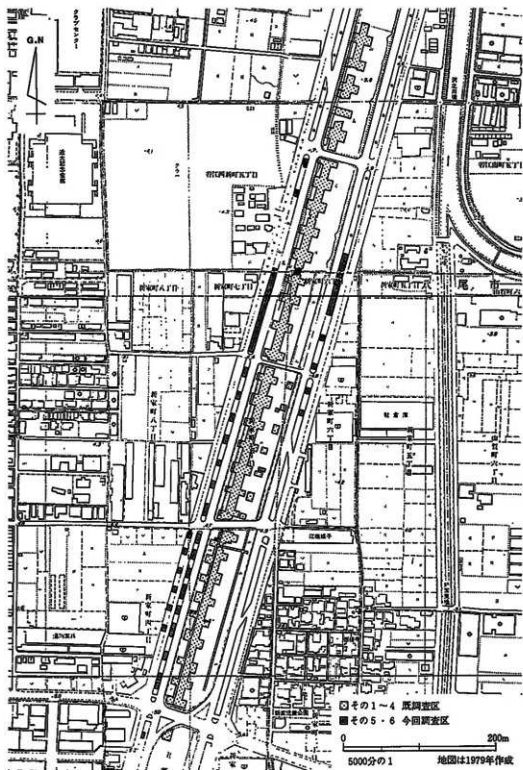
近畿自動車道天理～吹田線の建設予定地内本線部分における当該遺跡の本格的な発掘調査は、遺跡の周知された1kmにおよぶ範囲を、期間、経費の執行、調査担当職員の配置等を考慮し、4分割して実施することとし、昭和54年12月に北半部2調査区（その1）（その2）の調査も開始された。これらの調査で検出された遺構は枚挙にいとまがない程、豊富であり、山賀遺跡の実態が把握されるようになった。

縄文晩期から近代にわたる層位的な調査で得られたこれらの遺構、遺物から、山賀遺跡は河内平野における極めて重要な遺跡であることが明らかとなった。

この4調査区の発掘調査が順調に進む中で、日本道路公団は、この調査対象地が八尾バリアーとして設計されていることを明らかにし、このバリアー建設に必要な部分の調査について、大阪府教委と再度協議することとなった。それによると、本線部分とは別に山賀（その3）調査区を中心に東側にもう一列の橋脚部計8基の建設、及び中央環状線の界行グリーンベルトにONランプ、池田行グリーンベルトにOFFランプ、さらに池田行歩道にも6基の橋脚を建設し、中央環状線のほぼ全幅を高架化しようとするものであった。この時点でまだ調査中であった山賀（その3）、（その4）調査区に、中央分離帯内の本線東側8基の橋脚位置の調査は追加することとしたが、その他の工事を実施するに当っては、池田行グリーンベルトに既設の大阪府水道部が管理する工業用水管φ1650、φ1350及び、池田行歩道部に大阪ガスの管理する既設のガス導管φ600が埋設されており、これらが橋脚部分の築造に支障となることから、日本道路公団は各埋設物管理者と移設について協議し、移設計画の詳細を大阪府教委との間で検討した。

この結果、大阪府水道部が管理する2本の府工業用水管については、発掘調査が完了している公団本線中央部に移設し、この移設に必要な制水弁室とφ1350連絡部及び中央環状線池田行本線下を推進工法で管を布設するのに必要な2ヶ所の到達坑、並びに未調査部分として残っていた楠根川河川敷部分の計5ヶ所のピットの調査を先行して実施し、併せて埋設管移設工事も施工することで合意に達し、昭和58年6月1日付で山賀遺跡（その5）発掘調査委託契約を締結、同年10月31日すべての調査を完了した。一方、大阪ガスが管理する導管については、上記工業用水管の移設が完了した後、同じく本線中央部分に移設すること、この際には切替南端にあたる金物田地交叉点北側歩道部の接続については立会調査で遺物包蔵層の有無を確認をすること、また北端部は中央環状線を横断する推進工法を採用し遺物包蔵層より下に管を埋設するとともに、これに必要な発達坑及び到達坑2ヶ所の調査を実施すること、さらに、これらの調査は、工学的にバリアー部分の橋脚位置の調査と平行して実施することとなった。

以上の協議結果及び府工業用水道管の移設工事の完了に伴い、日本道路公団、大阪府教育委員会、（財）大阪文化財センターの3者は、昭和58年8月26日付をもって山賀遺跡（その6）発掘調査委託契約を締結し、発掘調査に着手した。この調査は、交通量の極めて多い府道中央環状線のグリーンベルトを中心とした部分で実施するものであり、道路管理者である八尾土木事務所並びに大阪府警察本部、八尾警察署等々の施工協議に基づく道路の一時規制や、それに伴う車線の付替え等をその都度実施しながら橋脚部分25ヶ所、ON、OFFランプU型擁壁及びL型擁壁部5ヶ所、料金所関連の管理路階段部分1ヶ所並びにガス管移設に必要な2ヶ所の調査は、昭和60年6月30日、無事現地での発掘調査が完了し、引き続き総括整理を実施し、昭和60年8月31日すべての調査を完了した。



第1図 調査区位置図

第Ⅱ章 位置と環境

大阪府東大阪市若江南町・若江西新町及び八尾市新家町にまたがって所在する山賀遺跡は、東西を生駒山系と上町台地、南北を新大和川と淀川に画された河内平野の中央部に立地する。

現在の河内平野あたりは、縄文海進以前にも平坦地（古河内平野と呼ばれる）が広がっていたが、縄文海進により上町台地の北側から海水が流入し、かつて大きな内湾を形成していたことが明らかにされている。その後、主に旧淀川及び旧大和川水系の沖積作用により陸地を広げ、1704年の大和川付け替え以降、深野池干拓を経てほぼ現在の河内平野ができあがった。それはまた、多様で複雑な微地形変化の累積の結果である。このような地形や土壌の変化は当然植生や動物相の変化も伴い、これらが有機的に関連し合った総体としての自然環境が河内平野における人間の活動の舞台となってきたのである。したがってこれまでにも指摘されているとおり両者の密接な関係には計り知れないものがある。もっともそれを重視する余りか、中には自然環境の変化をストレートに社会の変化に結びつけている論調のものも認められる。しかし、人々は自然の変化に手をこまねいて見ていたわけではないし、自然への対応の仕方その社会のあり方やそれが持つ技術段階によって当然異なってくるから、自然環境は、その歴史的意味を常にそれぞれの社会との具体的な関係の中で評価されねばならないことは論をまたない。

さて、当該地周辺に人々が生活し始めたのは先土器時代に遡る。古河内平野は厚い沖積層の下に埋没し、現状では調査が及んでいないが、周辺の丘陵・台地・洪積段丘・山麓部などで当時の遺物が出土することは珍しいことではない。例えば東大阪市正興寺山遺跡のナイフ形石器、また大阪市長原遺跡のナイフ形石器、藤井寺市国府遺跡のナイフ形石器等々、各地点で当時の遺物が認められる。

その後、縄文時代早期から前期にかけて、ワム氷期の衰退に伴う海進により湾（河内湾）が形成されたことは前述したとおりである。それに伴い狩猟・採集などの活動領域あるいは居住域は徐々に後退して行かざるをえなかったが、またそれは反面漁撈活動の領域を提供してくれたことであろう。縄文時代早期の漁撈具が日本の各地で見つかっていることから想像に難くない。近畿道の調査では八尾市亀井遺跡まで海成の堆積層が認められ海面は最高時で少なくともT.P. 2m (O.P. 3.3m) を越えるものであったことが明らかにされている。しかし、河内湾はまた、海退や旧淀川及び旧大和川水系の沖積作用により再び陸地化していった。海成粘土層の直上には、河川や沿岸流によるものと考えられる砂礫の堆積が普遍的に認められ、最初は沿岸や河口に砂州、三角州が形成されて徐々に陸地化していった様子を如実にうかがうことができる。山賀遺跡ではそれらに相当する灰色砂層から縄文時代中期の土器片が1点であるが出土している。それは山賀遺跡の地における砂州あるいは三角州形成期の上限を物語るにすぎないが、その上層に、晩期前半の遺物包含層とはさまれて、美原遺跡との対応関係などからも後期の堆積と考えられ

粘土層が認められ、そこで溝も検出されていることから、後期には陸地化したものと考えられる。山賀遺跡より北2kmにある新家遺跡でも弥生時代前期の遺構面下に堆積する約1mの粘土層を除いた所で比較的保存状態の良い縄文時代晩期中葉（滋賀里Ⅱ式）の土器が出土しており、その後には陸地化していたと思われる。山賀遺跡近辺では、縄文時代後期～晩期にかけて陸地化が進んだようである。このように、堆積の進行が激しい湾では遠浅が形成され、縄文人は比較的やすく豊富な魚貝類・海藻を手に入れることができたのではないだろうか。また、山賀遺跡では縄文時代晩期の河川から笠が出土しており、河川漁撈を行っていたことも明らかである。同じく晩期の河川の扇斜面に杭が打ち込まれているが、あるいは網などはったものではないだろうか。さらに、晩期の川底では人の足跡と共に鹿の足跡が検出されている。勿論、狩猟も行っていたのであろう。とは言え、沖積面ではまだ居住の跡などを検出していないし、出土している遺物の量も少ない。いっぽう日下遺跡、芝ヶ丘遺跡、鬼塚遺跡、縄手遺跡、馬場川遺跡、恩智遺跡、船橋遺跡、八尾南遺跡、国府遺跡など周辺の山麓・段丘などに集中して顕著な遺跡が認められている。当時としては陸地化が進行しているとは言え決して環境的に安定していると言いき難い河内平野中央部である。おそらく周辺の山麓部等を根拠地とする集団が河内平野にやってきて漁撈活動等を行なったと考えられる。

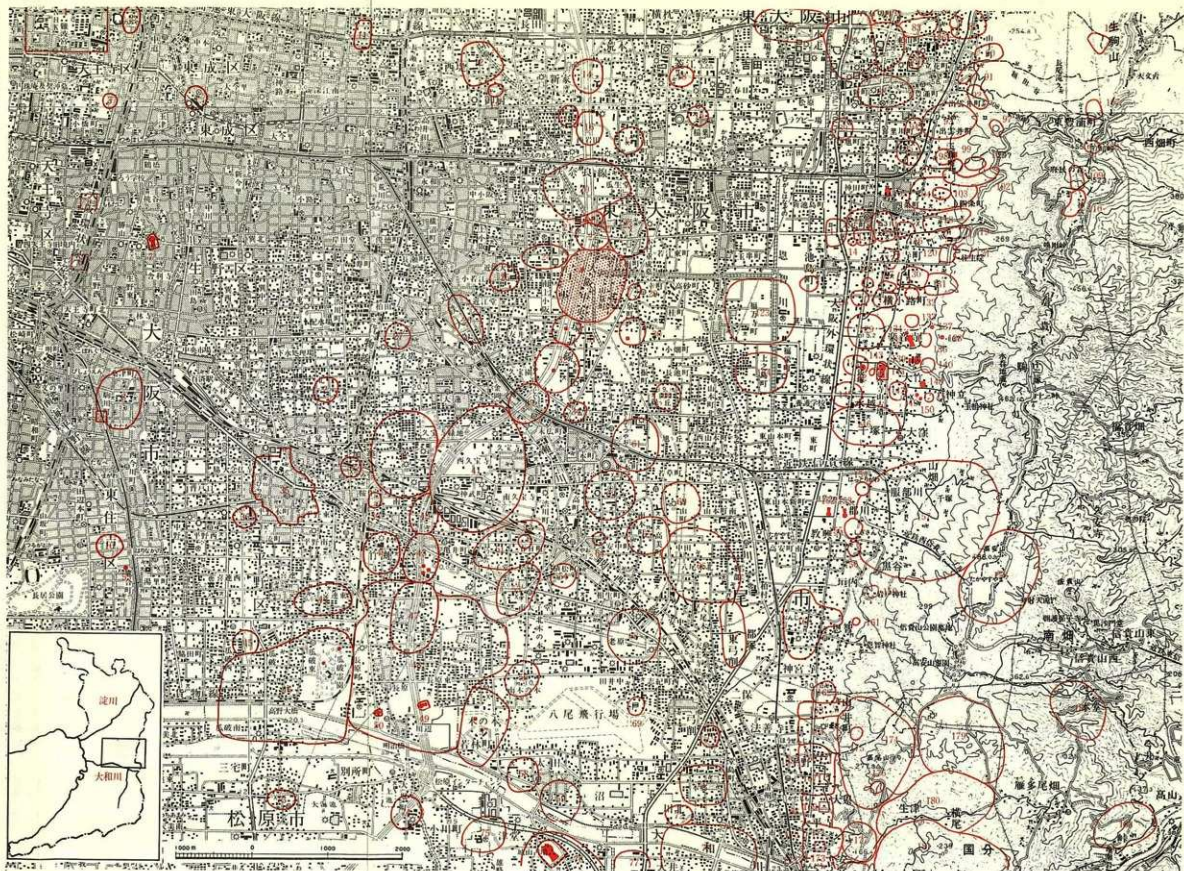
それが、弥生時代前期になると、河内平野で集落遺跡がはっきり認められるようになる。山賀遺跡、美園遺跡では住居址も検出されている。どれくらいの集落が同時併存したかは明らかではない。集落間の距離についても地形等の条件により必ずしも一定でないが、近い場合は山賀遺跡と美園遺跡に見るように1km位の間隔をおくだけで近在していたことは指摘できる。これら集落の立地は、これまでも述べられているように稲作の受容に伴う水田経営を契機とするものである。集落の近くには水田が認められ、また墓地も近在する。墓では、土槨墓の他、方形四溝墓という縄文時代に見られなかった新たな墓制を採用している。今のところ亀井遺跡で認められた前期末の方形四溝墓が最も古い例である。そのような平野部の集落の多くは、生駒西麓を始めとする周辺の山麓、段丘部の集団が移転してきてつくったものと考えられるが、平野中央部の弥生時代前期遺跡から高い率で生駒西麓の胎土を持つ土器が見られるのもひとつはそういったことを背景とする地域間、集団間の関係の深さ、頻繁な交流の結果と言えないのではないだろうか。しかし、彼等の前途は決して楽なものではなかった。彼等は主に河川の後背地にたまった粘土を利用して水田にした。そこは水田に必要な水を得やすいが、また不必要な水による被害も受けやすいという矛盾を本来的にかかえていた。その為、山賀遺跡で検出されたような防水施設を設けたりもしたが、砂に埋まった水田がしばしば検出されることから洪水で被害を受けることも少なくなかったことが解る。その場合彼等はまた新たな場所を捜して水田をつくりなおしたようである。場合によってはそれとともに住居をかえることもあったのではないだろうか。当時、比較的短期間しか続かない集落が認められるのはひとつにはそのようなところに原因があると思われる。このような条件の下ではおそらくそれほど大きな生産力は望めなかったであろう。今のところ河内

平野においては弥生時代を通じて集落の増加などによる生産の量的増大を想定することはできても生産技術の質的飛躍を認めることはできない。

古墳時代になると、全般的に集落数が増加する傾向を見ることができ、一般集落の大規模化というような現象は認められない。これは、水田経営単位の小規模性を反映するものと考えられる。土地条件の相対的安定化とともに亀井遺跡の堤防に見るように、山賀遺跡の弥生時代の溝群と比較して耕地の安定化をはかる一定の技術的達成は見たものの広大な耕地を多数の労働力を結集して耕やすというところまでは至らなかったようである。しかし、社会構造が変化したことは前方後円墳の成立により明らかである。河内平野中央部では前方後円墳は認められていないが、平野部の集団が、古墳に象徴される政治関係の中に組み込まれたことは、山賀、笠塚、美園、友井東、亀井遺跡などで出土した小古墳が良く物語るところである。河内では古墳時代になると朝鮮系の土器や古備等他地域の土器が多く認められるようになり、弥生時代比比べると人や物のより頻繁な移動がうかがわれるが、地域首長（前方後円墳被葬者）を媒介としてより広範囲な交流が行なわれるようになったことを示すものであろう。

古墳時代になって山賀遺跡付近の土地条件が比較的安定してきたことは先に述べたが、飛鳥時代以降になるといよいよその度合を強めたようである。弥生時代だけで2m～2.5mの堆積があり、しばしば厚い砂の堆積が認められ、古墳時代でも場所により1m位の堆積があるのに対し、それ以降現代までの千数百年の間に1mかせいぜい1.5m位堆積しているだけである。これは地盤のレベルの上昇という自然条件に止まらず、制水技術の進歩といった背景も当然考えねばならない。佐堂遺跡では長瀬川に沿って平安時代に築かれた大きな堤防（高さ4.5m復元幅約20m）が検出されている。さて、飛鳥、奈良、平安時代という中央集権的な政治権力が成立、展開した時期である。そのような自然的、技術的、社会的背景をもとに、河内平野における耕地の拡大、整理が目指されたことは想像するに難くない。条里遺構はそのことを端的に物語るものであろう。もっとも、一時期に一斉にそれが実施されたものでないことは、遺跡によって条里遺構の初源の時期に違いが認められることから明らかである。例えば山賀遺跡では奈良～平安時代を上限とするが、美園遺跡では7世紀後半のものが出土している。また、区割りが実施されたとしてもすべてが可耕地として機能しえたものでないことは荘園絵図などの良く示すところである。河内はまた、古代寺院が多いことで有名で、山賀遺跡付近では若江寺、西那鹿寺などが知られるが、これら古代寺院の造営主体が河内平野の開発にあたって大きな役割を果たしたことは想像に難くない。

条里（型）地割は古代以降、時代背景や施行主体を異にしながらも中世、近世から更に近・現代にまで引き継がれ、時には拡大されてきている。例えば、東大阪市池島の条里（型）地割は平安時代を上限とし西岩田遺跡では近世に施行されたものという。旧大和川諸水系の後背地を擁する河内平野は、中世以降さらに耕地が拡大されてゆき、田園地帯を形成してきた。広い田園地帯であったが、旧大和川諸水系により水は豊富に提供された。もっとも下流地域はしばしば洪水に



番号	遺跡名	時代	備考	番号	遺跡名	時代	備考	番号	遺跡名	時代	備考	番号	遺跡名	時代	備考
1	藤波古跡	奈良前期・後期	下層に古墳時代墓等	47	長山遺跡	弥生以降	周溝墓群、7c水田等	93	出雲井古墳群	古墳後期	群集墳	139	花岡山古墳	古墳時代	前方後円墳
2	森の宮遺跡	縄文中期以降	縄文一弥生に貝塚形成	48	長原遺跡	先土器以降	小古墳群在・各期集落	94	狐塚遺跡	弥生	弥生	140	花岡山遺跡	中世	
3	宰相山遺跡	不明	独木舟出土	49	塚の本古墳	古墳前期	前方後円墳?	95	尾池遺跡	弥生一奈良	弥生後期居住址	141	大竹西遺跡	弥生中一古墳	
4	大寺山遺跡	不明	独木舟出土	50	寺の古墳	古墳中期	帆立貝形古墳	96	河内寺遺跡	飛鳥一鎌倉	跡堂の基壇出土	142	鏡野古墳	古墳中期	円墳?、粘土部
5	堂々庭遺跡	飛鳥一平安	金銅佛像出土	51	藤原遺跡	弥生前期		97	藤原遺跡	群集墳	同神社の神域	143	心念寺古墳	奈良前一室町	瓦
6	振野園分寺跡	奈良後期	瓦	52	沙川院寺	飛鳥	礎石・瓦	98	水走氏墓跡	室町一江戸	墓塔あり	144	心念寺山古墳	古墳中期	前方後円墳、長持型石棺
7	前山古墳	古墳中期	前方後円墳	53	太子堂遺跡	時期不明		99	五条古墳	古墳後期	方墳・横穴式石室	145	太田川遺跡	弥生一古墳	
8	森津遺跡	弥生	住居址検出	54	稲松遺跡	古墳以降		100	茶坊楽寺	平安一室町	瓦	146	水越遺跡	弥生中期以降	庄内周溝墓、玉未製品
9	田辺寺寺	奈良前期	瓦	55	酒塚古墳	平安時代	内容不明	101	五条山古墳群	古墳後期	群集墳	147	大竹遺跡	弥生後一古墳	
10	田辺東之町遺跡			56	木の木遺跡	弥生中期以降	古墳時代製塩土器	102	赤坊山古墳群	古墳後期	群集墳	148	向山古墳	古墳前期	前方後円墳?
11	高井田遺跡	弥生	前期(新)一中期初頭	57	八尾南遺跡	縄文以降	庄内期集落・水田	103	山崎古墳群	古墳後期	群集墳	149	安雲寺古墳	古墳後期	横穴式石室
12	西池遺跡	古墳	帆立、土器出土	58	太田遺跡	古墳後一平安		104	山畑遺跡	弥生中期		150	神立墓	奈良	共同墓地
13	藤野寺跡			59	大正橋遺跡	古墳前期	集落	105	飯塚山古墳	古墳後期	双円墳とされる	151	高寺古墳	中世	
14	新宮遺跡	縄文晩期以降	古墳中期が顕著	60	笠原B遺跡	古墳以降	布制土器石棺	106	水光平坊	平安一室町	僧坊跡	152	那珂川古墳	前方後円墳?	横穴式石室、圓筒鏡等
15	意城前遺跡	古墳・平安		61	東郷遺跡	古墳以降	古墳時代集落	107	池光寺僧坊跡	平安		153	那珂川東塚古墳	前方後円墳?	横穴式石室、神鏡等
16	西谷田遺跡	弥生前期以降	庄内期の遺物が顕著	62	藤原寺遺跡	弥生後期以降	周溝墓群	108	北寺跡	奈良一江戸	街道・屋敷跡	154	藤原寺古墳	奈良前・後期	礎石
17	岩田遺跡	弥生以降	円筒埴輪出土	63	小森古遺跡	弥生後期以降	周溝墓など	109	北寺跡	奈良一室町	蔵倉跡	155	藤原遺跡	縄文後一古墳	
18	藤江寺跡			64	龍崎寺跡	奈良一鎌倉		110	神徳寺跡	奈良一室町	金堂跡等出土	156	龍崎寺跡	縄文後・鎌倉	瓦
19	福家遺跡	弥生以降		65	矢作遺跡	庄内一中世		111	北高遺跡	弥生一古墳	弥生後期土器群	157	高安塚古墳	古墳後期	周辺にも後期古墳点在
20	瓜生堂遺跡	弥生前期以降	弥生中期方形周溝墓群	66	川田遺跡	弥生以降		112	五谷田遺跡	弥生一古墳		158	高安塚跡	奈良前期	
21	白鹿寺遺跡	弥生前期以降	方形周溝墓・古墳等	67	東ノ南遺跡	弥生後期以降	埴輪	113	阪上遺跡	古墳時代	散布地	159	岩戸古墳群	古墳後期	群集墳
22	若菜北遺跡	弥生前期以降	各時期の水田等	68	若菜北遺跡	古墳以降		114	又々寺	古墳時代	祭壇遺跡、石製模造品	160	忍智遺跡	縄文晩期以降	弥生
23	若江遺跡	奈良一室町	若江寺、若江城、郡岡	69	由井中遺跡	弥生以降		115	綱手遺跡	縄文中期以降	縄文新器、木の塚古墳	161	忍智銅器出土地	弥生	
24	上ノ大遺跡	弥生以降	弥生後期群葬	70	弓削遺跡	縄文晩期		116	上ノ万寺遺跡	弥生一室町	弥生後期土器群	162	神宮寺跡		
25	小ヶ江遺跡	弥生以降	古墳前期土器一括	71	本郷遺跡	縄文晩期以降	弥生中期周溝墓等	117	八幡山遺跡	古墳時代		163	山ノ井遺跡	弥生・中世	
26	赤力遺跡	古墳以降	円筒埴輪出土	72	川北遺跡	弥生以降	弥生中期土器群	118	花草山古墳群	古墳後期	群集墳	164	平野遺跡	弥生	
27	衣取遺跡	古墳		73	三毛遺跡	古墳以降		119	五里山古墳群	古墳後期	群集墳	165	大塚遺跡	古墳以降	
28	山賀遺跡	縄文後期以降	本書報告	74	大塚遺跡	先土器以降	奈良時代遺物群	120	岩滝山遺跡	弥生一古墳	弥生後期居住址	166	三宅寺跡	奈良前期	大里寺跡
29	西野野寺	内容不明		75	津堂遺跡	古墳以降		121	住生院金堂跡	鎌倉一室町	瓦出土	167	大黒野寺	奈良前期	
30	笠原A遺跡	弥生以降	古墳、奈良・中世集落	76	古市古墳群	古墳	大冢墓を含む古墳群	122	池島東遺跡	古墳		168	大黒野遺跡	古墳以降	
31	友井東遺跡	弥生前期以降	古墳など	77	西大井遺跡	先土器以降	各時代の遺構、遺物	123	池尾遺跡	縄文以降		169	山下殿寺	奈良前期	
32	奥園遺跡	縄文以降	弥生前期居住址、古墳	78	船橋遺跡	縄文以降	各時代の遺構、遺物	124	福乃寺遺跡	中世以降		170	太平寺遺跡	飛鳥以降	
33	佐受遺跡	弥生中期以降	古墳時代と中世の集落	79	水郷遺跡	弥生以降		125	コモ田遺跡	古墳時代		171	太平寺跡寺	奈良前一中世	智識寺、太平寺跡
34	富町遺跡	平安一室町	穴太夷寺関係	80	長尾川遺跡	縄文晩期以降	縄文・弥生土器共伴	126	西池遺跡	古墳時代		172	安堂遺跡	古墳以降	
35	平野塚集落	中世		81	福留遺跡	弥生中期以降		127	北園遺跡	古墳時代	散布地	173	安堂庵寺	奈良前期	家原寺
36	平野野堂遺跡		散布地	82	西ノ辻遺跡	弥生以降	弥生・中世期著	128	馬場川遺跡	縄文中期以降	縄文・弥生期著	174	平野古墳群	古墳後期	群集墳
37	長楽庵寺	平安	散布地	83	神並遺跡	縄文以降	弥生中期、中世等顕著	129	赤吉寺遺跡	古墳		175	平野山遺跡	古墳	
38	前山遺跡	弥生一古墳	弥生一古墳周溝墓群等	84	正興寺山遺跡	先土器		130	半堂遺跡	弥生一古墳	大賀寺古墳	176	高尾山遺跡	古墳	群集墳
39	龍作庵寺	奈良一平安	礎石・瓦	85	神並古墳群	古墳後期		131	淨土寺谷古墳群	古墳後期	群集墳	177	太平寺古墳群	古墳	群集墳
40	竹渡遺跡	古墳時代	穴瓦住居	86	新宮古墳群	古墳後期		132	真丘遺跡	古墳時代		178	安堂山古墳群	古墳	
41	久室寺遺跡	縄文以降	周溝墓、漢式土器等	87	藤由寺跡	古墳		133	萩山遺跡	古墳前期?	円墳	179	藤多尾畑古墳群	古墳後期	群集墳
42	亀井北遺跡	弥生以降	調査中	88	鬼塚遺跡	縄文晩期以降	縄文・弥生土器共伴	134	赤山遺跡	古墳前期?	円墳	180	生澤橋古墳群	古墳後期	群集墳
43	亀井南遺跡	弥生前期以降	集落・周溝墓・古墳等	89	輪立遺跡	弥生		135	西の山古墳	古墳前期	前方後円墳	181	平尾山古墳群	古墳後期	群集墳
44	喜連東所遺跡			90	鶴田山古墳群	古墳後期		136	大光寺山遺跡	鎌倉一室町	寺跡?	182	本堂古墳群	古墳後期	群集墳
45	瓜破北遺跡	弥生前期以降	周溝墓など	91	みかん山古墳群	古墳後期		137	横山古墳	古墳後期	群集墳	183	峠古墳群	古墳後期	群集墳
46	瓜破遺跡	弥生前期以降	古墳・瓜破院寺含む	92	登瀛谷古墳群	古墳後期		138	中谷山古墳	古墳	箱式石棺				

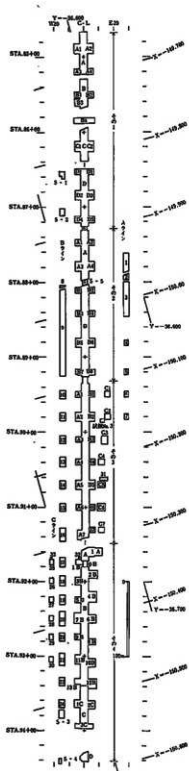
なやまされたようである。その為1704年には大和川の付け替えが行なわれた。その結果、洪水になやまされることは少なくなったものの、一部の地域では、水不足になやまされる結果をもたらした。山賀遺跡で検出された近世の井戸群は、そのあらわれである。また河内湾の名残りである深野池周辺が干上がり新田の開発を招いたことも大和川付け替えがもたらしたひとつの大きな結果であった。ここには、河内平野の現地形ができあがった。

第Ⅲ章 調査の方法

山賀遺跡における調査も、(その5、その6)を迎えたわけであるが、今回の調査は前回のトレンチ調査部の周辺に大小調査区が38ヶ所存在するというものである。(その5)の場合、調査区の呼称は5-2区などと始めに5を付している。(その6)の場合は、Aライン、Bライン、Cラインの順に北から1~30までの番号を付し、23区などというように呼称する。調査途上で新たに加わった調査区については31から番号を付した。遺構については全調査統括して遺構面ごとに番号を付けている。

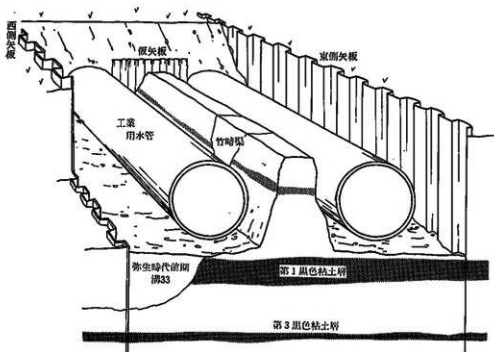
調査は深部に及ぶため従来同様鋼矢板を打設して調査区を区切って行なった。ただ、Bラインでは全体にわたって2本の工業用水管が埋設され調査方法に若干変更がなされた。第4図に示すように工水管は調査区を全線南北に縦断するように埋設されているので、その周囲は大きく破壊されており、攪乱は弥生時代前期面付近まで達している。ただ、2本の管の間には、平均して幅1mほどの未破壊部分が残存しており、ここでは江戸時代前後から下が破壊をまぬがれていた。しかし、細長く残っているだけであるためこの部分については、主に断面の観察に重点をおいて調査を行なった。断面は、残存部の西側の壁面を調査することにした。調査区の北側と南側では管のため本格的な矢板の打設は当初からは行えず、とりあえず管の間に土止め用の簡易の仮矢板を打った。そして中央残存部の調査終了と共に工水管の切断・撤去が行なわれ、その後北側と南側にも矢板を本格的に打設して、より深部の調査へと進んだ。

具体的な調査としては、基本的に一層づつ掘削し、各層上面で遺構の検出につとめ、その検出面と他調査区の遺構面との対応、さらには(その1)~(その4)調査区の遺構面との対応などを検討しながら行なった。広範囲にわたり、しかも調査区が多数存在し、相互に分析され



第3図 調査区呼称図

ている場合に遺構及び遺構面の時期決定は、遺構面の基盤層位の連続性把握が重大なポイントとなる。従って、平面での遺構検出と共に断面観察にも注意をはらった。しかし、沖積地の調査では遺構面が複雑に重層的に存在しているため、遺構の切り込み面や遺構面の連続性の把握は極めて困難で今回の調査でも充分には把握しきれなかったというのが正直なところである。断面は原則的に全調査区の西壁及び北壁を観察し、実測した。ただし、Bラインでは先述のように工水管の破壊が進んでいるので上半は中央残存部のみ、下半に限って西壁と北壁の断面観察・図化を行った。このようにBラインでは上半と下半で図化した断面の位置も向きも異なるという結果になったので付図2～3に示すような合成断面図を作成した。この図は下半部西壁の断面に上半部分の中央残存部の断面を継いだものであるが、継ぐ時、上半部については東向きに作成した図なので下半に合わせて西向きとなるように図を裏から投影する形に作図し直して合成した。したがって下半と上半に隙間ができたが重複することは避けられなかった。中央残存部の断面をそのまま下まで連続させて作図することも考えられたが、中央残存部そのものが自重や雨水で崩壊する機会が多い上、工水管撤去時の作業でどうしても新たな破壊がすすみ作業・調査に困難が伴うことが予想されたためその方法は採用しなかった。またAラインとBラインの断面図を比較するとわかるように、Aラインで水平な堆積がみられる時代でもBラインでは層の歪曲が激しい。これは、工水管埋設時の影響によるものと思われ、極端な場合は、層自体にしゅう曲と亀裂が生じ、ズレ



第4図 Bラインにおける調査区状況模式図

が断層となって不整合を呈してしまう部分が多くみられた。結局のところ、Bラインの上半部についてはあまり有効な調査対象にはなり得なかったということである。

Cラインにおいては、全調査区の西半部にガス管が埋設されていた。掘乱は地表下約1.5mほどまでであったので弥生時代中期以前に関してはほぼ完全に残されていた。31区は、当初の予定になく、鋼矢板の打設を行わずオープンにした。工事による掘削深度を越える弥生時代前期以前に関しては安全も配慮して調査を行なわなかった。32、33区は、ガス管移設に伴う調査であるが各平面で2×3m、4.5×2.5mと非常に小さな調査区である。従ってほとんど断面の調査に終始した。

土層の名称は、各調査区ごとに付し、同一層でも調査区によって異なる名称を持つこともある。これは、調査担当者の主観の他に実際連続する層でも場所によって質や色が変わっていることがあるためである。色については、4～7区を除いてほぼ『標準土色帖』（財団法人日本色彩研究所発行）によった。質についてもできるだけこまかく記述したが、微妙な判断（例えば微砂混粘土か細砂混粘土かなど）ではその時々感じ方に左右されている場合も多いであろう。とは言え、ともかく山賀遺跡のような沖積地遺跡の断面観察では、単に層位学的な観察にとどまらず、堆積状態や堆積物の緻密な観察も重要である。砂層と言っても粗粒砂と細粒砂では堆積する流れの速さが当然異なるため、それが河川であった場合流速の違いが河川利用に影響を及ぼしていたことが考慮される。また粘土と言っても、植物遺体等の薄層が何重にも微粒砂を伴いラミナを見せて堆積するものや、黒色粘土層にみられたように、ラミナなどは混らず均質で乾燥時のひび割れ痕が上面に見られるものなどさまざまである。そのような各層の微妙な色や質、堆積状況の違いなどは当時の自然環境を考えるにあたり極めて有効な資料となるに違いない。また堆積状況や堆積物の観察に加え、微地形の把握にも務めた。例えば河川などでは、どの時点で切り込み、埋没時にはどうなっており、周囲に自然堤防や後背低地が形成されていないかなどに留意した。自然環境や地形環境の変化は人間の生活に大きな影響を与えるものであり、古環境の復原は人々の踏行を解するにあたり欠くことのできない条件である。

ところで、このような緊急調査では調査の動機及び調査区の設定はすべて工事関連側の要請でなされているため、調査区の分析、調査方法の制約など困難は少ない。各々の調査区を基本的に自立させ、遺構面の検出、土層の把握を行い、調査中あるいは調査後に調査区相互の遺構面の同時代性や土層の連続を確かめてみた。しかし、各々に遺構面も土層も調査区ごとに異なる。ある調査区で遺構があってもその隣の調査区では遺構もなくその面の基盤土層さえ不明になる場合も多い。従って現時点でも不明な点は多い。同時に明らかになったことも決して少なくない。以下、前回調査の結果と共に総合的配慮をもって今調査の報告を行うこととする。

第Ⅳ章 遺跡の概要

山賀遺跡は河内平野の中央に位置する複合遺跡である。旧大和川の沖積地に立地し、縄文時代から現代に至るまで、人間の踏行為の痕跡をその厚い堆積物の中にとどめている。以下、近畿自動車道建設に伴う発掘調査の成果を中心にその概要を記す。

当該地周辺は縄文海進により海面下に没したことが知られるが、それ以降、山賀遺跡付近が再び陸地化するのは、縄文時代後期～晩期頃のものである。後期にはすでに黒色粘土層上面に溝が検出され、それが人工的なものとなると、わずかであるが人の活動の痕跡も見いだすことができることになる。さらに、晩期では、河川や自然堆積層中に若干ながら、遺存状態良好な土器が認められ、また河川に杭が打ち込まれていたり、河川の底に足跡が残されていることなどから山賀遺跡周辺が縄文人の活動領域の一面をしめていたことは明らかである。当時の不安定な自然環境を考えると、恐らく、河川や河内湾での漁撈が活動の主体を占めていたのであろう。晩期の河川から出土した笠や、河川に打ち込まれた杭は河川漁撈の実態を示すものとして興味深い資料である。また、そのような環境と共に、遺存状態が良く、埋没地点近くでの使用をうかがわせる晩期の土器が生駒西麓産の胎土を持つことから、主に生駒西麓を拠点とする集団による漁撈活動を想定できる。

そして、山賀遺跡が、生産と居住の場として定着するのは弥生時代をまたねばならない。土器様式で言うと畿内第Ⅰ様式中段階の時期である。以後、人々は沖積作用によって形成された粘土層を利用し、灌漑水路を掘って河川から水を引き、水田を経営するようになる。山賀遺跡で検出された畦畔、溝、河川また溝に設けられた堰などはそれを具体的に物語るものである。（もっとも稲作だけを生業として行っていたのではない。前期河川から出土した土煙や前期～中期初期にかけてのヤスの出土は漁撈を示唆する。）しかし、沖積作用が活発に進んだ弥生時代においては、耕地はかなり不安定な状況におかれていたと言える。水田が砂や粘土で覆われたり、時期により位置を変えると云ったようなことがしばしば認められるのはその為である。しかし、それに対して彼等も手をこまねいて見ているわけではなかった。山賀遺跡では、何条もの、堤を伴う溝を平行させて掘った極めて特徴的な弥生時代前期の遺構が認められている。これらについては自然河川や水田との有機的関係が看取され、水田を河川の氾濫から守る堤防兼排水路としての機能を持つものであったと考えられる。場合によっては用水路の役割を果たしたかも知れない。また、後期にも河川に沿って堤と思われるものをつくっている。このように水田経営を始めた彼等は、その恒常的管理の必要性から必然的に水田の近くに集落を構えることになった。近畿道関係の調査では前期と中期後半の掘立柱建物を検出し、集落の一部を明らかにした。それらはいずれも水田域よりは地形的に若干小高くなる自然堤防等に立地している。しかし、中期前半あるいは後期の集落は確認できず、時期により集落が頻繁に移動している様子がうかがえる。前述し

た水田の移動と同様、自然環境の不安定さに大きく起因するものであろう。ちなみに、近畿道の東方約200mの地点で、楠根川の改修工事の際、多量の土器が出土しており、集落の存在が想定される。また彼等は死後には集落近くに葬られた。これまでの調査では中期初頭の方形四溝墓が10基、中期後半の木棺1基、同じく土器棺墓2基が検出されている。それらはいずれも群をなし、集落や水田に隣接しながらも墓域を決めているようである。集落同様、水田よりは少し小高い場所につくられている。

庄内期では、独立柱建物が2棟検出されている。近くに細い溝を伴い、建物あるいは居住域を区画しているようにも見える。

古墳時代後期になると6世紀中葉に方墳が築造されている。周濠を伴い、墳丘規模は13m×12mを測る。主体部は箱形木棺を使用したものが1基検出されているが、位置的に中心からはずれており、本来別の主体部があった事も考えられる。棺内からは、ガラス玉80個・鉄鏃(長頸式)10本が出土し、棺の小口上には須恵器の杯蓋と壺が供献されていた。また、山賀遺跡の別の地点ではそれより時期的にやや遡る6世紀前葉の円筒埴輪を採集しており、系譜的につながる小古墳が近在する可能性を指摘できる。古墳の南約100m付近では土坑群が検出されており、土墳墓かとも考えられるが確証はない。その他、井戸・溝・ピットなどが若干検出されている。

奈良時代以降は畦や溝、井戸等農耕関係の遺構にはほぼ限られるが、いくつか興味を引く点を時代を追って紹介していく。

奈良～平安時代面では検出された溝や畦のなかに現代方格地割と方位を同じくするものが認められる。遅くとも平安時代にはこの地域に条里の施行が及んだことが想定できる。また、里境に位置し、奈良～平安時代、鎌倉～室町時代、江戸時代、現代と同じ位置に重ねて掘られた溝も認められている。古代以降、現代まで条里地割が引き継がれてきた様子がうかがえる。

鎌倉～室町時代の溝、畦は殆んど現代方格地割と一致する方位を示し、それらの分布状態から調査域全域にわたって耕作地が広がっていたと考えられる。また条里坪境畦交差部に近い畦の下から馬歯を伴う土坑が検出されたのは兩乞いの儀式を示すものであろうが、興味深い事例である。その他、人や牛の足跡・井戸・土坑・ピット群などが検出されている。

近世に至っても基本的に耕作地として機能しているが、特に注意を引くのは井戸の多さである。調査区内だけでも23の井戸が認められている。1704年の大和川の付け替えに伴う水不足に対応して掘られたものであろう。また、主に綿を栽培したと考えられる振き揚げ田も検出している。

現代の特徴的な遺構としては、水田耕土下に埋められた暗渠が見られる。現代方格地割の方位に平行させ、東西、南北に土管・竹・そだなどをそれぞれ埋め込んでいる。1944年、敗戦近くに生産の増大を計って計画的に敷設されたものである。

註(1) 南に隣接する友井東遺跡では現代方格地割と方向を一にする奈良時代の溝・畦畔が出土している。大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター『友井東その1』(1984)

第Ⅴ章 層位と遺構面

山賀遺跡として調査した区間は、延長1Kmに及び、深さは地表下約4mである。その約4mの堆積層中に縄文時代後期から現代にかけての各時代の遺構が検出される。そこで問題となるのは各遺構の同時代性の決定であり、遺構から出土した遺物による把握のほか、それらの遺構が同一の基盤層から掘り込まれているという遺構面の把握が時期決定の重要なカギとなる。しかし、総延長1Km、数次にわたる調査結果においては必ずしも調査区間における整合的な層位関係の把握はなされていない。層の認定・名称の不統一、遺構面の連続把握の不整合、さらには場所によっては(極端な場合10mも離れると)まったく堆積層位が変化することなどが同一遺構面の認定を困難なものにしている。また、同時期遺構面が一部では二面・三面に分離したり、逆に同一遺構面に複数の時代の遺構が混在することもある。従って、以下に述べる層位と遺構面の関係は、不明確な点が少ない。既述の調査区(その1~その4)と今回報告する38ヶ所の調査区との関連も各々すべての調査区相互で致密な対応関係が把握できているとは言いがたい。不明な点はさらなる検討や後の調査で整理されてゆくことが期待される。なお層位は、全体に南が高く、北へ約1m低くなっている。

縄文時代後期

縄文時代後期に対応する遺構面は、第4黒色粘土層上面である。1・2区で溝が検出されただけであるが(その1)調査区では、本層から切り込む自然河川も報告されている。縄文時代後期に比定する積極的根拠はないが、(その3)報告によれば第4黒色粘土層以下の砂層で縄文時代中期末の土器片が出土し、第3黒色粘土層付近であちこちに存在する自然河川から晩期の土器が出土しているので、後期のある時期に想定しておくこととした。

縄文時代晩期

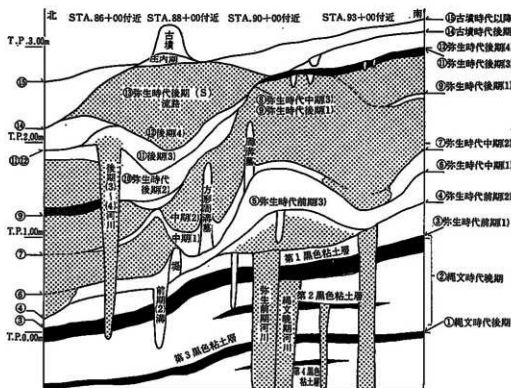
縄文時代晩期に比定される層は、第2黒色粘土層~第1黒色粘土層までである。この間の堆積は概して緑灰色粘土・シルト・微砂層などと呼ばれる層である。あちこちに第2黒色粘土層やその上の緑灰色粘土から切り込む自然河川が存在しており、粗粒砂が埋積している。この河川の堆積は、ゆるやかに周囲の堆積層に連続しているのが普通であり、明瞭に肩がとらえられないような河川も多い。(その4)調査区では、第2黒色粘土層を切り込む河川から滋賀里Ⅱ式の土器が出土し、第1黒色粘土層内から滋賀里Ⅲ式の土器が出土しているが今回の調査では土器は出土していない。

弥生時代前期(1)

弥生時代前期(1)とする遺構面は、第1黒色粘土層上面であるが(その2)調査区で溝・河川が検出されたのみで今回調査区も含めて他の調査区では何ら遺構は検出されなかった。

弥生時代前期 (2)

弥生時代前期 (2) の遺構面は、全調査区を通して第1黒色粘土層上に堆積した灰色系の粘土層上面をそれとする。(その1) 調査区では暗灰色粘土層、(その2) 調査区では淡青灰色粘土層、(その3) 調査区では暗灰色緑色粘土層、(その4) 調査区では暗青灰色粘土層と呼称されている層の上面である。全体にわたって河川・溝などがみられ、北では水田となる。今回の調査でも溝や河川はすべてこれらの層上面から切り込まれているのが確認された。ただこの前期 (2) 基盤層は、細かく見れば5~7区のように2~3層に分層可能な場合もある。層名も、暗青灰色粘土層 (4・7区) 暗灰色粗砂混粘土層 (5区)。暗緑灰色粘土層 (1~3・13・16区)、緑灰色粘土層 (14・21・27・29区) など様々に呼称される、複数の河川と溝の複雑な切り合い関係が認められるがこれについては全体を見わたす新古の関係が明らかにはならなかった。少なくとも7区では、河川2が埋没後溝12が掘られる。16区では溝30を溝29が切り、そばを流れる河川3がどの時点で機能し、埋没したのかを明確に指摘し難い。21区では明らかに河川3の埋没後その砂の上に溝33が掘られているなど、調査区単独でその先後関係を指摘しなくても全体の同時期性や順序だてた新古の関係がわからないのである。特に(その3) 調査区の内容がつかみにくい。とにかく、第1黒色粘土層上面に灰色系の粘土が堆積した後に、縄文時代から継続する河川、新たに出現した河川が流れておりその河川との関連で溝が掘られた。あるものは河川に沿って幾重にも並



第5図 全体遺構面模式図

列して掘られ、あるものは河川からの導水を目的に掘られた。時がたち、河川が埋没し流心や流路が移動した後、今度はその新しい河川に関連して溝が掘られる。この時埋没した古い河川を溝が切ることもあるであろう。また河川は、氾濫により、粘土層や砂層を周辺に堆積させることもあったであろう。従って溝の切り込み層は当然複数存在することにもなるのである。溝だけでなく、11区周辺では河川1埋没後の微高地に居住城が設定されることもあった。(その3) 調査区ではこの付近の河川内から大量の遺物が出土し、孤立柱建物も検出されている。このような複雑な堆積と数時期にわたる遺構の切り合いが前期(2)遺構面の把握を困難にしている。今回は、それらを明確に把握することが不可能なことから、時期的にはこれらの遺構のすべてを前期段階に限定できそうな様子から前期(2)面として一括で取り扱うこととした。

弥生時代前期(3)

弥生時代前期(3)は、12区のみで設定した。前期(2)の項では新段階を前期(2)として一括したが、12区では明らかに切り込み層の異なる溝が検出されたためである。

弥生時代中期(1)

弥生時代中期になると先の河川はほとんど埋没してしまう。前期遺構面上に粘土層が堆積した時点でその上面を中期(1)面(第Ⅰ様式期)とする。今回の調査では中期(1)基盤層を暗灰色粘土混微砂層(7区)、暗オリブ灰色砂混粘土層(1区)などに比定した。(その1)調査区では茶灰色微砂質粘土、(その2)調査区では暗茶褐色砂混粘質土、(その3)調査区では暗灰色粘土層、(その4)調査区では淡黒灰色粘土・暗灰色粘土などがこの中期(1)に対応する基盤層と考えられる。北部の水田域は前期に比して拡大し、南部でも水田が営まれる。(その2・3)調査区付近では、基城となるようで、方形周溝蓋が多く築かれている。ただし、水田と方形周溝蓋がⅠ様式期のものであることは指摘できるが同時併存したかどうかについては明らかにできない。その点は他の遺構面についても同様の理解が求められる。なお、(その3)調査区では本時期も遺構面が二面指摘されているが、主な遺構が重複しないので一括して中期(1)として扱った。

弥生時代中期(2)

中期(1)に比して中期(2)はいまひとつ目立つ遺構がない。(その1)調査区では、灰茶色粘土・暗灰色微砂質粘土を基盤層にして、一部に足跡・土坑がみられたにすぎない。この付近では中期(1)との間に流水堆積をはさむ。(その2)調査区では、茶灰色粘質土・灰褐色粘質土を基盤層として、水田・溝・足跡がみられる。この付近になると中期(1)直上層が中期(2)の基盤層となっている。(その3)調査区では、対応する層がはっきりしない。部分的に基盤層が分かれていたかも知れないが、中期(1)の時期は前期の河や溝の影響で凹凸が激しく残っているためその凹凸の基盤層を2つの遺構面として認識していたのかも知れない。(その4)調査区では南半部で暗灰色シルト質粘土を基盤とする水田・溝が検出されている。今回の調査では1~3区において緑灰色粘土を基盤とする足跡群が検出されている。これを中期(2)として把握し

た。しかし以上すべての各面が全体的に同時併存したかどうかは確信がない。時期は(その2)で中期後葉に比定されており、中期(3)と同じである。

弥生時代中期(8)

中期(3)という遺構面は今回新たに設定せざるを得なくなった面である。(その3)調査区では第Ⅱ様式期の面を厚く覆う流水砂層上面で第Ⅲ～Ⅳ様式期の遺構が検出されている。今回の調査でも主に7区において土坑・溝などが砂層上面で検出された。基盤となるこの厚い流水堆積は、全体をみわたしてSTA.88+40付近から南には必ず存在している。(その2)と(その4)で中期Ⅱとされた遺構面は、この厚い流水砂層の下に存在するもので(その3)の第Ⅲ～Ⅳ様式面と連続することはあり得ない。従って(その3)報告240ページに示された(その2)中期Ⅱ—(その3)第Ⅲ～Ⅳ様式面—(その4)中期Ⅱという対応図式は今報告で訂正しておきたい。すなわち、(その3)付近では中期(2)を覆う厚い流水層上面に中期(3)遺構面が存在するということである。他の地区では遺構は検出されていないようである。なお(その2)の報告によると、この流水層(14層、淡灰色砂)上の暗青灰色粘土(13層)上面をも中期Ⅱとし、遺構面が南半部で2面に分離するのを一括したと述べている。つまり分離した上の面も中期(3)にあたることになる。(その2)でいう13層については淡灰色砂は上面では徐々に暗青灰色粘土に変化する部分があるので洪水堆積上面を遺構面とすることに矛盾はない。

弥生時代後期(1)

後期(1)は、中期(3)と同じ基盤層で検出される。(その1)調査区では黒色砂混粘土・灰青色粘土層等で溝や自然河川が検出され、(その2)調査区では中期(3)と同じ暗青灰色粘土層上面、(その4)調査区では黒灰色粘土層上面で水田が検出されている。(その3)調査区では後期の遺構・遺物はほとんど出ていない。(その2)と(その4)調査区で2～3枚の遺構面が検出されていることを思えば不可解ではある。弥生時代後期を考える上でひとつ注目したい点は、有機質のためか黒く変色した層がほぼ全体に認められることである。この層は鍵層になる可能性があり、黒色あるいは黒灰色、灰黒砂混粘土が指標とされているし、(その2)調査区では灰黒色砂混粘質土が後期前葉に比定されている。(その3)調査区の報告にはないものの、今回の周辺調査では、1～4区、10～16区で同様の層が認められている。(その4)調査区では、暗青灰色粘土と報告されている層がこれにあたると思われる。問題はこの層が同一の連続する層であった場合、どの時期に当たるかという点であるが、今回の調査でみた限りでは、7区において後期(1)の遺構面を覆っている。ただその層の直上には灰色粘土層があって、それはすでに古墳時代後期の基盤層となっている。25区では黒色砂混粘土層上面で6世紀の須恵器片が出土し、30区では直上層から布留式と思われる土師器片が出土している。(その4)調査区ではこの層を基盤として後期の溝群が検出され、これを本報告では後期(3)～(4)あたりに比定した。つまり、後期(1)遺構面を覆った後、この層上面は後期(2)以後古墳時代までの遺構面としてとらえることができる。もっとも25区を除いて9区～30区では、この黒色の層上に灰色粘土、褐灰色砂混

粘土などの堆積がみられ、須臾器や布留式土器を包含する場合があるので古墳時代後期についてはこれらの層を基盤とすると考えたい。

弥生時代後期(2)

後期(2)は1~3区で認められ、後期(1)の上に堆積する暗オリーブ灰色粘土層を基盤層とする。溝と足跡群が検出されたが、この面と対応すると考えられる面は様々な角度から検討したものの他地区でも前回調査区でも認めていない。つまり、部分的に堆積した層上の一時的な遺構面なのであろう。

弥生時代後期(3)

先に後期(1)の項で述べた黒色の砂混り粘土層上面を指標とする面である。すなわち、今回の調査では灰黒色砂混り粘土層などと呼ぶ層上面であり、3区ではオリーブ黒色粘土層を基盤層としている自然河川が検出されている。4・5区ではその自然河川の続きと堤が検出されているがこの調査区では灰黒色砂混り粘土層上に薄く砂が堆積(4区の暗灰色粘土混中粒砂層、5区の黄色粗粒砂層)して基盤層を形成している。(その1)調査区では、暗灰色粘土層・黒色砂混り粘土層などが基盤層となって水田・自然河川・堰が検出されている。(その2)調査区では緑青色(青灰色)粘土を基盤とする水田・溝が検出されており、全体に自然河川とそこから取水する溝と水田、そして畦畔という組み合わせがこの後期(3)面を把握する根拠となったものである。(その4)調査区では暗青灰色粘土層上に多数の溝が検出されたが、後期(3)に対応すると断定できないので後期(4)にもまたがって付図では示した。Bライン・Cラインの調査区では、対応すると思われる黒い層はあるものの、ほとんど遺構は出ていない。

弥生時代後期(4)

(その1)調査区では後期(3)と同じ景観が継続される。4~6区でみられた後期(3)を覆う微砂層が後期(4)に対応する段階であり、1~3区では暗オリーブ灰色粘土層までが堆積するようになって後期(3)の河川1が拡張する時期ととらえた。(その2)調査区では、やや様子が変わり、自然河川・足跡がみられる暗灰色粘土層上面に対応するものと思われる。

弥生時代後期(5)

後期(5)は(その2)調査区全面を河川がおおう段階である。これは(その2)報告では言及されていないが6層(淡灰色砂)の堆積がそれにあたると思われる。この堆積は他の地区でみとめられないので(その2)調査区を縦断する河川によりもたらされたものと判断している。これを把握するきっかけとなったのはS.T.A.87+50に位置する杭列である。報告では、用途を断定していないが、明らかに6層中に検出されておりしがらみと考えるとよいと思われる。このようにみえてくると後期に關しては、自然河川あるいは流路が次第に西進してきたことが想定される。第1に後期(2)以降1~3区にみられる40・41層である。砂礫層あるいは中粒砂層が堆積しているが他の地区ではみられない。その後、後期(3)~(4)にかけて河川1が流れ、後期(5)の段階で(その2)調査区で流路がみられるようになるわけである。直接的な根拠がなくとも、堆積状況やレベルの検討により先のような復原をすることが可能である。

庄内期

(その2) 調査区のみで指摘されている。掘立柱建物・溝などが検出されているがごく一部の地区に分布するにすぎない。

古墳時代後期

古墳時代前期～中期にあたる明確な包含層、遺構面は、ほとんど確認されていない。しかし、今回の調査で10区の褐灰色砂混粘土層、9区の褐灰色砂混粘土層などから布留式土器が出土しているのでこれを古墳時代後期直前の包含層と考え同時に後期の基盤層と把握することにした。この層は一連のものと考えますがBライン16区以北に見られる。この層はやや茶色っぽいが弥生後期の鏡層とした黒色の層とよく似ている。16区以南では、認められなくなり、灰色粘土層、褐灰色粘土層などが古墳時代後期基盤層となるようである。古墳時代後期の遺構としては、(その1) 調査区で砂質土層上面の自然河川、(その2) 調査区の淡灰色砂層上面に古墳と溝、(その3) 調査区では、暗灰色～灰褐色粘土層を基盤として土坑・河川、(その4) 調査区では 青灰色粘土層上面に自然河川・足跡が検出されている。今回の調査では、7区において灰色粘土層を基盤として溝・ピット、30区では上下2面の畦畔と思われる盛り上りと足跡を検出した。30区の暗褐色粘土層が基盤層もしくは畦畔と考えられ、足跡のある粘土層は2面認められた。また29区では30区の水田面を覆う褐灰色粗・細粒砂層と連続させることができる灰色砂混粘土層中から須恵器の破片が出土しており、古墳時代後期の包含層と比定できる上、(その4) 調査区の古墳時代後期の層の様相とはほぼ一致する。Cラインでの基盤層は、主に褐灰色粘土層と考えている。

奈良・平安時代

歴史時代になると土層の様子はかなり変わってくる。厚い砂の堆積はなくなり、酸化した鉄の斑文が全体にみられるようになる。本来灰色粘土層であったものが見かけは黄褐色粘土層などと呼ばれるわけである。前回の調査では(その2) 調査区が古墳～奈良面と一括、(その4) 調査区で黄褐色土層を古代包含層としている他は全体に遺構が散在するものの基盤層の関連性は不明と言わざるを得ない。今回の調査では、1～3区の黄褐色混淡灰色粘土層上面を、古代面として把握した。

鎌倉・室町時代

中世になっても、土坑・ピット・水田遺構などが全体に散在するが(その2) 調査区で灰色粘質土・黄灰色粘質土の互層が基盤とされるほか、(その4) 調査区では 灰褐色土が当該期の包含層と把握されている程度である。今回の調査区では1～3区の灰色粘土層を当該期の基盤層としたが、各調査区の相互関係は不明と言わざるを得ない。13区では灰白色粘土層を切り込んだ土坑から瓦器片などが出土しており、平安時代末～鎌倉時代のものと判断された。

江戸時代以降

江戸時代以降での顕著な遺構はまず井戸である。他は、土坑・水田関係の遺構であるが現代面になると、竹管暗渠などがほぼ全域にみられる。本調査区では1～3区で黄灰色シルト層を江戸時代、茶灰色シルト層をほぼ近～現代として把握した。

	(その5・6) 今回調査結果	(その1) 報告	(その2) 報告	(その3) 報告	(その4) 報告	備考
古墳時代	①古墳時代後期 ②灰色粘土層(7区)(21~17区) 褐色色砂粘土層(10・11区) ③7区で溝、ピット、30区足跡 9・10区、Cラインで包含層あり	①古墳時代 ②砂質土層 ③自然河川	①古墳一帯奥層 ②灰黄色砂 暗灰色粘質微砂(庄内期) ③庄内期奥層・古墳(6C)・溝	①古墳時代後期 ②暗灰色～灰褐色粘土層 ③土坑・河川	①古墳時代後期 ②青灰色粘土 ③自然河川・足跡	
弥生時代	①弥生時代後期3) ②弥生時代後期2)と同じ ③(その2)全体を流路が通る段階		①弥生後期Ⅲ面 ②赤褐色粘土層 ③自然河川・足跡	連綿・連物共にほとんど存在しないと報告されている	弥生時代後期Ⅲ ②暗青灰色粘土 (その1,6)などの黒い砂粘土と同一層と考えられる ③溝	弥生時代後期におけるそれぞれの面の対応は、あくまで概検討の上の目安である。後期Ⅱは本調査のみで確認した。後期Ⅲの流路は、今回まで確定
	①弥生時代後期4) ②弥生時代後期3)と同じ ③自然河川が拡張する段階	①弥生時代後期Ⅱ ②暗灰色粘土層・黒色砂粘土層など ③自然河川・堀・水田	①弥生後期Ⅲ面 ②赤褐色粘土層 ③自然河川・足跡			
	①弥生時代後期3) ②灰黄色砂粘土層・暗オリーブ灰色粘土層など ③畦畔、自然河川		①弥生後期Ⅲ面 ②緑青色(青灰色?)粘土 ③水田・溝			
弥生時代後期	①弥生時代後期3) ②暗オリーブ灰色粘土層 ③溝・足跡、1~3区付近のみ					
弥生時代中期	①弥生時代中期1) ②弥生時代中期2)同一層及びオリーブ黒色粘土層など ③溝	①弥生時代後期Ⅰ ②褐色色粘土・灰黄色粘土層付近 ③自然河川・溝	①弥生後期Ⅰ面 ②赤褐色粗砂・暗青灰色粘土 ③溝・土坑		①弥生時代後期Ⅰ ②黒灰色粘土 ③水田	
	①弥生時代中期3) ②青灰色中粒砂・白色粗砂層 ③溝・土坑(7区付近のみ)			①Ⅱ～Ⅲ様式遺構面 ②灰色粗砂・暗灰色粘土層 ③竪立建物・溝・溝・井戸		(その1)で暗Ⅱ層(青灰色)の土層へ暗Ⅲ層(黒色)の土層に①)用区に遺構
	①弥生時代中期2)	①弥生時代中期Ⅱ ②灰黄色粘土・暗灰色微砂質粘土 ③足跡・土坑	①弥生中期Ⅱ面 ②赤褐色粘土 灰黄色粘土 ③水田・足跡		①弥生時代中期Ⅱ ②暗灰色シルト質粘土 ③足跡	(その2)と(その4)の対応は確認されていない
弥生時代前期	①弥生時代中期1) ②暗青灰色粘土層微砂層 暗オリーブ灰色砂粘土層など ③暗溝部・足跡など	①弥生時代中期Ⅰ ②赤褐色微砂質粘土 ③足跡	①弥生中期Ⅰ面 ②暗赤褐色砂粘土層 灰黄色粘土 ③方形暗溝部・水田	①Ⅱ様式第1~2遺構面 ②暗灰色粘土層 ③方形暗溝部・溝	①弥生時代中期Ⅰ ②暗青灰色粘土 ③水田・溝	(その3)の二層は一括する
	①弥生時代前期3) ②暗オリーブ灰色粘土 ③溝(1区のみ)			①Ⅱ様式(中)第1~2遺構面 ②暗灰色粘土層 ③暗赤褐色粘土層及び河川上流の暗溝部を含む。遺構の時期別原則は不可能 ④河川・溝・土坑・竪立建物		前期3)は、今回1区のみで確認したが(その3)調査区の一部遺構面と対応するかも知れない
	①弥生時代前期2) ②暗青灰色粘土層 暗灰色粘土層など ③河川・溝 河川階段後の遺構も含む	①弥生時代前期 ②暗灰色粘土 ③水田・溝	①弥生前期Ⅱ面 ②赤褐色粘土 ③溝・土坑		①弥生時代前期 ②暗青灰色粘土 ③溝・河川	
縄文時代	①縄文時代前期 ②第1~第3黒色粘土層間 ③河川	①弥生時代前期以前(縄文) ②青灰色粘土層・黒色粘土層 ③自然河川(河川)	①縄文前期Ⅰ面 ②第1黒色粘土層 ③溝		①縄文時代前期 ②第1・2黒色粘土層 ③自然河川	(その2)以外では検出されず
	①縄文時代後期 ②第3黒色粘土層 ③溝(1・2区)	①弥生時代前期以前 ②黒色粘土層 ③自然河川	①縄文期 ②灰褐色粘土層・黒色粘土 ③自然河川	①縄文時代後期 ②暗赤褐色粘土層など ③自然河川		調査区Ⅱ～Ⅳ区土層出土 溝は人為的と思われる

第2表 遺跡全体遺構面対応関係一覧(縄文～古墳時代)

①遺跡面長
②遺跡面の主な遺構材
③土を基調

調査区	調査区																															5-5					
遺構	1	2	3	4	5	6	7	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	5-5					
近代以降	80年代シロト層 竹筒組・漆	80年代シロト層 竹筒組・漆	80年代シロト層 竹筒組	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	3層緑色粘土層 漆	?	?	?	?	?	?	1層緑色粘土層 漆	?	?	?	?	?	?	?	?				
江戸時代	80年代シロト層 漆	80年代シロト層 漆	80年代シロト層 漆	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	3層緑色粘土層 漆	1層緑色粘土層 漆	?	?	?	?	?	?	?				
鎌倉・室町時代	12層粘土層 漆	12層粘土層 漆	12層粘土層 漆	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	3層緑色粘土層 漆	1層緑色粘土層 漆	?	?	?	?	?	?	?	?			
奈良・平安時代	15層粘土層 漆	15層粘土層 漆	15層粘土層 漆	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?		
古墳時代後期	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?		
弥生時代後期(1)	29層オリーブ色粘土層 漆	29層オリーブ色粘土層 漆	29層オリーブ色粘土層 漆	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?		
弥生時代後期(2)	30層オリーブ色粘土層 漆	30層オリーブ色粘土層 漆	30層オリーブ色粘土層 漆	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?		
弥生時代後期(2)	40層オリーブ色粘土層 漆	40層オリーブ色粘土層 漆	40層オリーブ色粘土層 漆	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?		
弥生時代後期(1)	50層オリーブ色粘土層 漆	50層オリーブ色粘土層 漆	50層オリーブ色粘土層 漆	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?		
弥生時代中期(1)	60層オリーブ色粘土層 漆	60層オリーブ色粘土層 漆	60層オリーブ色粘土層 漆	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?		
弥生時代中期(2)	70層オリーブ色粘土層 漆	70層オリーブ色粘土層 漆	70層オリーブ色粘土層 漆	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?		
弥生時代中期(1)	80層オリーブ色粘土層 漆	80層オリーブ色粘土層 漆	80層オリーブ色粘土層 漆	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?		
弥生時代前期(3)	90層オリーブ色粘土層 漆	90層オリーブ色粘土層 漆	90層オリーブ色粘土層 漆	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?		
弥生時代前期(2)	100層オリーブ色粘土層 漆	100層オリーブ色粘土層 漆	100層オリーブ色粘土層 漆	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?		
縄文時代晩期	87-92	87-92	87-92	12-19	20-27	22-31	31-26 漆	39-43	縄文-弥生河川	縄文-弥生河川	13-16	12-18	11-14	14-17	24	河川	12-13	河川	18-23	16-18	20-23	12-15	17-25	12-16	4-8	14-15	河川	17	河川	13	河川	15-16	13-17	河川	26以下	02-09	03以下
縄文時代後期	93第3層粘土層 漆	93第3層粘土層 漆	93第3層粘土層 漆	20	28	32	27	64	?	?	17	19	15	18	?	15	25	19	24	16	26	17	9	16	18	14	17	18	23	未	未	未	未	未	未	未	未

第3表 (その6) 各調査区遺構面及び基盤層一覧

・調査しているもののみを記載し、主として遺構を記す。?は調査によって判明している場合と推定も可能な場合を示している。弥生時代前期(1)、後期(3)は、層の境りの悪い調査区に示している。
 ・*は1層目(1)の調査と一致。
 ・()は1層目に示された調査の層番号(例4は1層目の調査区)
 ・()は1層目より下になった調査の層番号。

第Ⅵ章 調査の結果

第1節 縄文時代の遺構と遺物

a. 後期

1・2区第4黒色粘土層上面で溝を検出した。遺物は出土していない。(その3)調査区では、下層で中期末の土器が出土し、上層で晩期前半の河川が認められる事から後期と推定した。炭素遺跡においても同層と連続すると考えられる黒色粘土層を後期と認識するに至っている。もっとも、これら溝1・2については人工的なものか否か明らかでない。

溝1 (第6図、図版3)

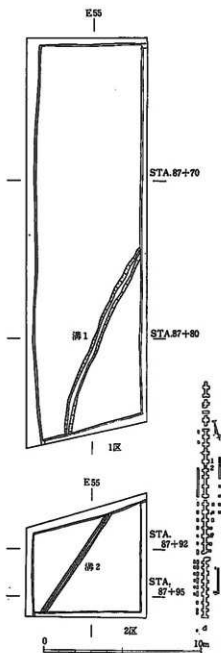
1区南半部で検出された。南西から北東にはしる。幅40cm~60cm、深さ4~7cmを測り、底は全体としてはやや北東に低くなっている。灰褐色粘土で埋まり、植物遺体を多く含む。水が流れていた様子はうかがえなかった。出土遺物はない。

溝2 (第6図)

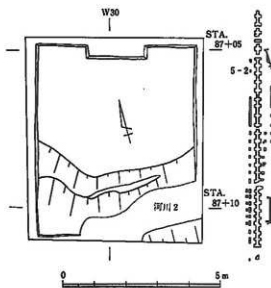
2区で、南西から北東に向かって検出された。地盤が盛り上がって危険な状態となった為、正確な図面はとれなかったが、幅は約60cmを測り、溝1同様灰褐色粘土で埋められていた。深さも溝1と同様のものである。溝1とつながる可能性が高い。やはり、遺物は出土しなかった。

b. 晩期 (付図6)

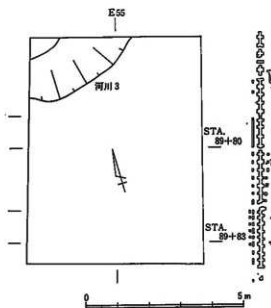
遺構は検出されなかったが、自然河川を検出した。いずれも第1黒色粘土層と第2黒色粘土層の間に厚く堆積した緑灰色系の粘土を切り込んで存在する。切り込み面は若干上下があり、すべての河川が同時存在したとは必ずしも言えないが、多くは関連を持っているようである(付図参照)。これらは弥生時代の土地利用を規定する微地形の形成と大きく



第6図 後期1・2区平面図



第7図 晩期5-2区平面図



第8図 晩期7区平面図

関わっている。今回の調査では弥生時代前期溝14から晩期の深鉢片が出土したので始め、弥生時代の溝・河川に若干の縄文土器片の混入が認められたにすぎないが、トレンチ部の調査では後期・晩期の土器や木製容器の出土も認められる。また、第1黒色粘土層からも晩期前半の土器が出土しており、これらの河川を晩期に位置付けることができる。

河川2 (第7図)

5-2区南端に認められた。東西方向にはしり、検出されたのは北の南側である。調査区内では深さ約1mを測る。下半には粗粒砂、上半には細粒砂が堆積し、流れは速かったと考えられる。遺物は用途不明の木製品が出土している。また、トレンチ部の調査で当該調査区に近い位置から縄文時代晩期の河川が検出されており、河川2とつながる可能性が高い。

河川3 (第8図)

7区北隅で南側が検出された。青灰色粘土層Ⅱを切り込む(T.P.-0.5m)。黄白色粗粒砂層の堆積が見られ、調査区内で深さは約0.9mを測る。その上には河川周辺の堆積物と考えられる暗青灰色シルト層がおおい、さらに黄灰色粗砂の堆積(厚い所で30cm)が認められる。これは、河川3の後の姿とも言える自然河川が若干位置を変えながらも引き続き近辺を流れていたであろう。遺物は以上のいずれからも出土し

なかった。

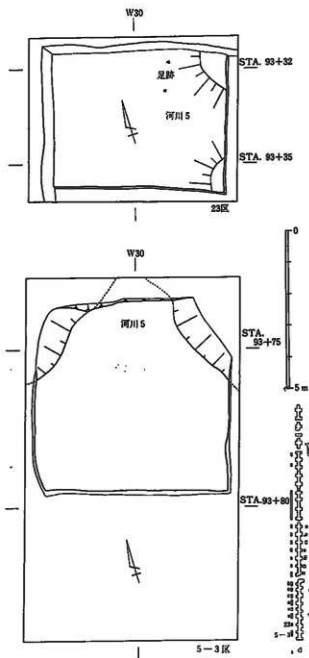
河川3は、(その2)調査区のBトレンチ北部で検出された(その2)の「河川1」に連続し、さらにそれらは後述する河川5の分流であろうと考えられる。(その2)の「河川1」からは、縄文時代後期の土器片が少量出土している。

河川5 (第9図、図版3)

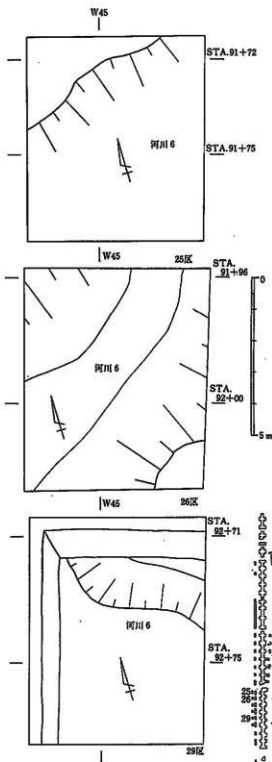
10・11区及び20～24区・5-3区で検出した。検出地点は南北2ヶ所で検出されるが、その3・4調査区で認められた河川を介して連続することは明らかで、北流する比較的規模の大きな河川である。幅20m～30mに復原でき、深さは約1～2mを測る。薄い粘土層を挟む部分もあるが基本的には砂礫(長径2cmまで)が堆積し、比較的速い流れが想定される。(その4)調査区及び20・23・24区では河川の肩と底に人間や鹿の足跡が残されており、時に鹿が水呑み場としていた状況もうかがえる。今回の調査では遺物の出土を見なかったが、(その3)調査区では晚期深鉢、浅鉢形木製品、笠、(その4)調査区では、後期(宮滝式)の土器片や晚期(滋賀里Ⅱ式)の深鉢の他、(その3・4)調査区では河川の底に打ち込まれた状態で杭なども検出されている。杭はいずれも単独で出土している。笠や網をつないだものであろうか。柳などの流木も所々で見られた。

河川6 (第10、11図)

16・17・25～27・29区で検出した。STA.92+70付近で河川5から分流し、さらに、(その3)トレンチ南端部で出土した河川を経て再び河川5に合流すると考えられる。幅は10m～20mに復原でき、深さは約3mを測る。主に中・粗粒砂が堆積し、長径1.5cm位までの礫も含む。深



第9図 晩期23区・5-3区平面図



第10図 晩期25・26・29区平面図

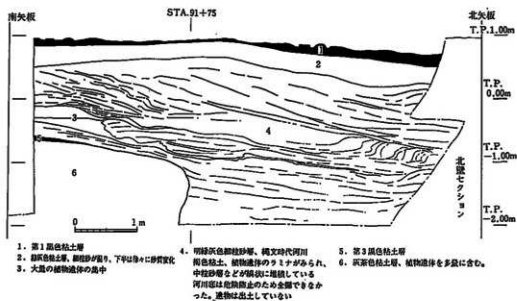
く、流れも速かった為か底には人間や動物の足跡を見ることは出来なかった。今回の調査では出土遺物は無いが、(その3)調査区南端の河川からは晩期初頭の土器片が出土している。16区からは柳の大きな流木が出土し、17区では厚い(30cm)植物遺体⁽¹⁾層が認められた。

河川7

17区で河川6に南の方から合流する河川7が検出された。STA. 92+20付近で河川5から分流してきたものと考えられる。幅は復原できない。深さは底まで掘り切っていないので明確ではないが、河川6との関係を考えると3m前後とできよう。河川6同様砂で埋まっているが、この合流点付近は他の場所と比べると砂の粒径が小さく、細砂を主体としている。遺物は出土しなかった。

c. まとめ

縄文海進後、山麓遺跡の地が再び陸化したのは縄文時代後期～晩期のことである。そしてすでに後期には、溝が掘られている可能性がある。土器も晩期の河川に混入してではあるが、若干認められている。一方、晩期になると多くの自然河川が流れ、それに伴い遺構、遺物が検出されている。釜などのように漁撈活動を顕著に示す遺物も認められる。河川の底に残された人の足跡、また河川の底に打ち込まれた杭等も漁撈活動の痕跡であろうか。これら河川は縄文人にとって水とタンパク質の供給源になっていたと考えられる。また、河川の底には人間の足跡だけでなく鹿など水を呑みに来た動物の足跡も印されており、これらも



第11図 17区西壁晩期河川6

縄文人の食料となった事は想像に難くない。しかし、陸地化していたとは言え不安定な環境にあり、森林の順調な形成もまだ見られなかったであろうことから、河内平野中央部における盛んな狩猟・採集活動は想定できない。おそらく、平野を網の目のごとくはする河川や遠浅の河内湾などでの漁撈が主体となっていたのであろう。

註(1) 遺存状態良好な樹木の葉がビッシリと堆積していた。そのうち97%がブナ科コナラ属、3%はクスノキ科に属するものである。(当センター山口誠治氏に同定を願った)

第2節 弥生時代前期の遺構と遺物

前期遺構面は3面認められた。古いほうから(1)・(2)・(3)とする。第1黒色粘土層上面に対応する(1)では、その2調査区で溝・足跡が検出されているが、今回の調査では遺構を認めなかった。(3)は(2)の中に入れて記述している。

a. 前期(2)～(3) (付図8)

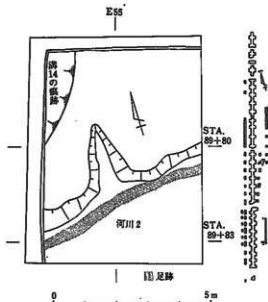
第1黒色粘土層の上には調査区全域にわたり緑灰色あるいは暗青灰色といった灰色系の粘土の堆積が10cm前後の厚さで認められるが、その上面が前期(2)の遺構面となっている。レベルは基本的に南が高く、T.P.0.4～T.P.1.3mを測る。遺構としては、自然河川・溝・土坑・ピット・落ち込み等が検出された。

河川1

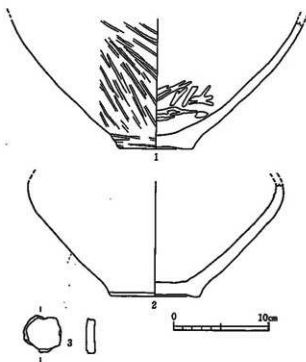
10・11区で検出されたが設計の都合で底に達するまで掘れなかった。肩も検出しておらず、幅は明確ではないが、中に最大径1.5cmまでの礫を若干含む。(その4)調査区の「縄文時代晩期自然河川2」(深さ1.5m前後)から(その3)調査区の「弥生時代前期河川7」へと連続し、さらに今回検出した河川1に続くものと考えられる。底のレベルは、その4調査区でT.P.0～0.4m、11区でT.P.-2mを測る。10・11区では遺物は認められなかったが、(その3)調査区の部分では弥生時代前期の遺物が大量に出土している。隣接して認められる集落から転落したものと考えられる。11区でも河川が一部埋った上に集落が立地しているが、その段階のより細くなった河川が10区と11区の間で想定され、そこにはやはり多くの遺物が混入しているものと推定される。

河川2 (第12図、図版11)

7区南端で北側の肩を東西方向に検出した。これは河川1の分流と考えられる。肩の一部が北に小さく突出しているが自然にえぐれたものらしい。また、肩の下端に沿って人間が2～3回行き来してできたと思われる連続した足跡群が認められた。河川は上半が青灰色中粒砂、下半が白色粗砂で埋まっている。砂の堆積は、調査区の最も厚い所で約1.1mを測るが、河川の中心は調査区外にあると考えられ、深さはより深いものと想定される。河川の北側には河川2の氾濫堆積によって形成された砂混の粘土層が認められ、6区においてもその延長



第12図 前期(2)7区平面図



第13図 7区河川2出土土器・土製品

と考えられる層が検出された。

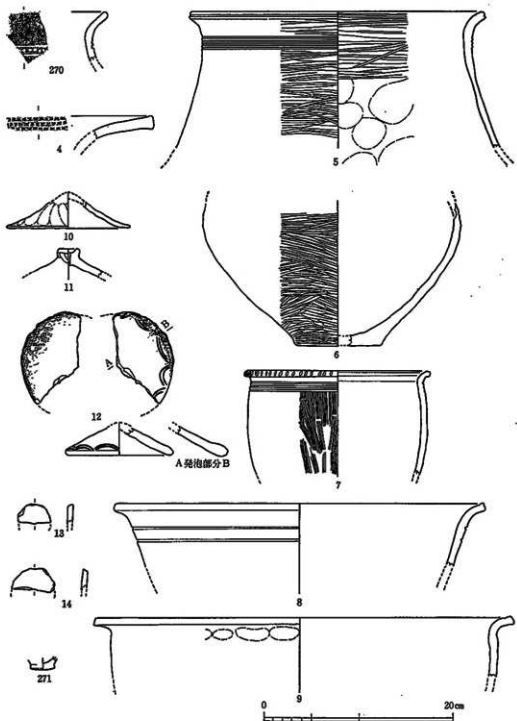
—重物— (第13・14図、図版30～32・45・47・56・57)

河川2及びその氾濫堆積から、コンテナ3杯分の重物が出土した。弥生土器・土製円板・石器があるが、土器が大半を占める。6区ではこの氾濫堆積層が4層に分層でき、最上層ではⅠ様式の土器に混ってⅡ様式の土器が少量認められたが、Ⅰ様式の土器に関しては上層も下層も異なった様相が認められないので一括して扱う。

土器は、破片のみで総数約470片を数える。壺・壺蓋・甕・鉢・ミニチュア壺(271)が認められた。小片が多く器形を確認できないものが多いため、正確な器種構成比を求めることはでき

ないが、8～9割が壺あるいは甕になると考えられる。胎土は角閃石を顕著に含む生駒西麓産とそれ以外のものがみられ、生駒西麓産が全体の約65%を占める。生駒西麓産以外のものの中には、結晶片岩を含み、紀伊産と考えられる壺の破片が1点認められた。なお、生駒西麓産においても、それ以外においても壺・壺蓋・甕・鉢の各器種があり、器種構成比は明確ではないもののはほぼ同様のあり方を示すようである。

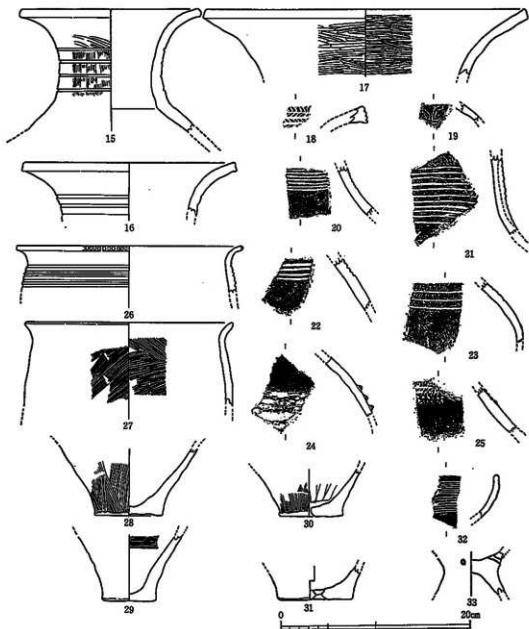
壺は、段・段+笥描き直線紋⁽¹⁾<少条・多条⁽²⁾>・削り出し突帯+笥描き直線紋⁽³⁾<少条>・笥描き直線紋<少条・多条>(20～23)、貼り付け突帯紋(24)、木葉紋(19)が確認できた。笥描き直線紋多条の存在が目立つ。木葉紋は1点だけである。270は笥描き直線間に刺突を施し、24は貼り付け突帯に笥状工具で刻み目を入れる。25は、一見複雑な低い貼り付け突帯のように見えるが、突帯を貼り付けているのは一番下の条だけで、その上は沈線により間が若干浮き出て見えるものである。貼り付け突帯には布帯押印痕を、沈線間には鋭い刻み目を、また貼り付け突帯とその上の沈線間には上段に刻み目、下段に刺突紋を施している。さらに25では、下部の割れめに沿って表裏に補修粘土がみられる。粘土は本体、補修用とも生駒西麓産のものである。器形は頸部部の境が屈曲せず、胴部からそのまま内傾する頸部をもつもの(270・5)の他、口縁部が大きくひろくもの(4、17、18)、さらに頸部が胴部から直立気味に立ちあがり、口縁部が若干ひろくもの(15・16)等がある。口縁部が開くものでは、端面に笥描き直線と刻みによる紋様を施したものがしばしば認められる。また、264では底部に靱痕が認められた。



第14図 7区河川2の古墳堆積層出土土器・土製品

壺蓋では、頂部に焼成前穿孔を施すもの(11)や、外面周辺部に連弧紋を施すもの(12)が出土した。12は縁の一部が熱により発泡、変形している。

甕は、如意形の口縁部端に刻み目を持ち、口縁部下に寛描き沈線紋を施すものと、刻み目・沈線紋共にもたないものが認められる。沈線は1条から10条+ α までである。外面は、刷毛調整するものと撫でを施すものがある。30・31のように焼成後に穿孔した底部も認められる。33は底部側面から底にかけて焼成前に穿孔している。

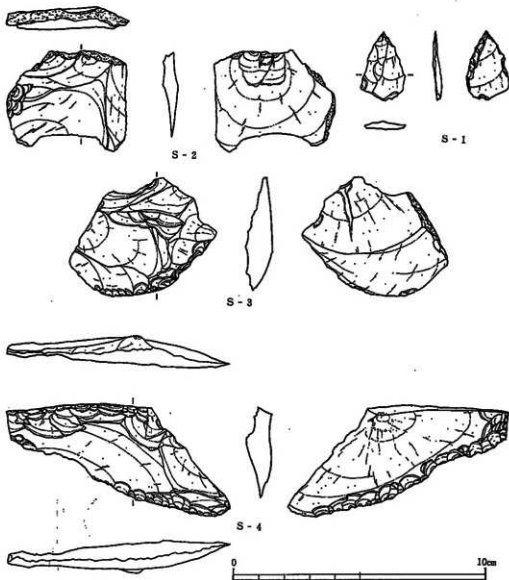


第15図 6区河川2の沓瀬堆積層出土土器

鉢は、口縁部が直立して終わるもの(32)と外反するもの(8・9)がある。いずれも内外面に施磨きを施す。

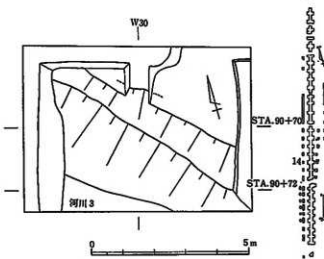
土製円板(3・13・14)は土器片の周囲を打ち欠いたものである。

石器は、石鏃1、削器2、刺片1点の計4点が出土した。石鏃(S-1)は、小刺片を利用したもので腹面左縁に顕著な二次調整が認められる。形態的特徴から石鏃と考えられるが、小型の削器の可能性もある。7区暗青灰色粘土混微砂層出土の削器(S-3)は腹面が2枚の剝離面で構成され右側縁に自然面がみられる。打面・打点は失われている。背面は複数の方向からの剝離痕がみられる。二次調整は下部部に円弧を描くように認められる。削器(S-4)は、平坦打面



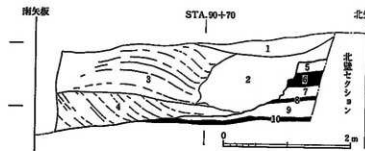
第16図 6・7区河川2の氾濫堆積層出土石鏃・削器・刺片

を持つやや不定形な横長切片を利用している。二次調整は、両面共に認められるが腹面側が後に行われ、かつ丁寧である。背面側には、大きな剝離痕と共に打面側からの背面調整がみられるが、主に整形のためのものであろう。6区暗青緑灰色粘土層出土。切片(S-2)は、打面及び片側縁が自然面である。腹面は一枚の剝離面であるが打点付近に小剝離痕があって打撃時の破砕ではないかと思われる。背面は、複数の方向からの剝離痕がみられ、左側縁の一部に二次調整様小剝離も認められる。背面右縁・下縁に刃こぼれ状のギザギザが認められるのは使用痕かも知れない。6区暗青緑灰色砂混粘土層出土。



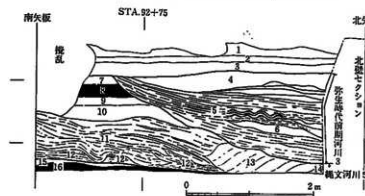
第17図 前期(2)14区河川3平面図

河川3 (第17~20・68・69図)
14・16・21・28・29区にまたがって検出された。(その4)調査区の「自然河川3」から続く河川⁽⁴⁾と考えられる。また、(その4)調査区のところでは河川1と分かれる。幅は(その4)調査区では約20mを測るが、北の16・14区のは



第18図 14区西壁河川3断面図

- 北矢板
1. 白灰色中粒砂層、-1.5m 層含む
 2. 灰褐色・中粒砂及び礫層、粘土ブロック含む
 3. 灰白色粗粒砂層、1-3m 層多く含む
 4. 灰褐色中粒砂層
 5. 緑灰色粘土層Ⅰ
 6. 第1層色粘土層
 7. 緑灰色粘土層Ⅱ
 8. 第2層色粘土層
 9. 緑灰色粘土層Ⅲ
 10. 第3層色粘土層
- 南矢板
- 亦北時代前期河川3
- T.P. 1.00m
- T.P. 0.00m



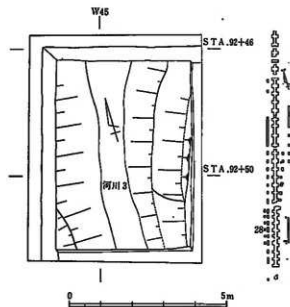
第19図 21区西壁河川3断面図

- 北矢板
1. 灰褐色粘土層、下層は粗粒砂となる
 2. 緑褐色粗粒砂と1層の互層、礫物層含む
 3. 緑褐色粘土層、礫物混生、灰白色粘土層
 4. 緑褐色・中粒砂混生層、下層は下層と互化する
 5. 灰褐色粘土と緑褐色粗粒砂及び礫物混生層の互層
 6. 厚灰色中粒砂層、土層では互層と成る
 7. 緑褐色粘土層Ⅰ、物産時代前期河川層
 8. 第1層色粘土層
 9. 緑褐色粘土層Ⅱ
 10. 緑褐色粗粒砂粘土層
 11. 灰褐色・中粒砂層、灰褐色粘土層を含む
 12. 粗粒砂・中粒砂層
 13. 粗粒砂・中粒砂層
 14. 粗粒砂・中粒砂層
 15. 灰褐色粘土層
 16. 第3層色粘土層
- 南矢板
- 亦北時代前期河川3
- 河川5
- T.P. 1.00m
- T.P. 0.00m

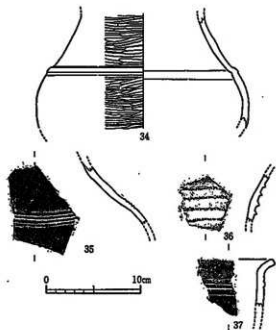
うでは少し細くなるようである。深さは、1～1.5mを測る。16区では底に粘土の堆積を認めるが、基本的には砂で埋まり、最大径3cmの礫を含む。

一遺物一（第21～23図、図版32・34・57）

弥生土器の破片が約20点出土した。14区で1点、その他は16区で、南の方の調査区では出土しなかった。土器はそれほど磨滅しておらず、築落との位置関係によると思われる。



第20図 前期(2) 28区河川3 平面図

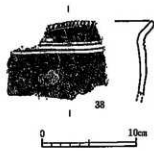


第21図 16区河川3 出土土器

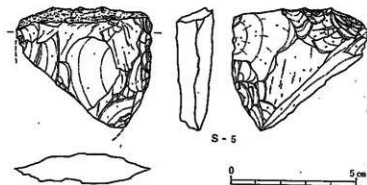
壺は、頸部部の境に削り出し突帯を持つもの(34)、段+笥描き直線紋を施すもの(35)、突帯を貼りつけるもの(36)などが認められる。34・35は内外面とも笥磨き、36は撫で調整による。また、紀伊産の壺の破片が1点含まれている。

甕は、短く外屈する口縁増部に刻み目を施し、頸部に3条の沈線紋をめぐらすもの(38)、口縁増部に刻み目をもたず、沈線を3条めぐらすもの(37)などがある。内外面とも撫でによる調整である。

石器(S-5)は、割器と思われるが約1/4が欠失しておりよくわからない。背腹両面の区別がつかねる。両面共に肩縁からの粗い剝離痕がみられる。上面には自然面が残され、断面形はレンズ状を呈している。河川の底付近の粘土層から出土した。



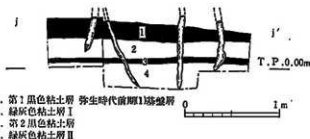
第22図 14区河川3 出土土器



第23図 16区河川3出土石器

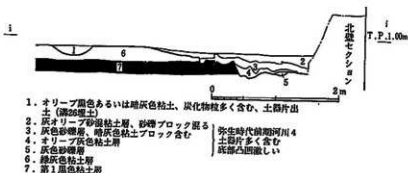
河川4 (第24・25・60図、図版14)

13区で西層を検出した。南北にはしり、河川から分れたと考えられる。深さは0.5m前後を測る。暗オリーブ灰色砂礫混粘土が堆積し、ラミナは認められなかった。河川にあまり水が流れず滯水するようになった段階での堆積であろうか。また、この河川には堰が設けられており、流れに直交するように杭列が残る。先を削って尖がらせただけの径5~8cmの丸太杭を5本川の底の粘土層に30~70cm打ち込んでいる。ほぼ、垂直に打ち込んでいるものから約25°の傾きを持つものまでであるが、基本的には直立させた杭に横木をわたして骨組みとした構造が考えられる。堰の西にはせき止めた水を水田に流したと思われる溝26が存在する。



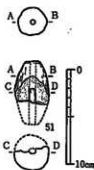
1. 第1黒色粘土層 弥生時代前期1期壁層
2. 緑灰色粘土層Ⅰ
3. 第2黒色粘土層
4. 緑灰色粘土層Ⅱ

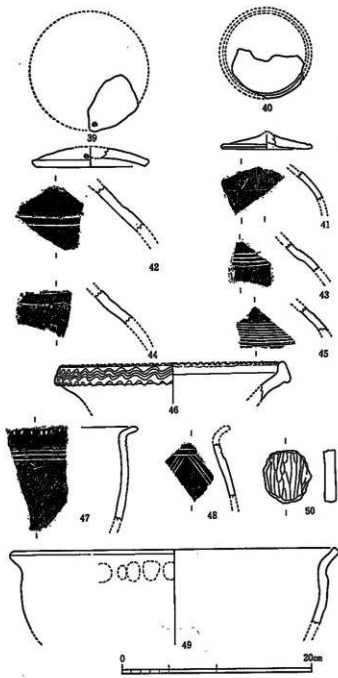
第24図 13区河川4内杭の打ち込み状況



1. オリーブ黒色あるいは暗灰色粘土、炭化物粒多く含む、土器片出土 (溝26埋土)
 2. 灰オリーブ砂礫粘土層、砂礫ブロック混る
 3. 灰色砂礫層、暗灰色粘土ブロック含む
 4. オリーブ灰色粘土層
 5. 灰色砂礫層
 6. 緑灰色粘土層
 7. 第1黒色粘土層
- 弥生時代前期河川4
土器片多く含む
底部凸凹激しい

第25図 13区溝26と河川4断面図(東南から)

第26図 13区河川4
出土土錐



第27図 13区河川4出土土器

外面全面に煤が付着する。

鉢(49)は、口縁部が軽く外反するものである。

土製円板(50)は、土器片の周部を打ち欠いて円板としている。土甕(51)は、焼成前に穿孔しており、胎土は生駒西麓のものである。

河川5(第60・61図)

—遺物—(第26・27図、図版33・34・47)

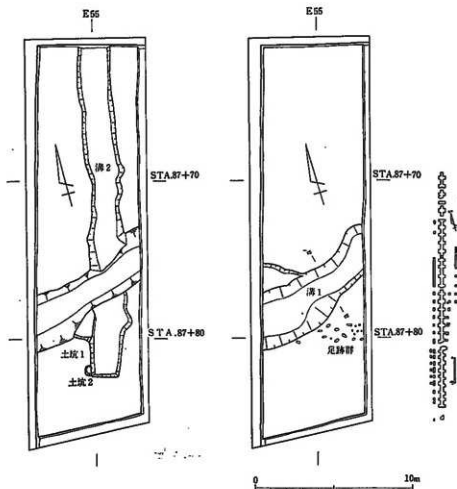
弥生土器、土製品(土製円板・土甕)が出土した。

土器は破片ばかりで、約50点出土した。壺・壺蓋・甕・鉢が認められ、口縁部に波状文と刻み目紋を持つ壺(46)1点を除いて型式の判別できるものはすべて第I様式に属する。壺には、木葉紋+重弧紋(41)、段+笥描き直線紋<少条>(42・43)、削り出し突帯(44)、多条の笥描き直線紋(45)などの紋様が認められる。41は、非常に繊細な線で紋様を描く。46の櫛描き紋は回転台を使用せず左から右に施している。また、刻み目は上が板、下が皮のようなものを使って施されたらしい。胎土は生駒西麓のものではない。

壺蓋は、丸くカーブを描くもの(39)と中心が突出するもの(40)がある。

甕は、口縁部に刻み目をもち、頸部に笥描き直線紋を3条施すもの(47)の他、頸部沈線の下に3本単位の平行直線紋を施す48などが認められた。47は

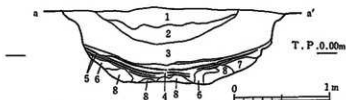
12区東端で検出された南北にのびる河川であり、河川4から分流するものと考えられる。上部が溝や工水管の為攪乱されているが、深さは2m程と想定される。堆積層は2層に分かれ、上半は暗オリーブ灰色砂混粘土、下半は黄白色中・粗粒砂(長径1.5cm位までの礫を含む)が堆積している。遺物は出土しなかった。



第28図 前期(2)1区平面図

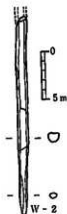
溝1 (第28・29図、図版4・5)

1区で検出した。若干うねりながら東西方向にはしる。断面は逆台形に近く、底面にはやや凹凸がみられた。上幅2.3~3.5m、下幅1.2~2.1mで深さ0.75m前後を測る。底のレベルは東端でT.P. -0.23m、西端でT.P. -0.24mである。緩やかな流れによる細粒砂のラミナが底付近の一部で認められるが大部分は粘土によって埋められ、一部にはピビアンナイト、炭酸カルシウム粒が含まれる。埋土にはブロック土が多く含まれ、下部は壁面からの崩落によるものと思われるが、上部のものは人為的に埋めた可能性がある。両側層に堤は認められなかった。崩して埋めたことも考えられるが、両側に全く痕跡がなく、本来なかった可能性が高い。位置と方向から



1. 暗オリーブ灰色砂混粘土層、黒色粘土と緑灰色細粒砂ブロック混る
2. 暗オリーブ灰色粘土中粒砂層、1と同じブロック混る
3. 黒色粘土、暗オリーブ灰色粘土、緑灰色細粒砂、暗オリーブ灰色砂混粘土の各ブロック混合層
4. 暗オリーブ灰色粘土層 I、5層が混合する
5. 灰色細粒層、ラミナとして4層に混在する
6. 暗オリーブ灰色粘土層 II、黒色粘土と緑灰色細粒砂ブロック混る
7. 暗オリーブ灰色中粒砂混粘土層、黒色粘土と緑灰色細粒砂ブロック混る
8. 緑灰色細粒砂層、黒色粘土のブロック少し混る

第29図 1区溝1断面図(東から)



溝1

第30図 1区溝1出土ヤス状木製品

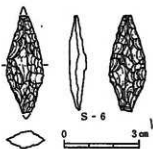
(その2) 調査区溝9に続く可能性がある。

一遺物一(第29・30図、図版54・56)

弥生土器片2点、石鏃1点、ヤス状木製品1点が出土した。

土器は、小片であるが、壺と甕の破片と考えられる。甕の外面にはヘラ削りが認められた。

石器(S-6)は、尖基有茎石鏃である。先端及び基部端を欠失するほかは完形である。両面の中央付近にわずかの一次剝離痕(面)を残すほかは丁寧な調整がなされている。断面はやや厚いレンズ状を呈している。



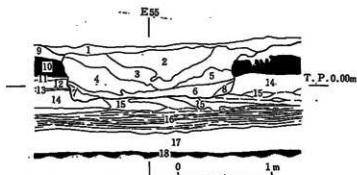
第31図 1区溝1出土石鏃

ヤス状木製品(W-

2)は、周囲を細く削って作り、太い部分で径約1.2cmを測る。両端をとがらせているが、より細く削っている方が先と考えられる。

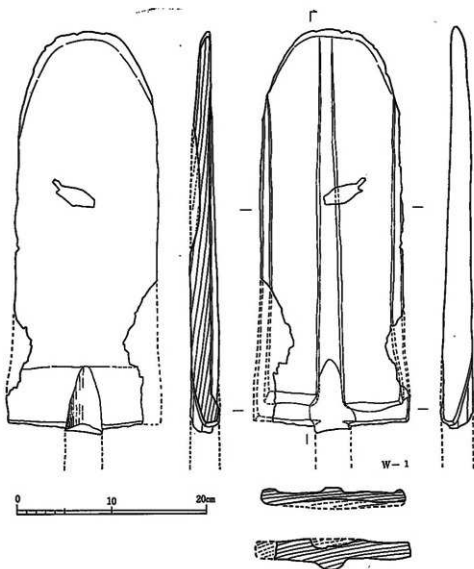
溝2(第28・32図、図版4・5)

1区で検出した南北方向にはしる溝である。溝1に切られる。北は調査区外へのびる



1. 地緑灰色砂混粘土層、ビビアンナイト少し含む
2. 黒色粘土と灰緑色粘土ブロック混合層、ビビアンナイト含む
3. 黒色粘土と緑灰色細粒砂ブロック混合層
4. 2とはほぼ同じ、ビビアンナイトは含まない
5. 灰緑色粘土ブロックを主体として黒色粘土ブロックなど少し含む
6. 暗灰色砂混粘土層、黒色粘土小ブロック含む
7. 4とはほぼ同じ
8. 3とはほぼ同じ
9. 暗緑灰色粘土層
10. 第1黒色粘土層
11. 灰緑色粘土層 I
12. 緑灰色細粒砂混粘土層
13. 12と14層にはさまれた中粒砂ラミナ
14. 第2黒色粘土層
15. 中粒砂のラミナ及び黒中部分
16. 緑灰色粘土混細粒砂層、ラミナ多くみられる
17. 灰緑色粘土層 II
18. 第3黒色粘土層 II

第32図 1区北壁溝2断面図



第33図 弥生時代前期講2出土劍

が、南は調査区内 S T A . 87+82 付近で終わっている。断面は逆台形で、刃の立ち上がりは強く底は平坦面をなす。上幅は 2 m 前後、下幅は 1.2~1.7 m、深さは約 0.5 m を測る。底面のレベルは、南端で T . P . 0.1 m とやや高いが北の方になると T . P . -0.15 m 前後を上下する。埋土は流水堆積が認められず、粘土によって埋没している。底に 10 cm 前後の自然堆積層が認められるが、それより上はブロック土が混在し、人為的に埋めた層と考えられる。堀の痕跡はない。

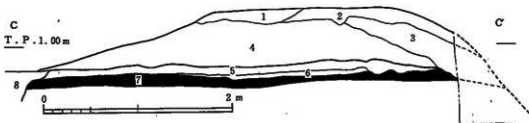
一遺物一 (第33図、図版55)

S T A . 87+80 付近で劍 (W-1) が出土した。身と連続してつくられた 柄は折損している。身も一部欠けているが、ほぼ復原できる。縦に長い平面形を持つ。先から柄の方にかけて幅広になり、特に柄のほうに近い部分でわずかなくびれを持つようである。先端部は丸くおさまる。柄

の延長部と、先を除く周辺部には表のほうに隆起を持つ。また裏面では、柄の近く6cmまで柄の延長部を削り出している。側面形はやや反りが認められる。瓜生堂遺跡で頻例が出土している。瓜生堂例の方がより長く、先は直線的につくられている。今回出土のものは、先が磨り減り、丸いカーブを描くに至ったものと考えられる。材質はカシである。

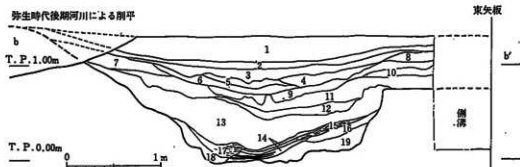
溝3 (第34・35・36図、図版6・7)

3区南端で検出された。南西から北東にはしる。北側だけに堤を持つが、西側約1/3は弥生時代後期(3)河川1により削られてしまっている。溝の上幅は約4m、下幅は1~2mを測る。底は平垣ではなく、長径2~3m位の凹みが連続して認められる。凹みの深さは0.3m前後である。溝を掘った時の作業単位を表わしているとも考えられる。凹みのところで堤上面からの深さ約



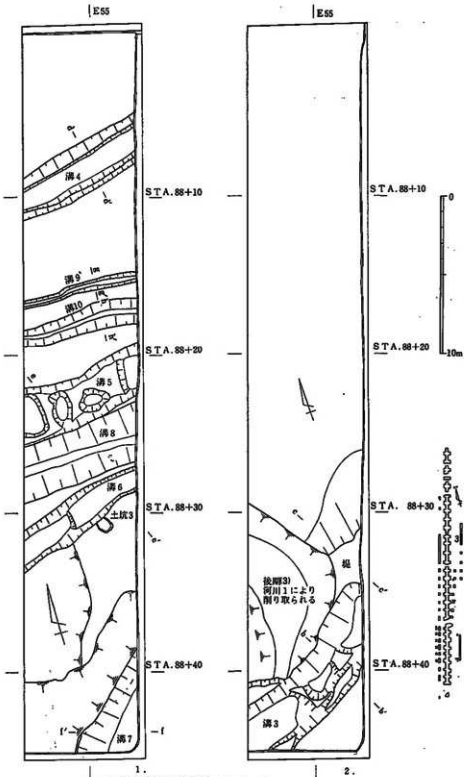
- | | |
|-------------------------|-----------------------------|
| 1. 黄緑灰色極細粒砂ブロック混暗緑灰色粘土層 | 6. 暗緑灰色粘土層 |
| 2. 1と同じでブロックが少ない | 7. 第1黒色粘土層 |
| 3. 2とほぼ同じ。ブロックさらに少ない | 堤盛土 8. 溝6 |
| 4. 暗オリーブ灰色粘土層 | 溝3に伴う堤が溝6埋没後築かれているので |
| 5. 緑灰色粘土層、炭酸カルシウム粒多く含む | 弥生時代前期のうちでも溝6より溝3が新しいことがわかる |

第34図 3区溝3西壁断面図(南西から)



- | | |
|-----------------------------------|--|
| 1. 灰色粘土層 | 11. 暗オリーブ灰色極細粒砂混粘土層、炭酸カルシウム粒含む |
| 2. 黒褐色粘土層、炭化物薄層散在含む。ピビアンナイト含む | 12. 暗緑灰色細粒砂混粘土層、炭酸カルシウム粒含む |
| 2. 暗オリーブ灰色粘土層Ⅰ、植物遺体とピビアンナイト含む | 13. 暗オリーブ灰色粘土層Ⅱ、暗緑灰色細粒砂と黒色粘土ブロック含む炭酸カルシウム粒含む |
| 4. オリーブ黒色粘土層Ⅰ、ピビアンナイト含む | 14. 暗オリーブ褐色粘土層、炭酸カルシウム粒含む |
| 5. 暗緑灰色粘土層極細粒砂層 | 15. 灰白色細粒砂と暗オリーブ灰色粘土の互層 |
| 6. オリーブ黒色粘土層Ⅱ、炭酸カルシウム粒及びピビアンナイト含む | 16. 暗緑灰色細粒砂混粘土層、緑灰色細粒砂と黒色粘土ブロック多く含む |
| 7. オリーブ黒色細粒砂混粘土層 | 17. オリーブ黒色粘土層と暗緑灰色粘土層極細粒砂の互層 |
| 8. オリーブ黒色粘土層Ⅲ、6層とほぼ同じ | 黒色粘土ブロックと炭酸カルシウム粒含む |
| 9. 5層とほぼ同じ | 18. 暗オリーブ灰色細粒砂混粘土層、緑灰色細粒砂のブロックと炭酸カルシウム粒含む |
| 10. 黒褐色細粒砂混粘土層 | 19. 暗オリーブ灰色粘土層Ⅲ、緑灰色細粒砂と黒色粘土ブロック及び炭酸カルシウム粒含む |

第35図 3区溝3断面図(西から)

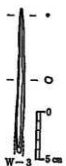


第36図 前期(2)3区平面図



第37図 3区溝3出土土器

1.6m、南側の地盤からでは約0.9mを測る。底のレベルは、東の凹みが T. P. -0.2m、西の凹みが T. P. -0.25m である。また、その凹みに対応して肩斜面に幅 0.5m 前後のテラスがみられる。やはり作業の便宜上つけられたのであろうか。溝は、粘土の自然堆積



第38図 3区溝3出土土器
木製品

積によって埋まるが、底の方では流水による粗砂のラミナがみられる。溝上半の埋土にはピビアンナイト、下半には炭酸カルシウム粒を含む。堤は溝の掘削土とは違った粘土及び細粒砂ブロック混粘土を積みあげてつくられ、盛土の厚さは約0.6mある。

—遺物— (第37・38図、図版54)

溝埋土から弥生土器片が6点出土した。壺と甕がある。

壺は、篋描き直線紋(多条)を施した第Ⅰ様式に属するものと、櫛描き直線紋をもつ第Ⅱ様式と考えられるものがあり、埋土上部層の黒褐色粘土層では両者が共存していた。

—遺物—

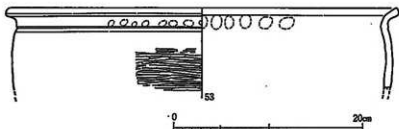
甕は、体部が上に開き、緩やかに外反する口縁部をもつ無文のもので、内外面に篋で磨く第Ⅰ様式に属するものである。2片のうち1片は、溝の底直上に堆積する暗オリーブ灰色粘土層から出土している。堤盛土からは弥生土器片6点とヤス状木製品1点出土した。土器は壺の底部1点を含むが、他の器形は不詳。

溝4 (第36・40図、図版6)

3区の北部で検出された。南東から北西にはしり、溝3にはほぼ平行する。底は平面をなし、底から比較的急な立ちあがりを見せる壁は上部で急激に開く。上幅で2.6~3.0m、壁面が開き始めるところでは1.6~1.9m、下幅で1.2~1.4mを測る。深さは約0.5mある。底のレベルは西端で T. P. 0.1m、東端では凡そ T. P. 0m である。埋土は自然堆積したもので、底の一部では細粒砂及び中粒砂のラミナがみられる。また、上部の堆積層にはピビアンナイトを含む。両肩とも堤の痕跡はなかった。

—遺物—

弥生土器片が2点出土した。壺と甕がある。壺の紋様は小片のため不明、甕は底部で外面下半



第39図 3区溝5出土土器

に縦方向の刷毛目がみられる。

溝5 (第36・40図、図版6)

3区中央部で検出された。ほぼ東西方向にはしる。溝8を切っている。上幅は約3m、下幅は約2m前後を測る。底には不定形の凹みが連続して認められる。それは大きさもまちまちで、深さは0.1~0.2mある。溝の深さは0.5m前後である。底のレベルは、東の凹みでT.P.-0.1m、西の凹みでT.P.0m、中央部の高く残ったところでT.P.0.05mを測る。埋土は砂混り粘土で、底付近など部分的に流水と思われる細粒砂の層がみられる。また、ブロック土を比較的多く含むが、肩近くに外から自然に流入した状態の砂や小ブロックの混入が認められるため、自然

に埋まったことが解る。堤は認められなかった。

—遺物— (第39図)

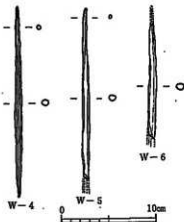
弥生土器が8点出土した。第I様式の壺と甕がある。

壺では、頸部に段と横書き直線紋を2本もつものが認められる。

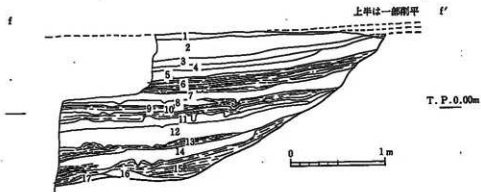
甕は、頸部に段を持つもの(53)が出土した。体部外面は笥麻きを施している。内面はいたんでおり調整不明。生駒西麓産の胎土をもつ。

溝6 (第36・40図、図版6)

3区南半部で検出した。溝5とはほぼ平行して東西にはしる。いずれも溝8を切っており、溝5と併存の可能性が高



第41図 3区溝6出土ヤス状木製品



- | | | |
|------------------------------------|---------|---------------------------------|
| 1. 灰緑色粘土層 | 溝埋没後の堆積 | 9. 緑灰色極細粒砂と黒灰色粘土の互層、植物遺体含む |
| 2. 暗緑灰色粘土層、ピビアンナイト粒含む | | 10. 暗褐色粘土層、極細粒砂のラミナみられる。植物遺体含む |
| 3. 緑灰色粘土層、炭化物層多数含む | | 11. 灰褐色極細粒砂土層、植物遺体含む |
| 4. 暗緑灰色極細粒砂混り粘土層、一部極細粒砂のラミナみられる | | 12. 灰褐色粘土層、植物遺体多く含む |
| 5. 暗紫灰色極細粒砂混り粘土層、炭化物粒若干含む | | 13. 黒褐色粘土と緑灰色極細粒砂のみだれた互層、植物遺体含む |
| 6. 暗緑灰色粘土混り極細粒砂層、緑灰色極細粒砂のラミナみられる | | 14. 黒褐色粘土層 |
| 7. 褐灰色砂混り粘土層、緑灰色極細粒砂のラミナみられる植物遺体含む | | 15. 緑灰色極細粒砂と黒褐色粘土の互層 |
| 8. 暗灰青色極細粒砂層 | | 16. 黒色極細粒砂混り粘土層、植物遺体含む |
| | | 17. 暗オリーブ灰色砂混り粘土層 |

第42図 3区溝7断面図(北から)

い。また、溝3の堤の下に肩が潜る部分が認められるので、明らかに溝3に先行する。断面は逆台形で上幅1.8~2.5m、下幅約1~1.5mを測る。底は西が一段深くなり、深さは約0.65m、東が0.5mを測る。底のレベルは東端でT.P.0.17m、西端でT.P.0mである。底には10~20cmの厚さで自然堆積の粘土層が全体にみられるが、それより上は人為的に埋められた部分とそのまま放置されて自然に埋まっていった部分とが認められる。後者の自然堆積層中には炭酸カルシウム粒とピジャンナイトが含まれ、溝の一部が埋められたために生じたよどみが想定されよう。堤は認められない。

一遺物— (第41図、図版54)

ヤス状木製品が3点出土した。W-4は完形品で両端を尖がらせている。

溝7 (第36・40・42図、図版6)

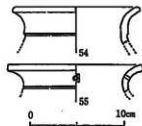
3区の南端で北側の肩を検出した。南東から北西にはしり、溝3に切られる。底のレベルは調査区内最深部でT.P.0.8m、深さは約1.5mを測る。堤の存在は不明である。溝には粘土層と細粒砂のラミナを幾重にもはさんだ粘土層が交互に堆積し、よどみの時期と間欠的に流水があった時期が交互にくり返されていた状況が窺える。また、溝あるいはその周辺では草木が生育していたようであり、多くの層中に植物遺体が含まれていた。

一遺物—

弥生土器(第Ⅰ様式)の破片が1点出土した。頸部に篋描き直線紋(4条+α)を描いているもので、外面は刷毛調整を施す。

溝8 (第36・40図、図版6)

溝5・6にはさまれて検出された。両溝に両肩部を切られ堤の存在は不明。断面は肩から底にかけて丸いカーブを描く。上幅は約3.5m、深さは約1mを測る。底のレベルは東端でT.P.-0.25m、西端でT.P.-0.3mである。砂層や砂のラミナをはさんだ粘土層によって埋没し、かなり恒常的な流水のあったことがわかる。



第43図 3区溝8出土土器

一遺物— (第43図)

弥生土器片が10点出土した。第Ⅰ様式に属する壺が認められる。口頸部界に段をつけたもの(54)や篋描き直線紋1条がみられるもの(55)、また、頸部界に突出度の極めて低い割り出し突帯+篋描き直線紋を施す破片などがある。いずれも生駒西麓産の胎土をもつ。

溝9 (第36・40図、図版6)

3区の北半部で検出された細い溝である。後述の溝10と平行して東西方向にはしる。幅約0.5m、深さ約0.15mで、底のレベルは東端がT.P.0.4m、西端がT.P.0.5mを測る。砂混粘土や粘土混りの砂で埋没している。遺物は出土しなかった。

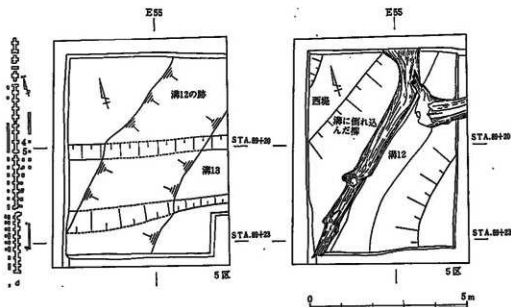
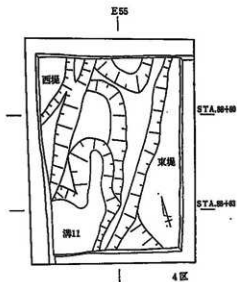
溝10 (第36・40図、図版6)

溝9の南に隣接し、平行してはしる。断面はV字形で幅約1.1~1.7m、深さ約0.3mを測る。

底のレベルは、東端が T.P.0.2m、西端が T.P.0.25m で、溝 9 同様東に向かって下がる。埋土は、下半が極細粒砂と粘土の互層、上半が中・粗粒砂層で、間欠的で緩やかな流れから比較的速い恒常的な流れへの変化がみてとれる。遺物は、壺と考えられる土器片が一点出土した。

溝11 (第44・45図、図版8)

4区で南北に検出された溝である。両肩に二層に盛った堤が観察される。東堤の下は直接第1黒色粘土層になっているので前期(2)基盤層の暗青灰色粘土層は削平されたのかも知れない。堤頂部間の幅は5m、堤頂から溝底までは1.2mを測



第44図 前期(2) 4・5区平面図

る。溝の底には凹みが三ヶ所認められ、一ヶ所が溝掘削の一人の作業単位と思われる。溝の埋土下半は青灰色シルトと黒色粘土ブロックが混合した層である。上半部は、砂と粘土が交互に堆積している。下半の部分に関しては、埋めたには中途半端であり、東から崩れかかっている層もあって、肩部が自然に崩壊して埋まったと考えられる。上半は流水性の自然堆積により埋没したのであろう。

一遺物 (第47図、図版57)

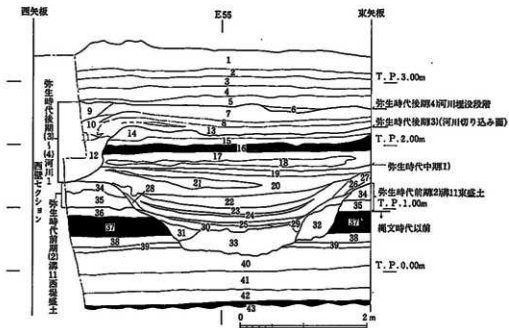
溝内下層ブロック土から4点、堤盛土中から9点の土器片が出土した。図示していないが、堤

盛土からのものには一片寛描きの直線紋を付した甕と思われる個体がある。また、溝の上半部を埋める流水堆積層内(限定できず)からは梯描き直線紋のみられる破片が出土している。このことから溝は前期から中期にかけて徐々に埋没したものと考えられる。

石器は刮器(S-7)と、剥片(S-8)が出土している。刮器は自然面打面を持つやや縦長の剥片を利用しており、自然面は片側面にも連続して残されている。腹面は左縁からの短い調整が行われ、背面は、下縁からの二次調整が認められ、これが刃部である。剥片も自然面打面を持つ不定形縦長剥片である。打点は失われている。背面には複数方向からの剝離痕が認められるが中央の剝離痕が古く大きい。両者共、溝11の西堤付近の斜面から出土した。

溝12(第44・46図、図版9・10)

5区で検出した溝で、方向は溝11とほぼ同じである。両側には堤が認められるが西堤は少くとも8層、東堤には5層の盛土がみられた。両堤頂部間の距離は約5.5m、堤頂部から溝底までの



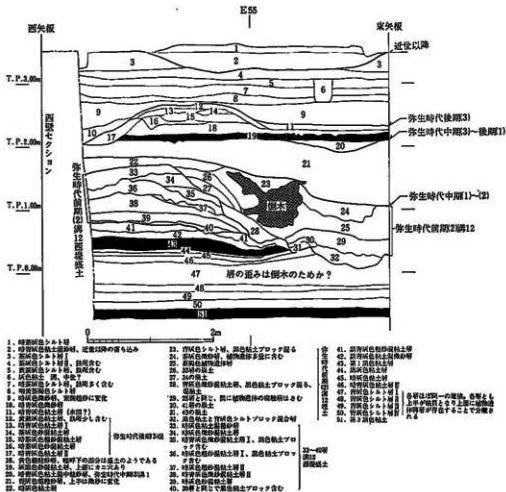
- | | | |
|----------------------|--------------------------|---------------------|
| 1. 赤褐色シルト層、鉄灰含む | 18. 白灰色粘砂層 | 32. 灰褐色粘土層、黒色粘土と菅灰 |
| 2. 赤褐色シルト層、鉄灰含む、灰色強い | 19. 暗灰色粘土層目、弥生時代中期(1)埋没層 | 33. シェルトブロック層 |
| 3. 黄褐色シルト層、鉄灰含む | 20. 灰褐色粘土層中粒砂層、粘土層埋没層 | 34. 暗褐色シルトと黒色粘土ブロック |
| 4. 赤褐色シルト層目、鉄灰含む | 21. 灰黄色粘砂層 | 35. 菅灰層 |
| 5. 黄褐色シルト層目、鉄灰含む | 22. 灰褐色粘砂層 | 36. 暗褐色粘砂層 |
| 6. 灰褐色粘砂層 | 23. 灰褐色粘砂層、植物遺体含む | 37. 暗褐色粘砂層 |
| 7. 灰褐色粘砂層 | 24. 灰褐色粘砂層、植物遺体含む | 38. 暗褐色粘砂層 |
| 8. 灰褐色粘砂層 | 25. 灰褐色粘砂層、植物遺体含む | 39. 暗褐色粘砂層 |
| 9. 灰褐色粘砂層 | 26. 暗褐色粘砂層 | 40. 暗褐色粘砂層 |
| 10. 灰褐色粘砂層 | 27. 暗褐色粘砂層 | 41. 暗褐色粘砂層 |
| 11. 暗褐色粘砂層 | 28. 暗褐色粘砂層 | 42. 暗褐色粘砂層 |
| 12. 暗褐色粘砂層 | 29. 暗褐色粘砂層 | 43. 暗褐色粘砂層 |
| 13. 暗褐色粘砂層 | 30. 暗褐色粘砂層 | |
| 14. 暗褐色粘砂層 | 31. 暗褐色粘砂層 | |
| 15. 暗褐色粘砂層 | | |
| 16. 暗褐色粘砂層 | | |
| 17. 灰褐色粘砂層、粘土層も多し含む | | |

第45図 4区北壁断面図

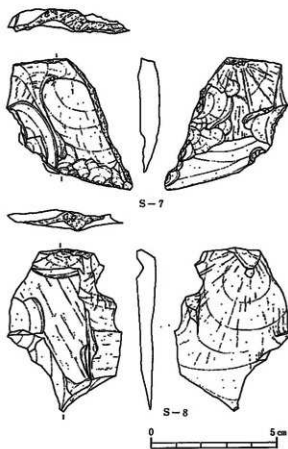
深さは西堤で2.0m、東堤では1.5mを測り、西堤が0.5m高い。溝内には柳と思われる大木が倒れ込んでおり周囲の堆積層は植物遺体が充満していた。しかし溝埋土の下半にはやはり黒色粘土と青灰色シルトブロックの混合層がみられる。倒木は流れてきたとは考えられず近くに立っていたものが溝の埋設過程で倒れ込んだものと考えられる。下半は、ブロック土がみられるのでその量から考えて周囲の崩壊による堆積と思われる、木が倒れ込んだあたりからは流水性の自然堆積による埋設がすすんでいくようである。また堤の崩土も斜面に観察される。

一遺物一 (第48図、図版56・57)

西堤から土器片が13片出土しており、うち壺の一片には寛播き直線紋がみられ、直線間の凸部には刻目を施している。溝内からは主として倒木付近の植物遺体層から約10片の土器片が出土したが特徴的なものはない。東堤からは4片の土器が出土し、うち壺の一片には貼り付け突帯に刻み目が施されている例があった。以上は、破片ばかりで図示してはいないが、胎土も生駒西麓産



第46図 5区北壁断面図



第47図 4区溝11出土石器・剥片

溝18 (第44図、図版9)

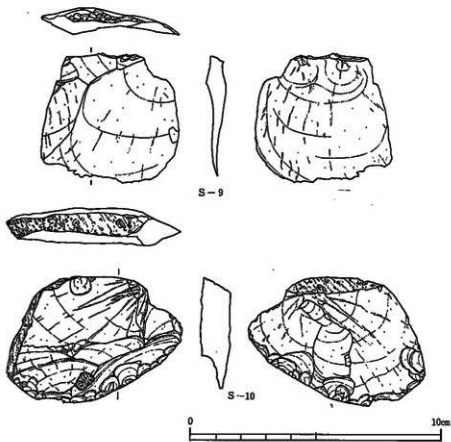
溝12の堤を除去して弥生時代前期(2)基盤層である暗灰色粗砂混粘土層と黒青灰色粗砂混粘土層の一部を検出すると溝12に交差してほぼ東西方向にはる溝13が検出された。溝13の埋没後同じ面から溝12が掘り込まれ、堤が盛られたことがわかる。溝13は上幅約2.3m、下幅1.7mを測り、深さ約0.5mの逆台形断面を示す。埋土は、3層に分けられる。最下層は青灰色粘土と黒色粘土の混合層であり、掘削時の残存土と考えられる。中央部は茶青灰色粘土混微砂層であって流水性の自然堆積を示している。最上層は青灰色粘土と黒色粘土ブロックに粗粒砂が混在しており人為的に埋められたものと思われる。遺物は出土しなかった。

溝14 (第49・50図、図版11)

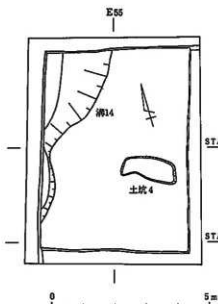
7区で検出した溝である。弥生時代前期河川2の氾濫堆積層上から掘り込まれている。従って河川2と溝14は前期(2)として同一時期にとらえているが河川2の流れていた時期と溝14の掘り込まれた時期とはかなり異なるだろう。溝14がここに掘り込まれた時期には、おそらく河川2の流れは別の場所に移動し、溝11や溝12よりも新しい段階になると思われる。溝の方向は溝11・12と同じである。埋土は青灰色の微砂層もみられるが、青灰色粘土と黒色粘土のブロックを多く

を示すものと明らかに異なるものが混在している。

石器は、剥片(S-9)と削器(S-10)が出土した。剥片は調整打面を持っており、腹面の観察ではリングが2ヶ所の打痕から拡散しており、所謂ツインバルブ(Twin-bulb)を持つ剥片と言えよう。削器は、自然面打面を持ち、背腹両面の下縁に二次調整が施されている。腹面には大きな打痕裂痕が観察される。背面には二次調整に先立つ下縁からの大きな剥離がみられる。本例で特に言及しておきたいのは、刃部の使用痕である。他のほとんどの削器はこのような使用痕を肉眼観察できないが、本例では明らかに刃部が潰れ、磨耗し、丸くなってしまっている。使用の対象物によるのであろうが、本例は使用痕の顕著な一例と言える。



第48図 5区溝12出土石器・剥片

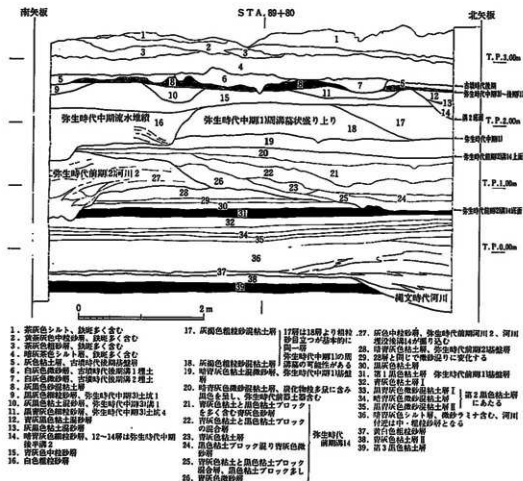


第49図 前期(2)7区平面図

含む層が基本である。一時期流れていた部分もあるがその後は人為的に埋められたようである。最上層の暗青灰色微砂混粘土層は、埋没後の凹みに堆積した層であるが炭化物粒を多量に含み黒色を呈する部分があるため弥生時代前期の土器片などが多量に出土した。

—遺物— (第51・52図、図版35・36・47・57・58)

コンテナ1箱分の遺物が出土した。石器は砥石・削器・剥片などが数点、そのほか土製円板も数個みられるが、他は弥生土器である。また、1点縄文土器も認められた。



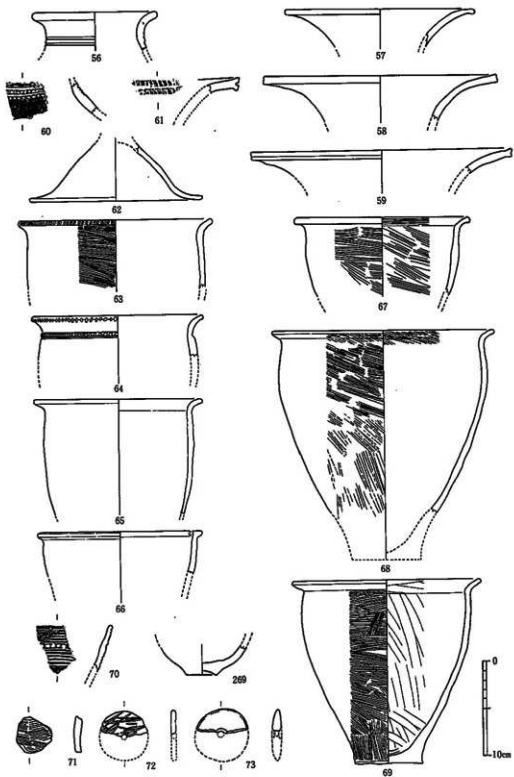
第50図 7区西壁断面図

弥生土器は壺・壺蓋・甕・甕蓋・鉢があり、時期が解るものはいずれも前期に属する。大半は溝14上半部の暗青色微砂泥粘土層から出土している。

壺は全体の形が解るものはないが、口縁部の形態は短く外反するもの(56)と大きく開くもの(57~59・61)があり、後者の存在が顕著である。さらに後者では、口縁端部を丸くおさめるもの(57)、面をもつもの(58)、面に縦糸状の紋様を施すもの(61)などが認められる。体部の紋様では、段+笥描き直線紋(少条)(250)、笥描き直線紋(少条・多条)(253)がみられる。また、沈線に刺突紋を伴うもの(60)、沈線の間に竹管紋を施すものが1点ある。

壺蓋は小片が1点出土した。

甕は、如意形の口縁をもつもの(63~65、67~69)と内外に拡張する口縁をもつもの(66)がある。如意形口縁の甕は、口縁端部に刻目を施すもの(63・64・251・252)と施さないもの(65・67~69)にわかれ、前者では、さらに頸部に紋様をもつものと頸部無文のものがある。頸部紋様には、段+笥描き直線紋+刺突紋(64)、笥描き直線紋(少条)がみられる。内外面刷毛



第51图 7区溝14出土土器

調整を施すものと、外面を刷毛調整し、内面は撫でて調整するものが認められる。口縁部を内外に拡張するものは、66の1例だけで生駒西麓産の胎土が用いられている。内外面は撫でにより調整しているようである。

変蓋は1点出土した(62)。薄くつくられており、口縁端部は外向する面をつくる。内面は撫で調整するが、外面は表面がいたんでおり、調整不明である。口縁部は二次焼成により赤変している。外面には煤、内面口縁部付近にも煤あるいはふきこぼれによる炭が付着している。胎土に角閃石はみられない。

鉢は口縁端部を折り返さないもの(70)と外に短く折り返すものがある。確認できたものは各一点である。70は口縁部付近に篋描き直線紋を施す。胎土には角閃石を含まない。口縁を折り返すものは無文で、体部内外面を丁寧な篋磨きで調整している。生駒西麓産の胎土を使用している。

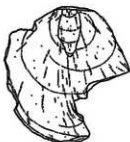
土製円板は4点出土した。うち2点には中央に穿孔がみられ、紡錘車と考えられる。72は焼成前に穿孔され、撫でにより調整されているが、他は土器片を利用したものである。弥生土器は、破片散にして凡そ300点余り出土しているが、生駒西麓産の胎土を使用したものとそうでないものが認められ、ほぼ半々であった。小片が多く器形ごとの割合は明確ではないが、特定の器形につきどちらの胎土が多いという現象はないようである。

269は、縄文時代晩期中頃の土器と考えられる。生駒西麓産の胎土でつくられている。

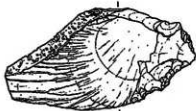
石器は、剝片(S-11)、削器(S-12)、砥石(S-13)がある。剝片は背面に大きく自然面を残すファーストフレイクである。他の製品を見ていると、このような形状の原礫を石核とし、順番に打点を後方移動させることによって得た剝片が、削器などに作りあげられるようである。削器はこれも自然面打面を持つやや横長の剝片を利用している。フィッシャーがよく発達する。下縁部が厚くなったためか二次調整は比較的薄い一方の側縁にみられる。背腹両面からの調整は、概して相互に場所を違えて施されている。形状としては、凸形の刃を作り出しており、削器とは言えS-10などとは使用目的が異なるのであろう。砥石は、一辺を残して他は欠損している。一面のみに磨耗がわずかにみられ、砥石と判断した。厚さ2cmほどのスレート状を呈している。石材は同定できていない。S-11は溝14の上部にみられた暗青灰色微砂混粘土層(炭化物粒多く、土器も多量に出土)から出土し、他は溝14埋土から出土した。

溝15(第56・57図、図版13)

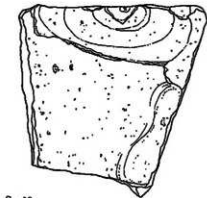
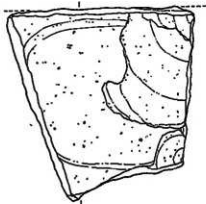
溝15~19は9区で検出したが、9区は特に工水管による攪乱がひどく、下部まで新層などの影響が及んでいたため明瞭に層などを把握できなかった溝が多い。溝15は9区を縦断するように南北方向に検出した。長さは約55mある。上幅は約3m、下幅は約2m、深さは検出面から約0.6mを測る。埋土は緑灰色微砂混粘土と黒色粘土ブロックの混合層である。一気に埋められたように思われる。(その2)調査区の溝8に連続すると考えている。堤は存在していたかも知れないが、攪乱のため確認できなかった。遺物は土器片が数点出土したのみである。



S-11



S-12

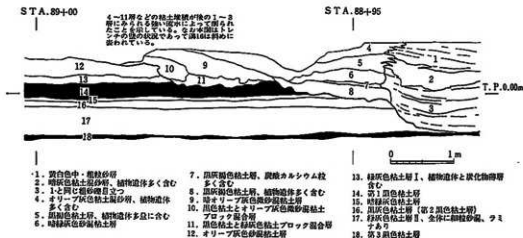


S-13

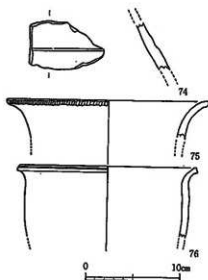
本面の使用痕



第52図 7区溝14出土磁石・削器・剥片



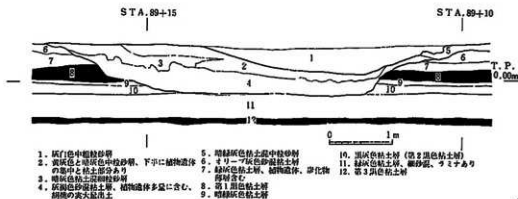
第53図 溝16西側断面図(9区西壁)



第54図 9区溝16出土土器

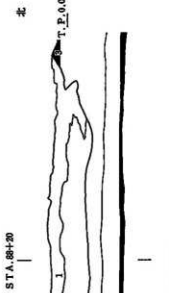
溝16 (第53・57図、図版12)

溝15とはほぼ平行して検出した。長さは約60mを測る。南端では東よりに方向が変化し、STA 89+15付近で西方へ分流して、これを溝19と呼ぶ。STA. 89+00付近の上幅は約3m、下幅は約1.5m、深さは検出面から約0.6mを測るが深いところは1.0mに達した。STA. 88+95付近で西方へ幅が広がり分流が存在するものかも知れない。溝の斜面にはチラスが存在する部分のみられた。埋土は溝15などとは一変して基本的に粗粒砂が充填している。底部には暗オリーブ灰色砂混粘土が堆積している部分のみられた。西方への分流が存在するのように見える STA. 88+95付近では第53図に示すように植物遺体を含む粘土層の堆積

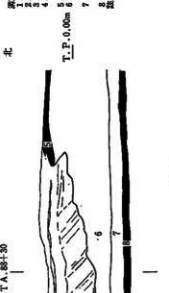


第55図 9区西壁溝19断面図

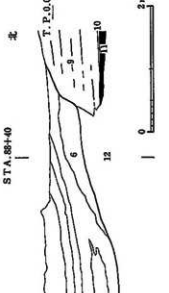
北
 図15
 1. 褐色粘土と緑灰色細砂質粘土
 2. 赤褐色粘土層
 3. 褐色粘土層
 4. 緑灰色細砂質粘土層、細砂質粘土層
 5. 褐色粘土層
 6. 緑褐色粘土層
 7. 褐色粘土層
 8. 褐色粘土層
 9. 褐色粘土層
 10. 褐色粘土層
 11. 褐色粘土層
 12. 褐色粘土層



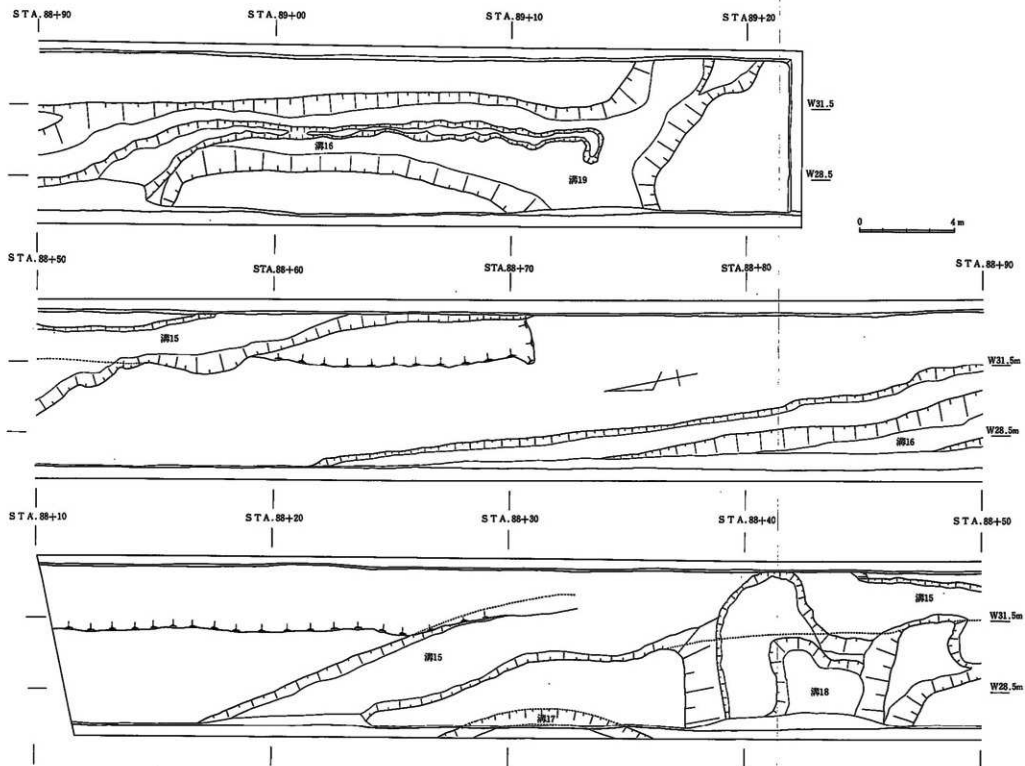
北
 図17
 1. 褐色粘土層 I
 2. 赤褐色粘土層
 3. 褐色粘土層
 4. 褐色粘土層
 5. 褐色粘土層
 6. 褐色粘土層
 7. 褐色粘土層
 8. 褐色粘土層
 9. 褐色粘土層
 10. 褐色粘土層
 11. 褐色粘土層
 12. 褐色粘土層



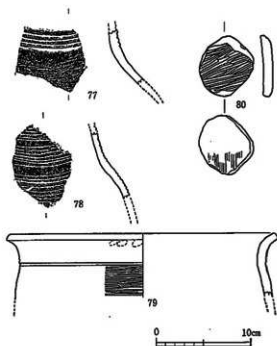
北
 図18
 1. 褐色粘土層
 2. 赤褐色粘土層
 3. 褐色粘土層
 4. 褐色粘土層
 5. 褐色粘土層
 6. 褐色粘土層
 7. 褐色粘土層
 8. 褐色粘土層
 9. 褐色粘土層
 10. 褐色粘土層
 11. 褐色粘土層
 12. 褐色粘土層



第56図 9区西壁溝15・17・18断面図



第57段 前期(2)9区平面图



第58図 9区溝19出土土器

一条の寛描き直線を持つもの(76)がみられた。

石器は剃片が数点出土したのみである。

溝17(第56・57図)

西壁の土層観察用アセ内(S.T.A.88+27~S.T.A.88+36)に検出した狐状の溝である。平面では攪乱のため事前に確認できず、掘削途上で検出した。内部は灰白色粗粒砂層が充填しており、一部に暗灰色粘土の帯もみられる。規模などは不明である。遺物は出土していない。

溝18(第56・57図、図版13)

溝15の西側S.T.A.88+38~S.T.A.88+55付近に検出した。溝15に切られているが平面形としては溝というより落ち込み状を呈している。最も深い部分で検出面から1.4mを測る。一部にはテラス状の隆起も見られる。埋土は、粘土層、微砂混粘土層、微砂層などが堆積しており、自然埋没を思わせる。性格は不明である。遺物は土器片が1点ある。

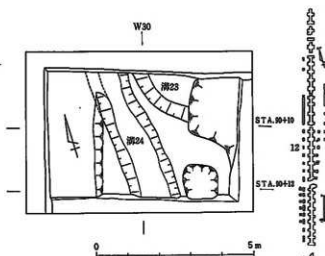
溝19(第55・57図、図版12・53)

溝19は、溝16の分流のような形でS.T.A.89+10~S.T.A.89+16付近に検出された。しかし溝16のように粗粒砂が堆積するのは上半だけで、下半は灰褐色砂混粘土層が厚くみられた。もともと溝16と19は同時に掘られており、最終の埋没過程が異ったのかあるいはまったく別の溝が連続してしまったのかは今のところ明らかにしえない。検出状況ではもともと同じ溝の分流と考えた方がよいように思われる。灰褐色砂混粘土層からは胡桃の実が大量に出土したほか遺物は土器片が数点ある。

もみられ、激しい流れに削られている様子もみられる。分流があるとしたら、こちらは粘土が堆積していたのかも知れない。この溝16は、埋土の様子などから(その3)調査区でいう「河川8」に連続するものと考えている。ただし溝の規模から考えて「河川8」の分流の可能性はある。

一遺物(第54図、図版36)

溝内から11片の土器小片が出土した。削り出し突帯のみられる壺片、貼り付け突帯に刻目のみられるもの(255)、寛描き直線紋のみられる甕片と壺片(254)がある。74は、段がみられる壺片である。甕では、ゆるやかに外反する口縁端部に刻目を施すもの(75)、口縁端部に



第59図 前期(2)12区平面図

水性の自然埋没を思わせる状況を呈しており一般にみられるブロック土はなく、遺物も出土していない。幅不明、検出した深さ0.7m。

溝21 (第60・61図)

12区で暗灰色粘土層を基盤層として検出した。上幅2m、下幅1m、深さは基盤層から0.3mを測る。内部は灰白色中粒砂層が堆積しており流水性の堆積を窺わせる。この砂層は、溝の周囲にもあふれ出たように堆積しており、灰色粘土混細粒砂層として暗灰色粘土層上に認められる(12区のみ)。溝21はその後機能を停止したようで、みかけは灰色粘土混細粒砂層から切り込んのように観察される。遺物は出土しなかった。

溝22 (第60図)

溝21から北へ分流するような状況で検出したのが溝22である。やや西よりに彎曲するがすぐ途切れてしまう。最大幅0.7m、下幅0.4m、深さ0.2mほどの小さな溝で、埋土は溝21と共通する。遺物は出土していない。

溝23 (第59・61図)

溝23と溝24は、前期(3)面の遺構であるが基盤層が異なるものの前期(2)と時期的にそう隔たるものではなく、12区のみで確認したためここに一括して報告する。

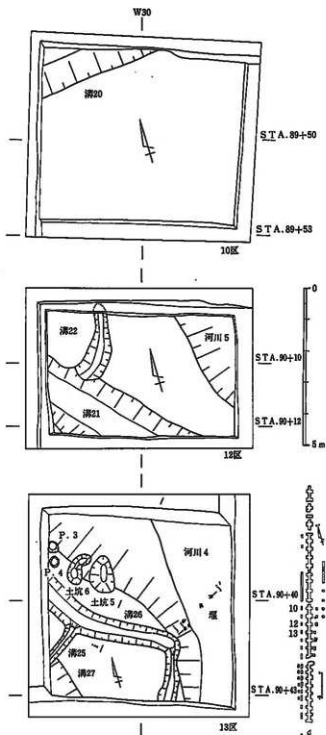
溝21が埋没した後12区は暗オリーブ灰色粘土層に覆われてしまう。これを基盤層として切り込むものが溝23と24である。溝23は、溝24を切り(断面観察)、河川5をも切り込んでいる。規模、方向などは擾乱を受けている部分もあり、よくわからない。検出した深さは最大で0.8mであった。埋土は、上半部が暗オリーブ灰色粘土層で砂のラミナを認めており、木片などが多く出土した。下半は、暗オリーブ灰色細粒砂混粘土層で粘土のブロックが混在していた。全体としては自然に埋没したもののようである。

一遺物一 (第62図、図版34)

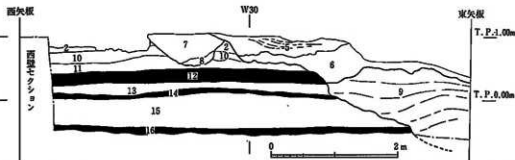
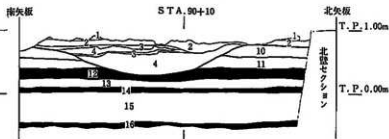
一遺物一(第58図、図版37・47)
多条の筥抜き直線紋を持つ壺(77、78、256)、段を持つ甕(79)、土製円板(80)などがみられた。石器も小さな剥片が一点出土した。

溝20 (第60図)

10区北西隅で東西方向に一部を検出した。10区では前期(2)面のベースは砂であり、溝埋土はオリーブ灰色粘土混微砂層であった。下半ほど粘性が強くなり、流

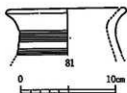


第60図 前期(2) 10・12・13区平面図



- | | |
|--|---|
| <p>1. 灰色粘土層細粒砂層 I
2. 暗オリーブ灰色粘土層
3. 暗オリーブ灰色砂質粘土層 I
4. 灰白色中粒砂層、弥生時代前期2層21
5. 暗オリーブ灰色粘土層 I、上半砂混りクマナあり、木片多く含む
6. 暗オリーブ灰色細粒砂質粘土層、粘土のブロックがみられる
7. 暗オリーブ灰色砂質粘土層 II、暗灰色粘土ブロック含む
8. 暗オリーブ灰色粘土層 II、若干砂混り</p> | <p>9. 灰白色中・粗粒砂層、~1.5m厚含む。弥生時代前期河川5、上面に溝23が埋り込む
10. 灰色粘土層細粒砂層。溝21、4層とは基本的に同じ層で連続する。溝は溝22時に本層上から切り込む
11. 暗灰色粘土層、ヒゼアンナイト含む
12. 第1黒色粘土層
13. 緑灰色粘土層 I
14. 第2黒色粘土層
15. 緑灰色粘土層
16. 第3黒色粘土層</p> |
|--|---|
- 弥生時代前期3層23 溝24を切り込む
弥生時代前期3層24
- 注 12区のみ弥生時代前期3層と鑑定する明らかに前期2層位層(ここでは19-11層)と異なる。さらに上の層から掘り込まれた溝(23・56)を確認したからである。

第61図 12区西及び北壁断面図

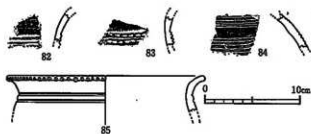


第62図 12区溝23出土土器

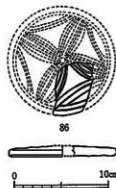
土器片が上半部から7点出土した。壺・甕の小破片がほとんどであり、甕の破片には口縁端部に刻み目が認められる個体がある。そのうち実測に耐えうるものとして一点示したのが第62図の壺(81)である。この土器には柳描き直線文がみられる。第I様式の土器に混じて第II様式の土器が共存する例は今回の調査でもいくつかあったし、他の遺跡でもまれにみられるようである。溝23は12区の前期遺構面のうちでも切り合いから最も新しい遺構であり、このような事実があってもただちに溝23を弥生時代中期のものとは言い難いと思われる。出土した遺物の大半は第I様式の土器片と思われ、前期の最も新しい段階の遺構と考えておく方がよいだろう。他に図版34に示す焼土塊も出土している。

溝24(第59・61図)

12区をほぼ南北にはしる溝である。溝23と共に前期(3)面の遺構であるが攪乱のため現実に暗オリーブ灰色粘土層が基盤となるのかどうかはわからない。その層もしくはそれ以上の層から切り込んでいる。溝23によって切られていることが北壁の断面から判明している。上幅1.4m、下幅0.4~0.8m、検出面からの深さ0.5mを測る。埋土は、暗灰色粘土ブロックを含む暗オリーブ灰色砂混粘土層であって底付近はやや粘性が強くなる部分がある。なお、埋土には多くの炭粒



第63図 12区溝24出土土器(1)



第64図 12区溝24出土土器(2)

や焼土塊がみられ、近くにそれらと関係するような遺構があったのかも知れない。

一遺物一(第63・64図、図版34・37)

約20点の土器が出土した。篋描き直線紋のみられる壺(84)、甕(85)などの破片が多い。甕の口縁端部には刻み目がみられる個体(85など)も多い。82・83は壺頸部の削り出し突帯の例である。82には突帯上に篋描き直線紋が施される。83の場合突帯がかなり鋭利な篋描き直線によって二分され、その上に列点文が施されている。86は、壺蓋片であるが、孔は一つ所観察され、全体に木葉紋が施されているものである。

溝25(第60図、図版14)

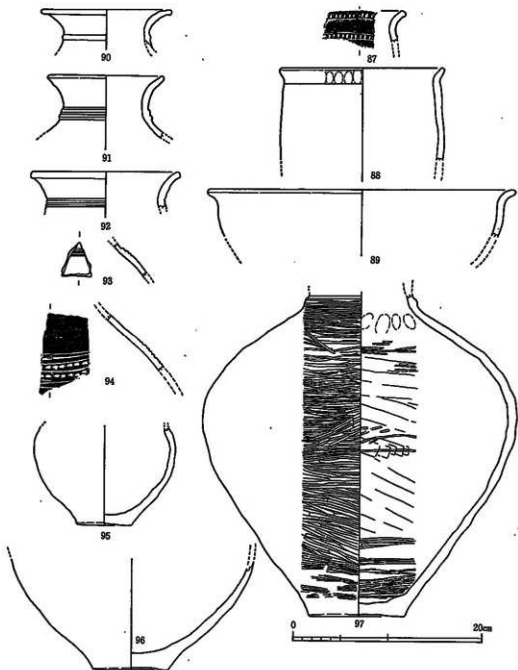
溝25～27は13区で検出された。溝25は、溝26から分流する小さな溝であって、溝27を切っている。上幅0.4m、下幅0.1m、検出面からの深さ0.1mを測る。遺物は出土しなかった。

溝26(第60図、図版14)

南北及び東西方向に直交する溝で一部は河川4の肩に接している。上幅0.4～0.8m、下幅0.1～0.4m、深さは約0.2mを測る。内部はオリブ黒色粘土層が堆積し、炭化物粒が多く認められた。この溝はおそらく河川4からの取水を行う用水路の機能を持ったものと考えられよう。河川4と接する部分に丁度堰が設けられていることもこれを肯定するものであろう。

一遺物一(第65図、図版38・45)

約50片の土器が出土し、そのうちいくつかは接合された。壺・甕がほとんどで、削り出し突帯・篋描き直線紋・口縁端部刻み目などの施文がみられる。90～97は壺形土器である。一条の削り出し突帯を持つもの(90)、2条のもの(91)、篋描き直線を2条重ねるもの(92)などがある。93は、段十篋描き直線紋(3条)の例である。94は、複数の篋描き直線紋と列点紋の組み合わせがみられる。95は胎土が白っぽく多くの砂を含んでいるのが特徴的である。97は口頸部に不明瞭な削り出し突帯を持ち、胴上半に最大径の認められる壺であるが、内面下半に赤色顔料が全体に認められた。この壺は、顔料を保管していたものと考えられる。(その3)の調査では多くの赤彩紋土器が出土しており、これら土器の赤彩に施すためのベンガラ(その3報告で分析済)を保存



第65図 13区溝26出土土器

していた容器ではないだろうか。興味深い例である。甕は、口縁増部に刻み目、頸部に沈線と列点を施す87や、頸部の列点を欠くもの(257)、まったく無文のもの(88)などが認められる。甕には外面に黒色物質を塗布するもの、焦げつきが認められるものなどがいくつかある。89は鉢と思われるが、全面に横方向の磨きが施されている。また、265などは壺底部に靱痕がついた例

である。なお、図示しなかったが一片だけ柿掻き文のみられる壺片が混在していた。12区溝23と同様の理解をしておきたい。

溝27 (第60図、図版14)

13区の南西隅に一部だけ検出した溝である。埋土は黒色粘土ブロックが混在した暗緑灰色砂混粘土層である。規模などは不明である。遺物は出土しなかった。

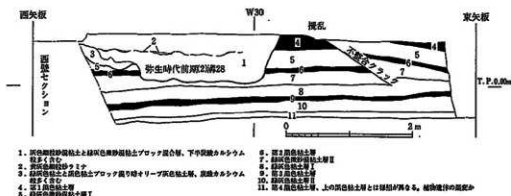
溝28 (第66・68図、図版17)

15区で南北方向に検出された溝である。西側は西壁セクション内及び攪乱によって確認できていない。東側も本来の掘り込み面からは検出していない。上幅3m以上、下幅2m、検出面からの深さ0.8mを測る。溝の掘り込みは東斜面は急角度でなされ、西斜面は緩傾斜を呈している。埋土は、灰色細粒砂混粘土と緑灰色微砂混粘土ブロックの混合層であり、一部に黒色粘土ブロックが混入することがある。埋土の様子から自然に埋没したとは考え難く、人為的に埋められたものと思われる。埋土の中ほどに黄灰色細粒砂ラミナがみられるが、埋める途中で一時水が入り込んだ程度のものとして理解している。遺物は、土器片が一点出土したのみである。

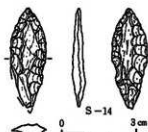
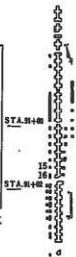
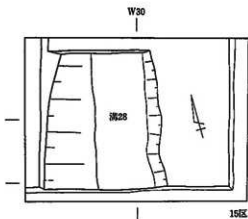
溝29 (第68・69図、図版15)

16区で検出された溝29と溝30は重複しており、29が新しい。河川3に対してのびているが河川3との関係が明確ではない。この点について、河川3と溝29の埋土は全く異なるので同時併存はありえないと考え、かつ、後述するように河川3と一部共存する溝30を切ることから河川3より新しいと判断している。埋土は大部分が暗緑灰色砂混粘土層であり、自然埋没と考えられる。断面でみると上幅は、4m以上あるようだが機能部は2m程と思われ、下幅は約1m、深さは検出面から約1mほどである。遺物は出土していない。

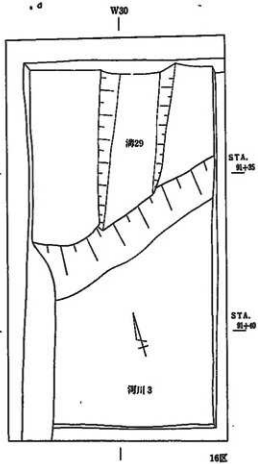
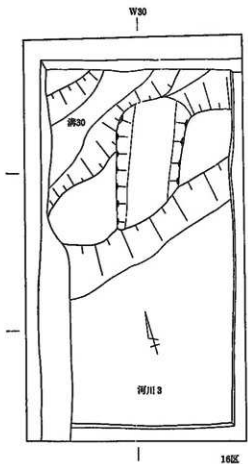
溝30 (第68・69図、図版75) 南西北東方向へ河川3に並行するようにのびている溝である。北側に暗緑灰色粘土層を盛った堤を伴っているが南側には見当たらない。上幅(北堤頂部から)1.5m、下幅0.6m、堤頂からの深さ約1mを測る。埋土は様々な灰色系の粘土あるいは砂混粘土層が重層的に堆積している。下半は少し黒色粘土の小ブロックが混入する層がある。中でも暗灰色砂混粘



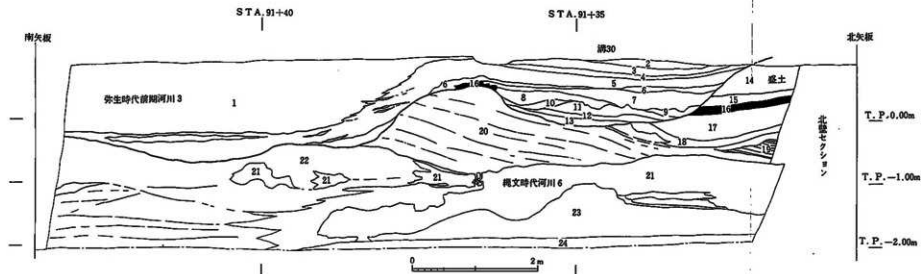
第66図 15区北壁断面図



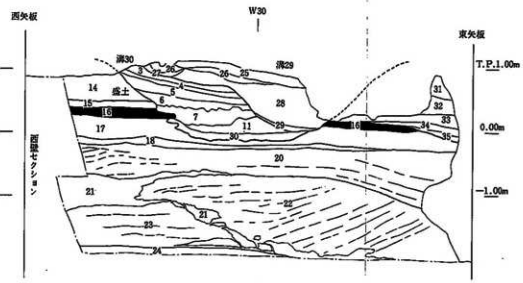
第67图 16区溝30出土石鏃



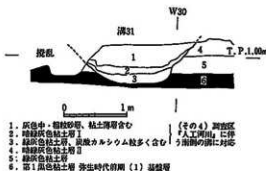
第68图 前期(2) 15・16区平面图



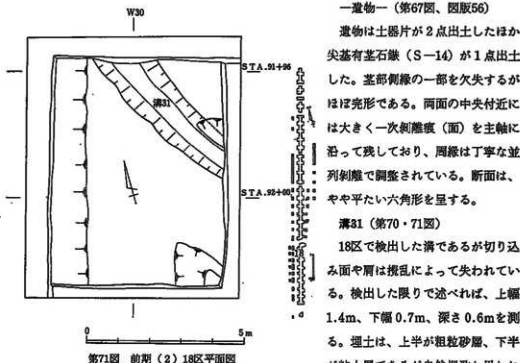
1. 浅黄色砂礫層(最大1m)含む。沖生時代前期河川3
2. 黄褐色砂礫層
3. 緑黄色粘土と暗緑色凝結土の互層
4. 緑黄色凝結土層。黄化程度多く含む
5. 暗緑色砂礫土層。河川3に連続している
6. 黄褐色土層
7. 灰色粘土層。粗粒砂礫を伴う。炭酸カルシウムを含む
8. 暗緑色粘土層
9. 緑黄色粘土層。炭酸カルシウムを多く含む
10. 暗緑色粘土層。炭酸カルシウムを多く含む。暗緑色泥炭層
11. 緑黄色粘土層。炭酸カルシウムを多く含む。炭酸カルシウムを多く含む
12. 暗緑色砂礫土層
13. 暗緑色粘土層
14. 暗緑色粘土層。ピドアンナイトを多く含む。炭酸カルシウムを含む
15. 暗緑色粘土層。黄化程度多く含む。炭酸カルシウムを多く含む
16. 赤い粘土層。沖生時代前期河川3の河床
17. 緑黄色粘土層。下位は暗緑色土層に連続
18. 炭酸カルシウム。凝結土層の途中
19. 暗緑色粘土層。凝結土層の途中
20. 炭酸カルシウム。凝結土層の途中
21. 暗緑色粘土層。凝結土層の途中
22. 暗緑色粘土層。凝結土層の途中
23. 暗緑色粘土層。凝結土層の途中
24. 暗緑色粘土層。凝結土層の途中
25. 暗緑色粘土層。凝結土層の途中
26. 暗緑色粘土層。凝結土層の途中
27. 暗緑色粘土層。凝結土層の途中
28. 暗緑色粘土層。凝結土層の途中
29. 暗緑色粘土層。凝結土層の途中
30. 暗緑色粘土層。凝結土層の途中
31. 暗緑色粘土層。凝結土層の途中
32. 暗緑色粘土層。凝結土層の途中
33. 暗緑色粘土層。凝結土層の途中
34. 暗緑色粘土層。凝結土層の途中
35. 暗緑色粘土層。凝結土層の途中



第60図 16区西壁及び東壁断面図



第70図 18区北壁(部分)断面図



第71図 前期(2)18区平面図

る。この溝単独では時期が不明であるが、位置関係から(その4)調査で報告された弥生前期～中期の「人工河川」の南側に沿う溝と考えられる。ここでは前期に含めて報告する。遺物は出土しなかった。

溝32 (第72・73図)

20区で検出されたほぼ南北にのびる溝である。上幅4m、下幅2.5m、検出面からの深さ1mを測る。埋土は、緑灰色粘土と黒色粘土ブロックの混合層である。人為的に埋められた様子である。溝32は、29区の溝39と連続する可能性が強く(その4)調査で言う溝2と同一である可能性もある。遺物は出土していない。

溝33 (第74図)

21区で検出した溝である。河川3が埋没した後に掘られた溝で、平面的には確認しなかった

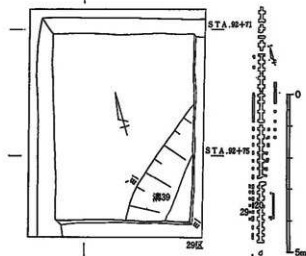
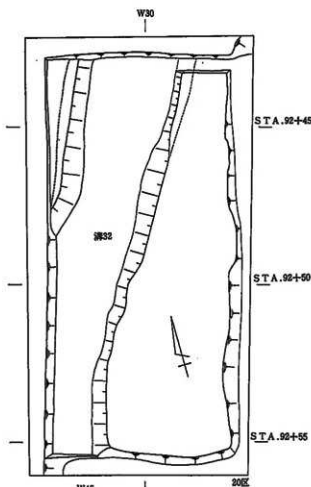
土層などは河川3の堆積と連続している。河川と同時併存を示す例と思われる。その後河川は、砂礫層で埋没し、溝30も順次流水堆積によって埋没したと思われる。溝30は河川3を意図して掘削されたものにちがいない。溝28と連続する可能性がある。

—遺物— (第67図、図版56)

遺物は土器片が2点出土したほか尖基有茎石鏃(S-14)が1点出土した。茎部側縁の一部が欠失するがほぼ完形である。両面の中央付近には大きく一次刻痕(面)を主軸に沿って残しており、周縁は丁寧な並列刻痕で調整されている。断面は、やや平たい六角形を呈する。

溝31 (第70・71図)

18区で検出した溝であるが切り込み面や肩は攪乱によって失われている。検出した限りで述べれば、上幅1.4m、下幅0.7m、深さ0.6mを測る。埋土は、上半が粗粒砂層、下半が粘土層であるが自然埋没と思われる。



第72図 前期(2) 20・29区平面図

が、河川3掘削後に北壁断面で認められた。肩の上部約1/3は極めて緩やかな傾斜を示すが、それより下は急に落ち込む。上幅は2.2m以上、下幅は1m以上、深さは0.6mである。埋土は、緑灰色中粒砂と暗緑灰色粘土のブロック混合層であって人為的に埋められた可能性もあるが砂が多いため断定できない。溝33は、23区溝34、24区溝35と連続する可能性があり、(その4)調査で言う「溝1」と連続するものようである。遺物は出土していない。

溝34 (第75図)

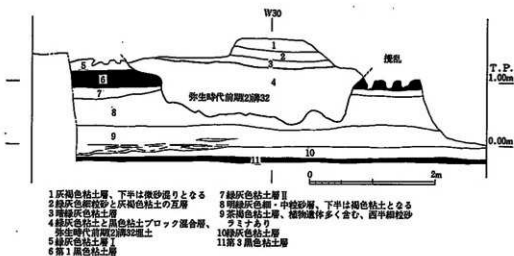
23区で検出した南北方向の溝である。半分以上は調査区外である。埋土は、下半に明緑灰色粘土層と暗オリーブ灰色粘土層がみられ、その上を炭酸カルシウムの薄層が覆ったあと緑灰色粘土ブロックと黒色粘土ブロック混合層で埋没する。ある程度自然に埋った後、一気に埋められたようである。遺物は出土していない。

溝35 (第75図)

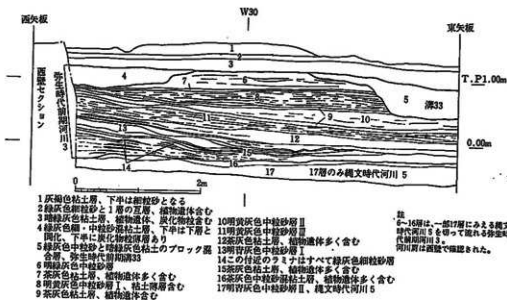
24区で検出した南北方向の溝である。東肩は調査区外であるが、上幅は4m以上を測り、深さは0.7mである。大半が攪乱によって破壊されていた。埋土は、緑灰色粘土と黒色粘土のブロックの混合層である。遺物は出土していない。

溝36 (第76・78図)

25区と33区で検出した溝である

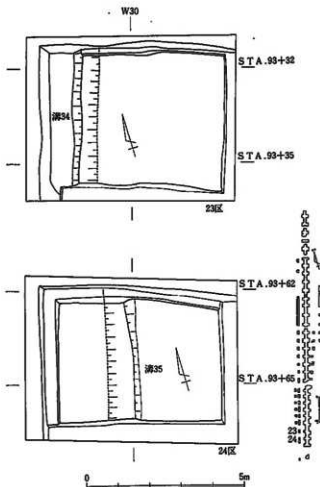


第73図 20区北壁断面図



第74図 21区北壁断面図

が、位置関係から考えて(その4)調査で言う「人工河川」と連続するものようである。切り込み面の把握からそれらは弥生時代前期につくられた溝・堤であることが解る。その後ある程度溝の埋没がすすみながらも残っていた溝状の凹みを水田の用排水路として利用したようである。(その4)の調査で出土した中期の土器は、後者の時期を反映するものと考えられる。25区では溝36の西側の堤を検出している。ベースは縄文時代河川6を埋める砂である。ただ場所によっては、第1黒色粘土層が部分的に形成され、さらにその上の粘土がベースになったところもあるようだ。いずれにしても弥生前期に遺構が形成されたことは疑いない。堤は弥生時代中期の流水堆積と現代の攪乱によってかなり破壊されているが3~4層の盛土が認められる(第76図)。溝底までは、深さ1.1mを測る。溝埋土は暗オリーブ灰色砂混粘土層が主体

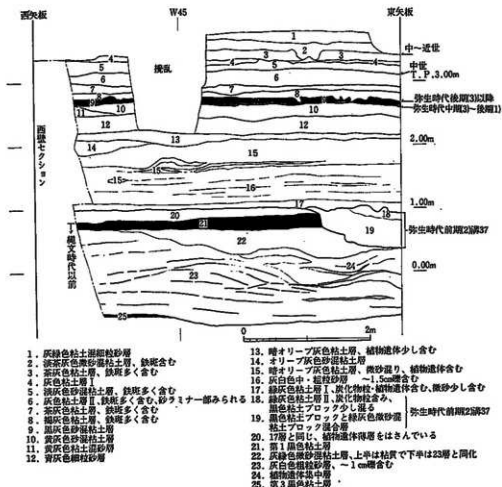


第75図 前期(2) 23・24区平面図



- 1 暗オリーブ灰色砂混粘土層、相模礫体、炭酸カルシウム粒多く含む } (その4)調査で「人工河川」と
 2 1とはほぼ同じで砂粒層となり、黒色粘土小ブロック含むようになる } 判している溝36
 3 暗灰色粘土層
 4 緑灰色粘土層、黒色粘土塊小ブロック含む } 溝36に伴う堤と考えられる
 5 暗緑灰色粘土層、砂粒少し含む
 6 暗緑灰色砂混粘土層
 7 黄灰色粗粒砂層 (縄文時代河川6)

第76図 25区溝36断面図



第77図 26区北壁断面図

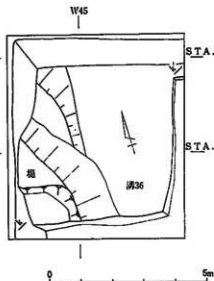
となり、植物遺体を多く含んでいる。上半は弥生時代中期の流水砂で覆われている。遺物は出土していない。

溝37 (第77・80区)

26区東端ではほぼ南北に検出した。半分以上調査区外なので規模は不明であるが、深さは0.6mを測る。埋土は黒色粘土と緑灰色砂岩粘土のブロック混合層を主体としており、人為的に埋められたものと思われる。遺物は出土しなかった。溝37は、28区溝38に連続すると思われる。

溝38 (第79・80・83区、図版16)

28区で検出した溝で、方向から考えて溝37(26区)と連続する可能性が高い。調査区内でゆるやかなりねりを見せる。上幅3.5m、下幅2m、深さ0.6~0.7mを測る。埋土は、黒色粘土と緑灰色粘土のブロックが主体となる。底部に水の流れたような痕跡もなく、一時に埋められたようである。北壁の断面でみると、東側の埋土が高くなっており、東側に堤が存在した可能性がある。1-1'の断面では、埋没後少しは凹みが残っていたようで植物遺体の薄層が堆積して後は自



第78図 前期(2)25区平面図



然に埋設している。なお28区では、河川3の東岸をこの溝が切っていることが判明した。

遺物は出土していない。

溝39 (第72・82図)

29区の南東角に一部を検出した。現状で深さは0.7mを測る。埋土は例のごとく緑灰色粘土と黒色粘土のブロックで占められるが、底部付近に暗オリーブ灰色粘土層が堆積した後一時植物遺体層が形成されているので自然の埋設が少し進んだ後一気に埋められたものと思われる。

遺物は出土していない。

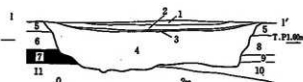
溝40 (第84・86図)

31区で北西↗南東方向に検出した溝である。両側に堤が認められ、堤頂部間幅6~7m、下幅約2m、深さは北側堤頂部から1.5mを測る。両側の堤には、黒色粘土の小ブロックを含む黒灰色粘土層や暗青灰色粘土層などが盛られる。溝の埋土は黒色粘土と緑灰色粘土の小ブロックを含む暗緑灰色粘土層を下層として順次流水層の堆積がみられるので基本的には自然埋設を考えた。

一遺物一 (第81図、図版42)

遺物は、オリーブ灰色細粒砂混粘土層付近から40数点の土器片が出土した。うち30点余りは同一個体の壺と思われ、梯描き直線紋・波状紋が認められるがほとんど接合できない。他は、第I様式の壺や甕の破片である。98は、口頸部に段をもつ壺の破片である。

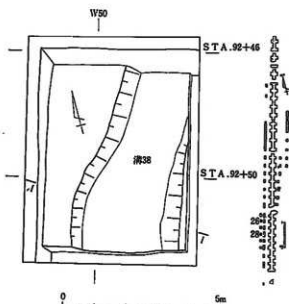
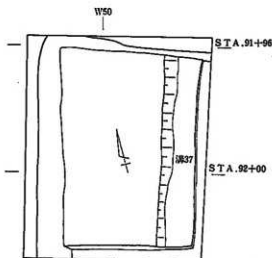
溝41 (第85図)



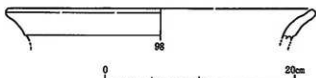
1. 暗緑灰色微砂混粘土層
2. 緑灰色粘土層、少し黒色粘土ブロック含む
3. 植物遺体層
4. 緑灰色粘土と黒色粘土ブロック混合層、下半に埋砂ラミナあり、灰礫カスシウム粒含む
5. 緑灰色粘土層、暗灰色粘土小ブロック含む
6. 緑灰色粘土層
7. 第I黒色粘土層
8. 青灰色粘土混微砂層
9. 8と同じで植物遺体多く含む
10. 黒灰色微砂混粘土層
11. 白灰色中・粗粒砂層

第79図 28区溝38断面図

32区で検出したがほとんど断面調査に等しい。位置的にみて(その4)調査区で言う「溝6」と同一の遺構である。西側にはわずかな盛土が認められるようである。深さは0.7mを測る。埋土は最下層に黒色粘土と緑灰色粘土のブロック層があり、上半は暗オリーブ灰色粘土層である。黒色粘土の小ブロックは全体にみられる。一時植物遺体の薄層が形成さ



第80図 前期(2)26・28区平面図



第81図 31区溝40出土土器

れている。人為的なものかどうかはわからないが半分程度ブロック土で埋まった後自然埋没したように思われる。

遺物は出土しなかった。

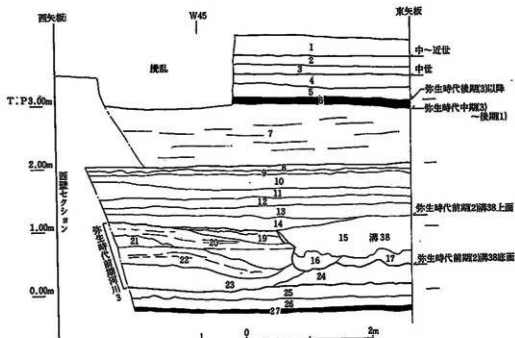
溝42 (第87図、図版17)

5-5区で検出した溝であるが、これは(その2)調査区の溝2と連続するものである。肩は西側で微細な堤を認めた。(その2)調査区の溝2は堤が削平を受けていると報告されているが少しは残されているようである。また、堤からの斜面にはテラス状の平坦面も認めることができる。埋土は、青灰色粘土と黒色粘土のブロック混合層が主体とはなるが、分層が可能である。この溝では、最下層に粗粒砂のラミナがみられる青灰色シルト層が存在しており、埋没前に速い流水があったことを物語っている。流水による埋没が少し進んだところブロック混合層にも粗粒砂ラミナがみられたりするのである。溝上面は弥生中期(1)面の水田となるが、堀上面は水田上に顔を出していたようである。遺物は土器片数点と石器がある。



1. 緑灰色粘土と黒色粘土ブロック混合層、炭酸カルシウム粒含む
2. 赤褐色粘土、植物遺体層
3. 暗オリーブ灰色粘土層
4. 緑灰色粘土と黒色粘土ブロック混合層
5. 暗緑灰色粘土層
6. 緑灰色粘土層
7. 第1黒色粘土層
8. 緑灰色微砂要粘土層

第82図 29区溝39断面図

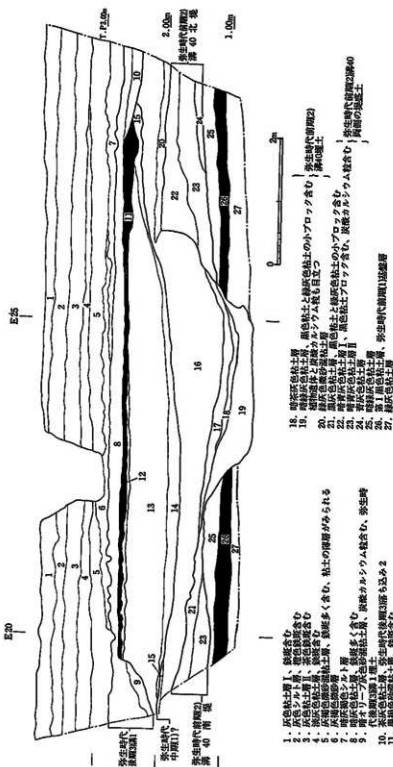


- | | | |
|---|--|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 灰緑色細粒砂層、山灰(その4) IV-V層にあたる 2. 灰色粘土層Ⅰ、鉄灰少し含む 3. 緑灰色粘土層、微色鉄灰含む 4. 灰色粘土層Ⅱ、一部砂ミナみられる、微色鉄灰含む 5. 緑灰色粘土層、鉄灰多く含む 6. 黒灰色細砂層、微色鉄灰多く含む、山灰(その4)互層にある 7. 灰白色細砂及び礫層、上半は青灰色細粒砂となる 8. 暗灰色粘土層、植物遺体多く含む 9. 暗緑灰色粘土層、炭酸カルシウムを含む 10. 緑灰色細砂層 11. 暗オリーブ灰色粘土層Ⅰ、微砂少し含む 12. 暗緑灰色微砂粘土層、微砂ミナと粘土互層堆積 13. 暗オリーブ灰色粘土層Ⅱ、植物遺体及び炭酸カルシウムを含む 14. オリーブ灰色粘土層、炭酸カルシウム微とピアンナイト含む | <ol style="list-style-type: none"> 15. 黒色粘土、オリーブ灰色粘土、緑灰色粘土などのブロック混合層 16. 黒色粘土、緑灰色粘土ブロック混合層 17. 緑灰色微砂層、黒色粘土ブロックなど少し含む 18. 灰緑色粘土層、炭灰物多く含む 19. 緑灰色微砂粘土層 20. 暗緑灰色微砂及び中粒砂層、下半実寄りには暗灰色微砂粘土層、炭化物、植物遺体を含む 21. 暗灰色粘土層、炭砂わずかに含む 22. 暗灰色微砂粘土層 23. 灰中・粒状砂層、～1.5m厚含む 24. 緑灰色微砂層、上半粒質、下半クミナみられる 25. 暗灰色粘土層、植物遺体を含む 26. 緑灰色粘土層、植物遺体を含む 27. 黒色粘土層 | <p>弥生時代前期2溝38
15層の裏面が高く
なっているのは掘が存
在する可能性がある</p> <p>20-23層は弥生時代
前期河川S、黒色粘
土層はみられない、
河川埋没痕跡が認め
られる</p> |
|---|--|---|

第83図 28区北壁断面図

一遺物一 (第89図、図版55・56・57)

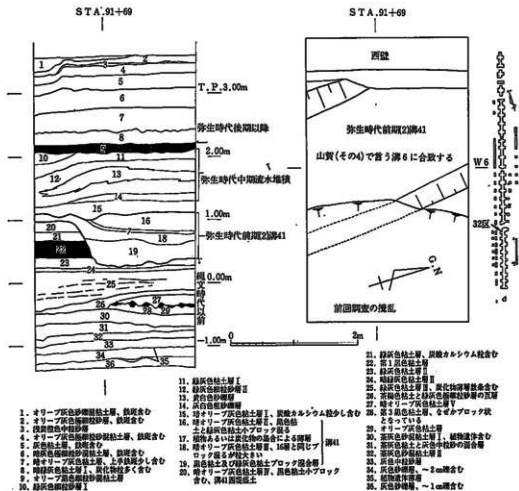
石器は5点出土している。剃片(S-15・16)、石鏃(S-17)、割器(S-18)、石庵丁(S-19)がある。そのうち石庵丁だけは溝上面に堆積した弥生時代中期(1)基盤層の暗茶褐色粘土層から出土しているので、中期に入る遺物の可能性がある。他は溝埋土と思われる暗茶褐色粗砂混粘土層から出土しているので前期のものと考えた。剃片(S-15)は自然面打面を持つ不定形なもので、製品とするには適当な形状を呈さない。剃片(S-16)は、小型の縦長剃片であるが背面には両設打面を示唆する剝離痕がみられる。打面は自然面。石鏃(S-17)は、凹基無茎式で完形品である。先端付近の両面に一次剝離痕(面)がわずかに残されているほかは全体に丁寧な調整が加えられている。割器としたS-18は、調整打面を持つ不定形な剃片を利用している。腹面の右縁に小さな剝離が約3cmにわたって並んでいる。これを何らかの機能部と考えたが、一般の割器とは異なる。石庵丁(S-19)は、ほぼ6割を欠失している。背は丸く右面の擦痕が顕著である。刃は片刃で刃部には刃こぼれ状のギザギザがみられる。孔は両面から穿たれ、孔徑



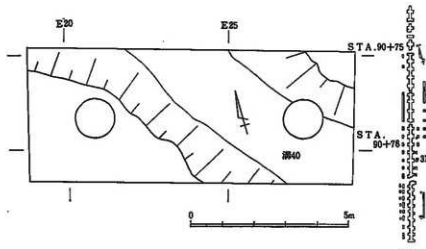
1. 灰色粘土層Ⅰ、砂礫含む
2. 灰色シルト層、砂礫含む
3. 灰色粘土層Ⅱ、茶色砂礫含む
4. 灰色粘土層、砂礫含む
5. 灰色細砂質粘土層、砂礫多く含む、粘土の層層がみられる
6. 灰色細砂質粘土層、砂礫含む
7. 灰色シルト層、砂礫多く含む
8. 灰色粘土層、砂礫多く含む
9. 暗灰色粘土層、砂礫多く含む
10. 代層3層1連土
11. 灰色粘土層、養生時代前期3層も含み
12. 暗灰色砂質粘土層、砂礫含む
13. 灰色細砂質粘土層、砂礫含む
14. 灰色粘土層、植物遺体多く含む
15. 灰色砂質粘土層
16. 灰色細砂質粘土層、一部ではシルト質となり、微砂層となる部分もある、養生時代中期(Ⅰ)層群?
17. オリーブ灰色細砂質粘土層

18. 暗灰色粘土層
19. 暗灰色粘土層、黒色粘土と暗灰色粘土の小アブロック含む、養生時代前期2)
20. 暗灰色粘土層、黒色粘土と暗灰色粘土の小アブロック含む、養生時代前期2)
21. 暗灰色粘土層、黒色粘土と暗灰色粘土の小アブロック含む、養生時代前期2)
22. 暗灰色粘土層、黒色粘土と暗灰色粘土の小アブロック含む、養生時代前期2)
23. 暗灰色粘土層
24. 暗灰色粘土層
25. 暗灰色粘土層
26. 暗灰色粘土層
27. 暗灰色粘土層

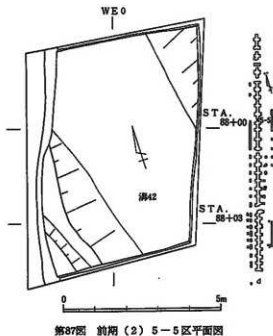
第84図 S11区北壁断面図



第85図 32区平面及び西壁断面図



第86図 前期(2) 31区平面図



第37図 前期(2) 5-5区平面図

0.6cmである。緑泥片岩製。

土坑1 (第28図、図版4)

1区溝1と溝2に切られるように存在したものであるが規模は不明である。楕円形で径3mほど深さ0.1~0.2mを測る。粘土により埋まっている。性格は不明、遺物も出土しなかった。

土坑2 (第28図、図版4)

土坑1のすぐ南で溝2に切られて存在した。径0.5mの円形あるいは隅丸方形を呈するようで、深さは0.5mを測る。これも内部に粘土がつまっており、遺物は出土しなかった。

土坑3 (第36図、図版6)

3区で溝6に切られて掘られていたもので、長辺0.5m以上、短辺0.3mほどの長方形を呈し、深さは0.2mを測る。これも内部は粘土であり、性格は不明、遺物も出土しなかった。

土坑4 (第49図、図版11)

7区で溝14の検出面から掘り込まれていた。従って河川2埋没後の上面で検出されたわけであるから前期(2)段階でも新しい方に属する。長辺1.9m、短辺0.6mの歪んだ長方形を呈す。深さ0.1mを測り、内部には、灰色粘土がつまっていたが性格は不明である。

一遺物 (第90図)

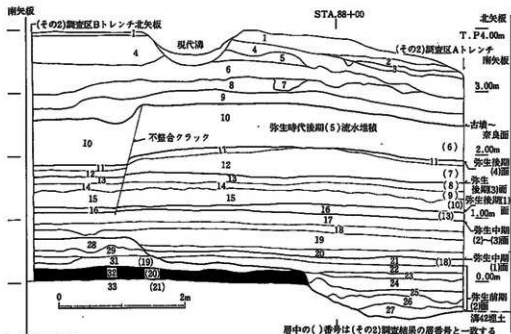
20数個の土器片が出土した。ほとんどが小片で器形も不明であるが、篋描き直線紋が認められる例、口縁端部に刻み目がみられる変等がある。99は、わずかに口縁部を外反させる変であり、口縁端部には1条の篋描き直線紋がみられる。その他は剥離などでほとんどわからない。

土坑5 (第60図、図版14)

13区において、河川4の屑付近で検出した。長径1.2m、短径0.8mの卵形を呈し、高い部分からの深さは0.25mを測った。埋土は炭の入ったやや黒い灰色粘土で、多くの遺物が出土した。なお、13区においては、溝や土坑の検出中にも相当数(百数十片)の土器片が遺構面上の包含層から出土している。これらは、遺構内の破片と接合できる場合もあるので本来は遺構に伴うものであったと思われる。

一遺物 (第91図、図版39)

土坑5の内部から検出した土器片は、約50片にのぼる。ほとんどが第Ⅰ様式の壺・甕片であってその一部を図示した。壺(100~103)の場合、段+篋描き直線紋(100)、篋描き直線紋(101)、



- 層中の()番号は(その2)調査結果の層番号と一致する
- | | |
|--|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 黒褐色土 (粘土) 2. 黒褐色砂礫粘土層 3. 2層とはほぼ同じ、黄色っぽい 4. 黄褐色土層 (しまりのない粘土) 5. 時筑後色粘土層 I 6. 時筑後色粘土層 I 7. 青灰色粘土層 I 8. 時筑後色粘土層 II 9. 時筑後色粘土層 II 10. 青灰色中-細砂層、(その2)調査の8層、古墳-奈良時代面堆積層 11. 時筑後色粘土層 II 12. 時筑後色粘土と灰色砂層の互層堆積、(その2)調査の7層、弥生後期(4)面堆積層 13. 時筑後色粘土層 I、炭化物を含む、(その2)調査の8層、弥生後期(4)面堆積層 14. 時筑後色粘土層 II、炭化物と植物遺体多く含む、(その2)調査の9層 15. 時筑後色粘土層 II、炭酸カルシウム粒多く含む、(その2)調査の10層 16. 灰色粘土層、炭化物を含む、(その2)調査の13層にあたるか? 弥生後期(1)面堆積層 | <ol style="list-style-type: none"> 17. 時筑後色粘土層 I、弥生中期(2)-(3)面堆積層 18. 時筑後色粘土層 II 19. 時筑後色粘土層、下部は粘土質に変化する 20. 時筑後色粘土層 21. 時筑後色粘土層、弥生中期(1)面堆積層 (水田) 22. 時筑後色粘土層、炭酸カルシウム粒多く含む 23. 時筑後色粘土層、黄色粘土ブロックを含む 24. 時筑後色粘土と灰色粘土ブロック混合層 I、一部磁砂ラミナからなる炭酸カルシウム粒多く含む 25. 時筑後色粘土と灰色粘土ブロック混合層 II 26. 時筑後色粘土層、黄色粘土ブロックが混る 27. 時筑後色粘土層、磁砂ラミナからなる 28. 時筑後色粘土と時筑後色粘土混合層 I 29. 時筑後色粘土層 30. 時筑後色粘土層、炭酸カルシウム粒を含む 31. 時筑後色粘土層 II 32. 時筑後色粘土層 33. 時筑後色粘土層、黄砂層と粘土の互層となっている |
|--|---|

第88図 5-5区西壁断面図

篋掻き直線紋+竹管紋(102)などのバラエティが認められ、103では上半部が欠損するが層最大径直下に重弧紋を描いている。外面は丁寧な篋掻きが施されている。104は口縁端部の刻み目と二条の沈線が認められ、105は無文である。

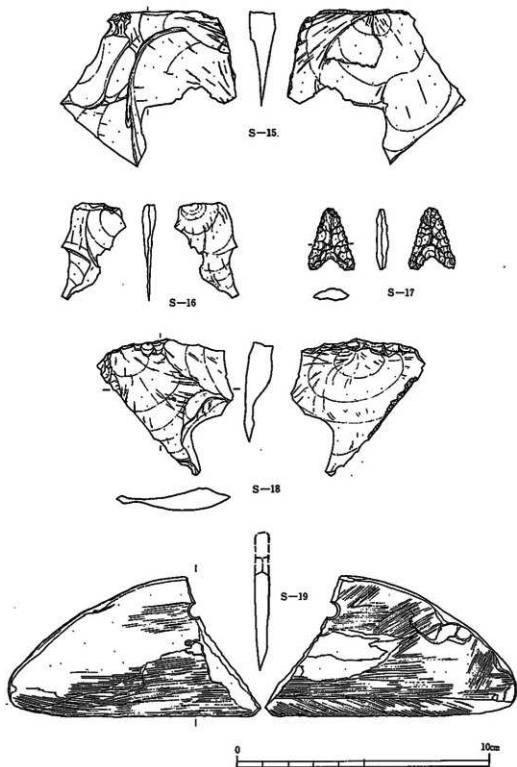
土坑6 (第60図、図版14)

土坑5のすぐ西隣に接して掘られていた土坑で、歪んだ瓢箪形を呈している。高い部分からの深さは、0.07~0.13mを測った。埋土は土坑5と同様で、遺物は10数個の第I様式土器片がある。

一遺物一 (第92図、図版39)

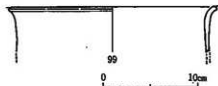
106は削り出し突帯+篋掻き直線紋を頸部にもつ壺で口縁端部にも篋掻き直線紋を施している。107は壺の小片と思われる、木葉紋が観察される。本土坑出土遺物には二次焼成を受けたような土器片が数個みられる。

Pit 1~4 (第60・93図、図版14)

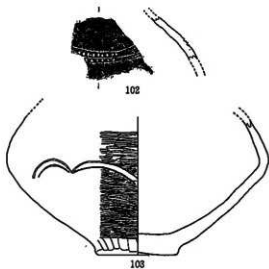
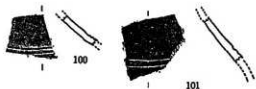


第89図 5-5区溝42出土石鏃・削器・石葱丁・刺片

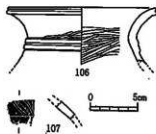
土坑に比べて相対的に小さなものを Pit とした。Pit 1～2 は 11 区の河川 1 埋設後の上面で砂をベースにして検出した。Pit の埋土はいずれも暗灰色砂混粘土層であった。Pit 1 は径 0.2m、Pit 2 は径 0.6m のものでいずれにも柱根が残存している。Pit の付近には、用途不明の木材も出土している。Pit 間の距離は約 1.6m を測り、(その 3) 調査区で検出した孤立柱建物の柱間と共通する要素があるので、本例も孤立柱建物の一部と考えられる。ただ、落ち込み 1 と称する緩やかな凹みが認められる内部に存在するので、あるいは堅穴住居址の可能性も残されている。こ



第90図 7区土坑4出土土器



第91図 13区土坑5出土土器



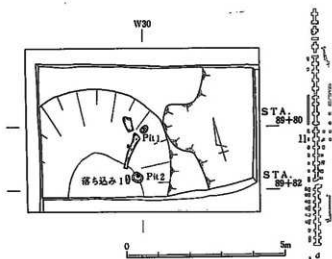
第92図 13区土坑6出土土器

の落ち込み 1 及び 11 区の前期 (2) 基盤層上には暗灰色砂混粘土層が堆積し、多量の土器片を含んでいるので、居住区及びその包含層の存在が指摘できる。

Pit 3・4 は、13 区の土坑 6 西隣に検出したもので、Pit 3 は河川 4 の層に位置する。両者共径 0.3～0.4m の円形を呈するが性格は不明である。埋土は周囲のベース面とほとんど変わらず、わずかに炭化物粒が認められることで判断した。Pit 4 からは土器片が 3 点出土した。

落ち込み 1 (第 93 図)

11 区の基盤層である砂層上面に存在した緩やかな凹みである。径 4 m 以上の円形を呈し、高い所とのレベル差は 0.2m を測る。性格は不明であるが内部には 11 区全体を覆っていた暗灰色砂混粘土層が堆積し、木材片や土器・石器類が多量に出土した。これについては包含層の項で報告する。



第93図 前期(2)11区平面図

であって、ここからも遺物が出土した。31区では、前期の溝40を覆う青灰色微砂混粘土層及び褐色粘土層からも遺物が出土しているがこれなどは時期的に中期に属する堆積かも知れない。

—遺物— (第94～101図、図版40～43・56・58・59)

11区暗灰色砂混粘土層からは、コンテナ1箱分の遺物が出土した。石銚1点とササカイト剥片が数点みられる他は弥生土器である。時期がわかるもののうち、第Ⅱ様式に属する壺の破片が1点認められるが、他は第Ⅰ様式のものである。

第Ⅰ様式の弥生土器では、壺・壺蓋・甕・鉢が出土した。壺は口縁部がやや開き気味のもの(112)もみられるが、短く外反するものが大半である。また、体部の文様は、段+笵描き直線紋(少条)や、削り出し突帯(113)が認められる他、木葉紋・重弧紋なども顕著である。すべて破片のため確実ではないが多条の笵描き直線紋はみられないようである。

壺の蓋(108)は、先のとがった笠形のもので、内外面に笵磨きを施す。中心部に2孔を穿つ。甕は、口縁部に刻み目をもつもの(117～119)とまたないものが認められるが、前者が顕著である。刻み目をもつものでは、頸部無文のもの、段をもつもの、笵描き直線紋(少条)を施すものがある。また、119は刻み目を6個1単位に間隔を設けて施している。刻み目のないもの(破片の為確実とはいえないが)でも頸部に笵描き直線紋をもつものと無文のものがある。体部調整は刷毛と撫でがあるものの、破片が小さいうえ外面に炭が付着していたりで明確ではないものも多い。120～122は甕の底部と考えられる。121は、台状部の外面を笵削りによって整形し、120と共に外底面に笵磨きを施している。

鉢は、口縁部を短かく外に折り返すものと、折り返さないものがある。折り返すものでは、口縁部下に笵描き直線紋を2条施すものと無文のものが認められる。口縁部が体部から変化なくつづき上向きの面をもっておわる123では、口縁部外面に2条、口縁部端面に1条の笵描き直線紋を施している。いずれも内外面に丁寧な笵磨きによって調整している。また、乳突起を持つ小

包含層

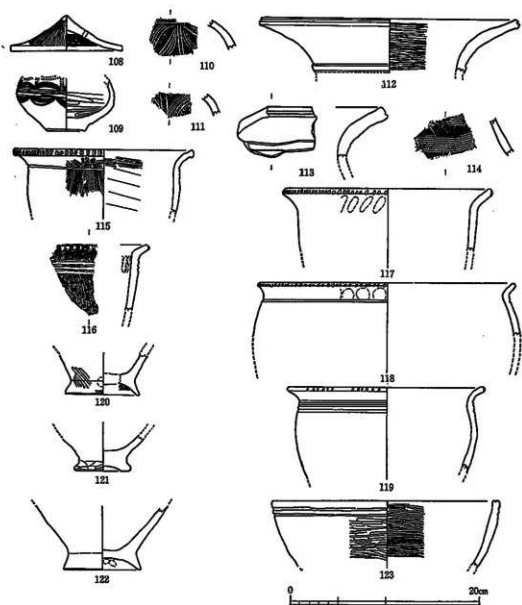
遺構以外の弥生時代前期に属する層中から出土した遺物を紹介する。11区の暗灰色砂混粘土層は、上記のとおり河川1埋没後の砂をベースにした前期(2)基盤層上に堆積する包含層である。有機物を含み、炭粒が混り黒色を呈する。9区の工水管掘乱層中からも遺物は出土した。6区の暗青灰色微砂混粘土層は、中期(1)遺構面の基盤層

片 (258) も存在する。

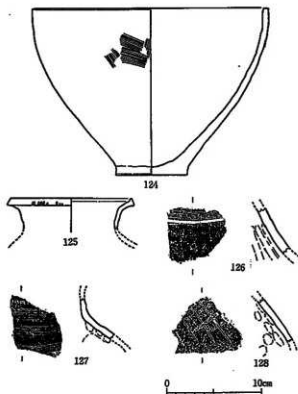
114は、は梯推き直線紋をもつ第Ⅱ様式の壺の破片と考えられる。他の土器が第Ⅰ様式の中でも中葉の特徴を示すことから、本来共伴したものではないと考えられる。

第Ⅰ様式の土器は、破片数で約400点出土したが、生駒西麓産の胎土によってつくられているものとそうでないものが混在する。その比率は、おおよそ5：2を示しており、生駒西麓産のものがかなり多い。大半は小片であり、器形別の比率は不明である。

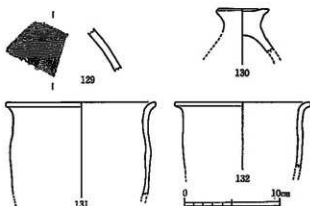
9区の工業用水管による攪乱層の底付近から出土した土器片は約10点ある。前期の層から出土



第94図 11区暗灰色砂混粘土層出土遺物



第95図 9区横乱層出土土器



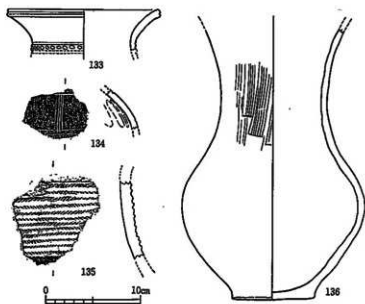
第96図 6区暗青灰色微砂混粘土層出土土器

したというより前期遺構面付近のレベルから出土したものである。124は鉢で、生駒西麓産の胎土をもち、外面に刷毛目がわずかに認められる。口縁部は面をなす。図面上では完形品となった。125~128は、壺の破片である。125は、口縁増部をわずかにつまみ上げるもので端面には不規則に刻み目が見られる。126・127は栉描き直線紋が組み合わされる。128は栉描き波状紋・格子紋がみられる。全体に第Ⅱ様式の土器が多い。

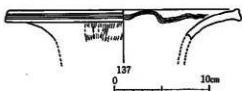
6区の暗青灰色微砂混粘土層は上面を中期(1)遺構面と推定しているが、ここからも4点の土器片が出土した。129は栉描き直線紋+扇形紋、259は栉描き直線紋が認められる壺の破片である。130は甕蓋で笠形を呈するものである。天井部外面はわずかに凹んでいる。131・132は、甕であるが無文である。煤が付着し表面の剝離も著しい。本層も基本的には河川2氾濫堆積層と考えられるが第Ⅱ様式の土器が顕著なので、堆積は中期に入ってからの可能性が高い。

31区青灰色微砂混粘土層は、溝40の上半を覆う流水堆積層である。ここからは壺形土器片が4点出土している。133は、頸部に削り出し突帯をもち刺突列点紋が施され、口縁部には篋描き直線紋をめぐらせる。134は篋描きの直線紋がみられる。135は、太い篋描き直線紋の各条間に梭状に刻み目を施し、一見貼り付け突帯のようにみえるものである。136は、わずかに体部外面に刷毛目が観察される程度の壺であるが口縁部が失われている。2次焼成を受けたことによる色の変化が認められる。

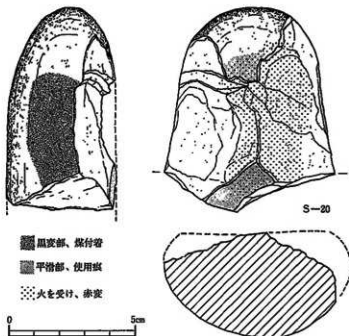
31区の褐灰色粘土層は、上記青灰色微砂混粘土層の直上層であるが、口縁内面に不規則な栉描き



第97図 31区青灰色微砂混粘土層出土土器



第98図 31区褐色粘土層出土土器

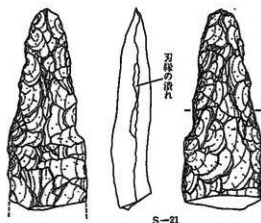


- 屈変部、煤付着
- 平滑部、使用痕
- 火を受け、赤変

第99図 6区暗青緑灰色粘土層出土土器

波状紋を付した壺片 (137) が出土している。口縁端面にも柳描き直線紋がみられる。本層も中期になってからの堆積と考えるべきかも知れない。

包含層中から出土した石器は3点ある。砥石 (S-20) は6区の弥生前期 (2) 基盤層から出土した。釣鐘形を呈するもので一側面に平滑面が認められる。また、煤が付着した黒変部分と熱を受けて赤変する部分が認められ、そのためか破損が激しい。石材は砂岩と思われる。石槍 (S-21) は11区の弥生時代前期 (2) 遺構面上に堆積した暗灰色砂混粘土層から多量の土器と共に出土した。本来の用途が槍かどうかは別にして、形状は粗雑な感じを受け、半損している。主軸が歪んでいるほか調整は粗く、厚みがあってゴロツとした感じである。加えて側縁の一部に約3cmにわたる潰れが認められ、このような状況は、縁を何かに叩きつけたのではないかとと思われる。この時点で槍でも短剣でもない使われ方をしたことが考えられる。(S-22) は



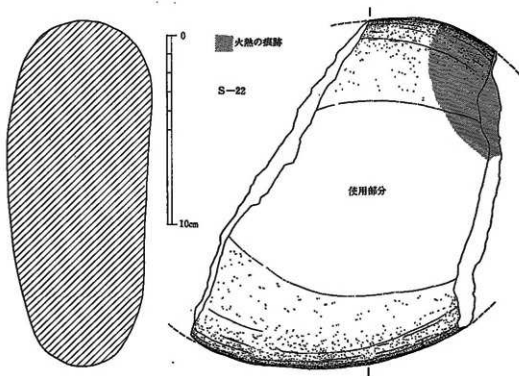
第100図 11区暗灰色砂混粘土層出土石槍

ば堤を伴って検出される。それが河川に沿って掘られたものであることは、河川1の北側で典型的に認められる。さらにその背後には水田が検出されている。このような位置関係と共に堤の頂点、河川埋土上面、水田面の順でレベルが下がるというあり方から、これら溝と堤は水田を河川

仮に台石と名付けておく。9区の弥生時代前期(2)付近の攪乱層から出土したもので石材は砂岩と思われる。2ヶ所破損し、一部に火を受けた痕跡らしいわずかな黒色変化がみられる。使用部分と考えた面は、凹んでいるわけではないが他の表面と比較して手ざわりがややなめらかに感じられる。従って作業台のような用途が考えられるものである。

b. まとめ(第186図参照)

山賀遺跡では、弥生時代前期面において極めて特徴的な遺構がみられる。それは幾重にも並べて掘られた溝群であり、しばし



第101図 9区前期(2)遺構面付近攪乱層出土石器

の氾濫から守るために築かれたものと考えられる。また、6区と7区では河川2の氾濫による層がT.P. 1.8m 付近まで堆積するが、これは5区で検出された堤の頂点と同じレベルであり、加えてそれより以北のAライン調査区では河川2の氾濫堆積層が顕著に認められないという状況などが堤と溝の先のような機能を傍証していよう。堤で水を堰止めると同時に溝で排水し、水田域に河川から氾濫した水が及ぶのを防いだと考えられる。このように、比較的小規模な溝と堤を幾重にも築いた背景には当時の技術や労働力の問題がある。機械力もなく、しかも比較的小人数で堤防や溝をつくる時、大規模なものより小規模なものを複数に分けてつくる方が合理的ではないだろうか。このように考えると溝が何本も掘られ、一見大きな労働力が結集したかにみえるこれら遺構群の背後にも、それほど大きな集団的結集を想定する必要はなくなる。むしろ当時の集団と生産基盤の小規模性・分断性を反映しているものとは言えないであろうか。

さて集団の居住域については、今回調査区の南東部、及び柿沢川改修工事中に多量の遺物が出土した付近が考えられているが、当調査区においても河川1埋没後に居住域が形成されていることが判明している。

- 註(1) 段+竪書き直線紋とは段の下に続けて竪書き直線紋を施したもので、佐原真「山城における弥生文化の成立」『史林』第50巻第5号 史学研究会(1967)において段Ⅰ種と分類されたものに相当する。
- (2) 竪書き直線紋について、1～3条を少条、4条以上を多条とした。(註1文献による)
- (3) 削り出し突帯上面に竪書き直線紋を施したもの。註(1)文献の削り出し突帯Ⅰ類にあたる。
- (4) 山賀遺跡(その4)の報告では「自然河川3」を縄文時代晩期の河川とするが、断面図の観察等からして切り込み面は第1黒色粘土層より上にあり、明らかに弥生時代前期のものだと判断できる。

第3節 弥生時代中期の遺構と遺物

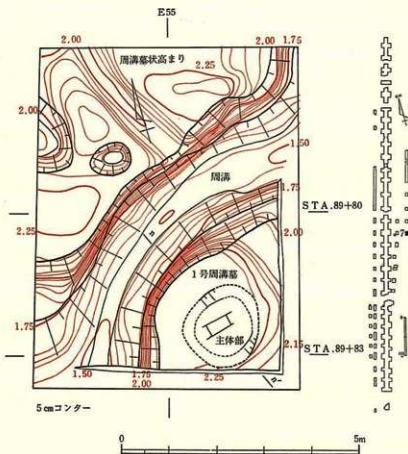
弥生時代中期の遺構面は3面認められた。古い方から(1)、(2)、(3)と呼称する。中期(2)とする遺構面は前回調査で指摘されたもので、今回は1～2区で足跡群を検出したのみである。また、中期(3)遺構面は(その3)調査区の「第Ⅲ～Ⅳ様式面」に相当すると思われる。

a. 中期(1) (付図9)

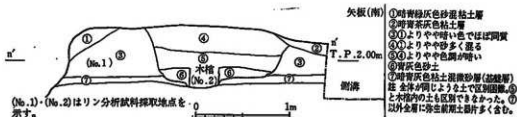
中期(1)にあたる遺構面はAラインのみに認めたものである。顕著な遺構として、7区の周溝墓がある。(その1)調査の中期Ⅰ、(その2)調査の中期Ⅰ面、(その3)調査区のⅢ様式第1～2遺構面、(その4)調査区の中期Ⅰと呼ばれる面と対応関係があると思われる。

1号周溝墓(第102～104図、図版18・19)

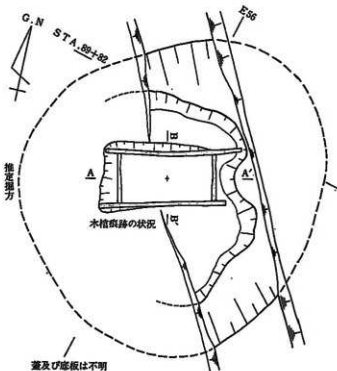
7区で検出した。このトレンチでは、中期(3)～後期(1)の遺構面は流水堆積砂が基盤と



第102図 中期(1) 7区平面図



第103図 第1号周溝基断面図



第104図 第1号周溝基木槽検出状況及び構造

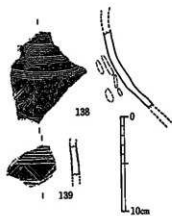
なっており、この砂を除去すると下からしっかりした粘土が現われ、これが周溝基の盛り上がりであった。トレンチ中央を北東から南西に幅約2mの溝がはしっており、これが南東側の周溝基を区切っている。同時に北西側にも溝を共有する形で粘土の盛り上がりが見られた。これについては精査したにもかかわらず主体部などが検出できなかった。従って盛り上がりの状況やその盛り上がり形成する土(盛土の可能性高い)の様子から周溝基の可能性は高いものここでは断定を控えておきたい。周溝基は築造後一気に流水堆積砂によって埋没したようで、1号周溝基の境丘斜面などは垂直を呈している部分があった。周溝基上面は、中期(3)面の溝・土坑等の遺構の掘り込みが達しており凹凸が激しい。

1号周溝基は、円形か方形かの判断ができない。現状では円形周溝基のようでもあ

り、規模も調査区内からの判断では明らかにできない。盛土の高さは少なくとも1m以上はあった。盛土は、暗青緑灰色砂混粘土層を主体とするが、盛り上げの過程は明確にならず、掘り方の様子も図に示しているものの非常に盛土との区別が付きにくかった。実際、この遺構を検出した時、周溝墓である可能性を考え、中央にほぼ南北の試掘観察トレンチを入れた。その時点では断面に主体部掘り方がかかっていたはずなのに認めることができなかった。主体部はトレンチのすぐ西に存在していた土層観察用アゼを残して周囲を掘削したところ主体部が検出されるという状態であった。従って掘り方は土層観察用アゼ内のみで追求せざるを得なくなった。主体部掘り方は、墳丘上面から径約1.6mの円形坑が掘られていると復原した。底付近は特に深くなり、2段に掘られたようである。

主体部は、組み合せ木棺である。内法で長辺0.5m、短辺0.25mと非常に小さい。蓋板及び底板については精査したにもかかわらず検出できなかった。底板はなかったのかも知れない。長側板は北側、南側共に0.7×0.18mの長方形の薄板を使用し、短側板（小口板）は、西側、東側共に幅0.25m、高さ0.35mの薄板を使用しており、土中に打ち込み易いように矢形にカットしていた可能性がある。この点について木材の残りが非常に悪く、ほとんど土と同化していたため断定はできない。小口板を土中に打ち込んだ後に長側板を立てて組み合せ木棺としている。木棺内の埋土は、掘り方の埋土と区別できなかった。また、木棺内は慎重に掘削し、排土は持ち帰って洗い出しを行なったが、人骨・歯・遺物は検出できなかった。ただ、例バリオ・サーグェイによる周溝墓盛土と木棺内埋土の比較リン分析によれば、木棺内の方が値が高く、人体埋葬を想定させる。また墳丘と主体部の位置関係からみれば主体部が北寄りであるため、複数の埋葬主体が想定されなくもない。

周溝墓の盛土からは約200片以上の土器片が採集されたが、ほとんど第Ⅰ様式に属するものである。弥生時代前期の堆積層を削って盛り上げたのであろう。周溝墓の直下は、弥生時代前期河川の氾濫堆積層である。



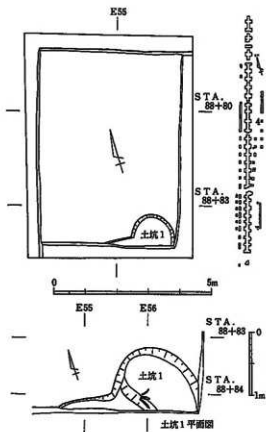
第105図 7区1号周溝墓盛土出土土器

一遺物（第105図、図版43）

約200片以上の土器のうち、ほとんどが第Ⅰ様式に属する壺・甕片であると思われるが、実測に耐えないものが多い。そのうち、138は第Ⅰ様式の壺で横描き直線紋が認められ、一部に流水紋としてみせようとする扇形紋が加えられている。139は、甕の破片と思われ、横描き直線紋と平行斜線紋を組み合わせる例である。

土坑1（第106図）

4区の南側矢板に接して約半分を検出した。径約1.5mの円形で西側へ突出部が存在する。深さは0.6mを測り、埋土は黒灰色あるいは灰色の粘土混砂層である。ただ、埋土の中



第106図 中期(1) 4区平面図

植物遺体層が3層にわたって認められ、木の杭が3本打ち込まれている。他に遺物をみなかったこともあって性格は不明である。

溝1 (第76図)

25区で検出されたものであるが、前期(2)溝36の埋没後の凹みを水田の用排水路として利用していたものと思われる。今回の調査自体ではそれらの証拠に乏しいが、(その4)調査区の報告をもとに推定した。

溝2 (第108図)

5-4区で検出したものである。上幅約3m、深さ約1mを測る。埋土は砂であったが擾乱をまねがれた調査区のごく一部で検出したので詳細は不明である。

畦1 (第107図)

1区の中央やや南より東西方向に検出した。下幅約2m、上幅約0.9m、高さは0.1~0.15mを測る。両側には人間のものと思われる足跡群が検出された。

畦2 (第107図)

3区の中央付近に東西方向に検出した。西側で幅が広くなり、かつ歪んでいる。最大下幅約2.5m、最小下幅1.2mを測る。上幅は下幅に影響されて変化し、一部南へ突出する部分がある。高さは、0.1~0.15mを測る。畦の北側で人間のものと思われる足跡が検出されている。

畦3 (第107図、図版20)

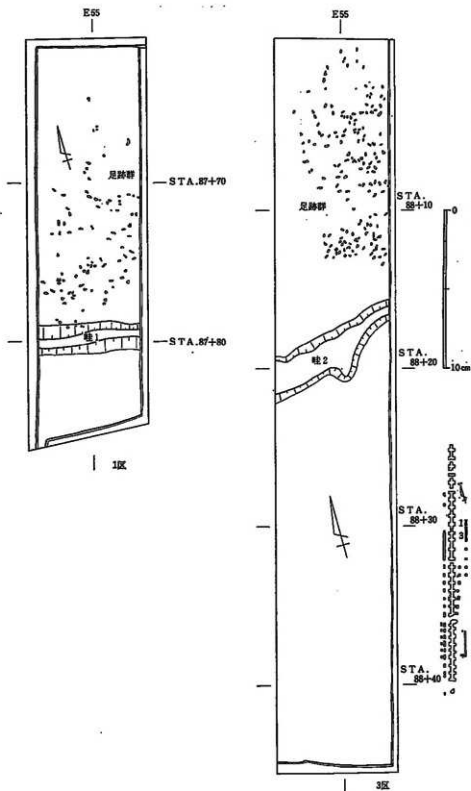
5-2区で南北方向に延長約3m検出した。下幅0.3~0.5mのもので高さは約0.1mである。

包含層

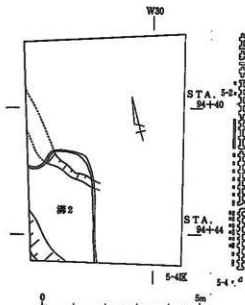
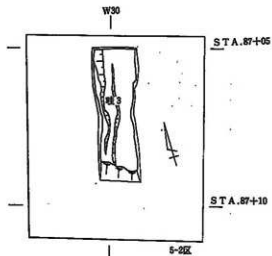
先の周溝基の項でも述べたように、1号周溝基の北側にも断定はできないが周溝基状の盛り上がりが存在する。この中の灰褐色砂混粘土層中からかなりの遺物が出土したので一部を報告する。また、1~3区の中期(1)を覆う暗灰色粘土層中からも木器が出土している。

一遺物一 (第109~111図、図版44・45・54・56・57・58)

土器片は約300片が出土しているものの大半が小片であり、器形などはわからないものが多い。そのうち、140は横描き直線紋を施す壺の破片である。第I様式に属するものとしては、篋描き沈線紋+重弧紋の141、篋描き直線紋+斜格子紋の認められる142などの壺形土器片がある。また、143は完形の壺蓋である。中央に2個の突起をつくり出している。孔は2個づつ中央に対



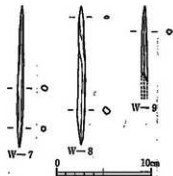
第107図 中期(1) 1・3区平面図



第108図 中期(1) 5-2区・5-4区平面図

がこの内彎する部分であるとしたら、対象物はどのようなものであったのか興味深い。前後に動かすにしても平行に移動させたにしても対象部は平坦なものではありえず、凸部であることが要求されるので骨角器などが考えられよう。石器も土器と同様前期のものが混じっている可能性は高い。

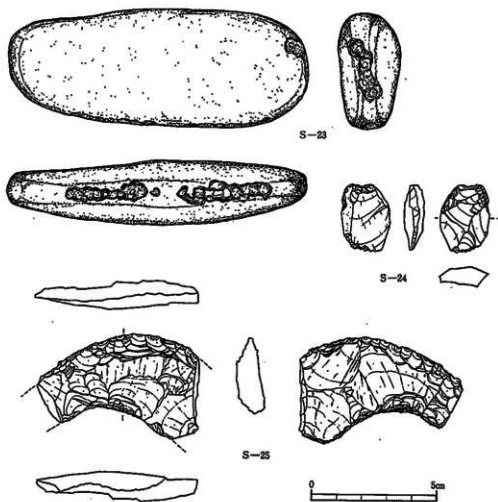
木器は、1～3区において中期(1)を覆う暗灰色粘土層中から3点出土している。いずれもヤス状木製品である。W-7は長さ15cm、最大径6mmを測る。西端を尖らせるように全体を削り加工している。W-8は長さ14.5cm、最大径9mmを測る。両端を尖らせるが加工は粗く全体に太いものに仕上がっている。W-6は、他と同様のものではあるが半分以上を欠損している。



第109図 1～3区69層(暗灰色粘土層)出土ヤス状木製品

して対象位置に穿たれている。厚手のつくりで指頭痕が全体に認められる。また、底部に痕の認められる土器片(263)もみられる。

石器は、敲石(S-23)、削器(S-24)、石小刃(S-25)の3点がある。敲石は、一方の長側辺・短側辺に痕がみられる。石材は砂岩と思われる。削器は赤褐色を呈するチャート製の小削片を利用している。調整と思われる剝離に規則性はなく部分的に施されているが、人為的なものと考えて石器とした。(S-25)は、石小刃と呼ばれる石器と思われる。両面に数枚の先行剝離を残して周囲は念入りに調整されている。ただ内彎部分の状況は縁が潰れてしまっており、施されていたであろう調整も失われてしまったようだ。この石器の機能部



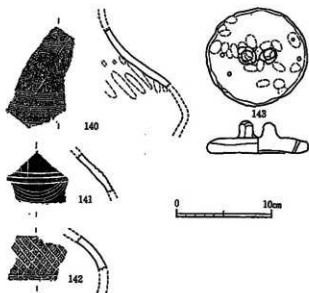
第110図 7区中期(1) 灰褐色砂混粘土層出土石器類

b. 中期(2) (付図10)

中期(2)にあたる遺構面は、Aラインの1～3区のみで認めた。ただし検出した遺構は足跡群のみである。(その2)調査区では水田などが報告されているが今回の1～3区の足跡群は即水田と断定することはできなかった。畦などは精査したにもかかわらず検出できなかった。

足跡群 (第112～114図)

1区で顕著であったが、2区ではまばらである。足跡はほとんど人間のものと思われる。規則性はなく全面にフットランダムに認められる。部分的に空白部分が存在することがある。歩行の状況を迫る例も若干ながら認められ、第112図に示したものがその代表的な例である。粘土内にかかり足がめり込み、直後に流水堆積砂層で覆われたらしくあまり崩れることなく砂で埋っている。3区では足跡がみられなかった。



第111図 7区灰褐色砂混粘土層出土土器

146は外反する口縁を持ち、端部に沈線をめぐらせる変形土器である。147はやや大型の甕であるが、くの字形に屈曲する口縁部をもち、端部を上方につまみ上げている。内面には刷毛目が認められる。

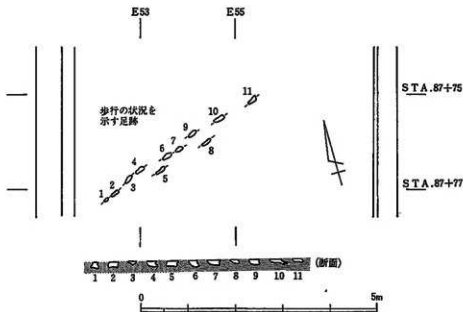
7区の中期(1)遺構面(周溝墓)を覆う白色粗砂層からは、土器・土製品・石器が出土して

包含層

中期(2)に対応するというわけではないが、中期(1)~(2)を覆い、中期(3)遺構面の基盤層である流水堆積中からいくつかの遺物が出土しているので報告しておく。

—遺物—(第115~118図、図版42・44・45・47)

6区の明青灰色細粒砂層からは30数個の土器片が出土している。甕形土器のうち、口縁部に糜状紋を施し、垂下する端部に刻み目を有する144や、ゆるやかに外反して口縁端部に甘い凹線を施す145などがみら



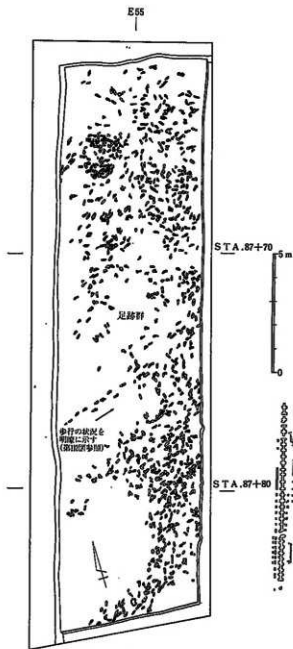
第112図 中期(2)1区(部分)足跡平面図及び断面図

いる。

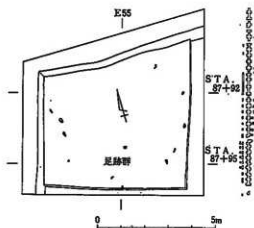
土器は、約300片が出土しているがほとんどが小片であり、実測に耐えない。148～151は壺形土器の破片であるが、口縁端部は無文で少し下へ垂下させるもの(148)、逆に上へ少しつまみ上げ、端面に栴描き波状紋を施す149がみられる。150は、栴描き直線紋、151は栴描き直線紋と列点文の組み合わせがみられる。152は、土器片を打ち欠いて作った土製円板である。

石器は、削器(S-26)、石鏃(S-27)、剃片(S-28)、敲石(S-29)のほか数点の剃片も出土している。削器は自然面打面を持つ剃片を利用して、下縁部の一部に調整を加えている。石鏃は凹基無茎式で調整も丁寧かつ形状も整っている。一方の面には比較的大きな先行剝離痕を残している。剃片は、小さなやや横長の剃片である調整打面を持ち明らかに目的剃片と思われる。このような剃片から石鏃などが得られるのではないだろうか。敲石は一側辺にややふくらみを持つ棒状のもので一方の端に潰痕が認められる。石材は砂岩と思われる。石器の所属時期は弥生時代中期のほか、前期の層も割平されて混入している可能性は高い。

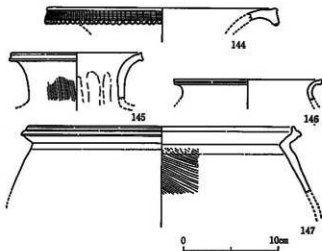
31区の灰色中粒砂層からは、鋤蓋が出土した。底部は欠損しているが、推定器高8cm、口径6cmを測る。指頭による調整が認められる。



第113図 中期(2)1区平面図



第114図 中期(2)区平面図



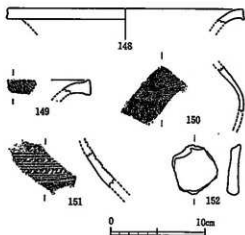
第115図 6区明青灰色細粒砂層出土土器

c. 中期(3) (付図10)

中期(3)はSTA.88+40付近以南において中期(1)~(2)を厚く覆う流水堆積層上面を一括する。従ってSTA.88+40付近以北では、中期(2)と(3)が同一基盤層をもつということがありうる。出土した遺物から中期後半にあたる。

溝1 (第119図)

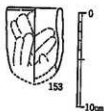
5区で検出したものであるが不定形な落ち込み状を呈している。トレンチ中央部付近で北に向かって2本に分れるが、東側のものを溝2と称しておく。溝1は南の方が深くなる。上幅約2.7m、下幅約1.5m、深さ0.3mを測るが分枝付近の浅い部分では0.05mにすぎない。遺土はベース面よりやや粘性が強い程度のもので、暗青灰色粘土混りの微砂層であった。遺物は、土器片が数片出土したにすぎない。



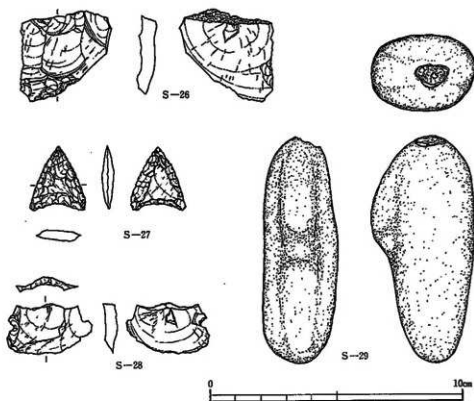
第116図 7区白色粗砂層出土土器・土製品

溝2 (第119図)

溝1から分流するもので、上幅1.2m、下幅0.6m、深さは、深いところで0.25m、浅いところで0.1mを測る。垣土は溝1と同様であった。溝1と共に性格は明らかではない。



第117図 31区灰色中粒砂層出土土器



第118図 7区白色粗砂層出土石器類

溝3 (第119図、図版21)

7区で検出した。やや西にふれて南北方向にはしる直線的な溝である。上幅約1.2m、下幅0.3m、深さ約0.5mで西へわずかに深くなっている。埋土は、黒灰色あるいは暗灰色の粘土混りの砂層であって順次自然埋没した様子である。遺物は約20片の土器小片が出土した。

溝4 (第119図、図版21)

溝3の約2m西側を並行にはしる溝である。上幅0.6~0.7m、下幅0.15m、深さ0.3mを測る。埋土は黒灰色粘土混りの砂層である。埋土は1層しかみられなかった。遺物は出土しなかった。

溝5 (第120図)

5-5区で検出した溝で、ほぼ南北に走る。上幅2m、下幅0.3~0.7m、深さ約0.4mを測る。内部には灰色の砂がつまっている。この溝は(その2)調査区「中期Ⅱ遺構面の溝1」と連続するものである。遺物は出土していない。

土坑1 (第119図、図版21)

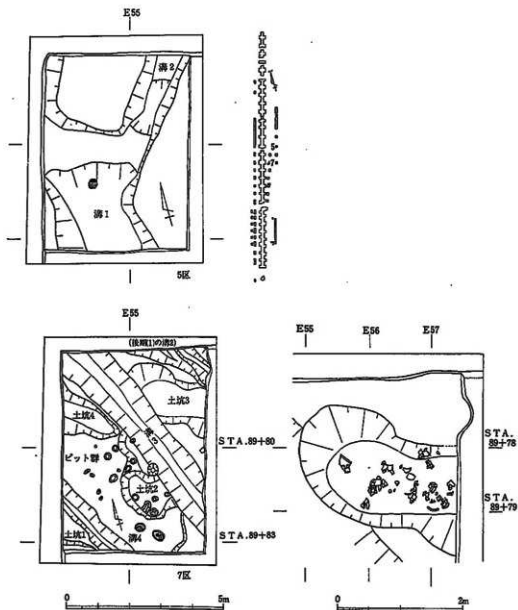
7区の南西角に検出した掘り込みであるが、規模・形状は不明である。遺物は出土しなかった。

土坑2 (第119図、図版21)

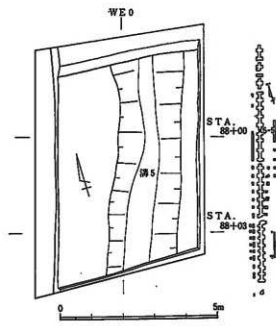
溝3に切られてトレンチ中央付近に検出した。内外に Pit が埋没重複して存在する。長径2 m 足らずの不定形なもので、深さは0.2mを測る。埋土はよくしまっており暗茶灰色の砂あるいは暗青灰色の砂である。中央付近には植物遺体が混在していた。

一遺物一 (第121図)

約60片の土器が出土したが、いずれも小片で実測に耐えない。154は、よく開く口縁部をわず



第119図 中期(3) 5・7区平面図



第120図 中期(3)5-5区平面図

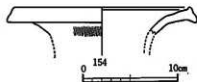
また土器片を打ち欠いて作った土製円板(166)が1個存在する。甕は、やや大きいものを一個体(160)含んでいる。口縁部はいずれも「く」の字形に屈曲させるものであるが、端部をわずかにつまみ上げるもの(157・158・160)、単に面をなしておさめるもの(159)がある。外面はいずれも刷毛調整を施すが、157は粗い。口縁部内面に刷毛目が認められる159、胴部内面に刷毛目の認められる158、撫でのみのもの(159、160)など様々である。底部では、外へよくみんばる163が特徴的である。高坏(155)は全面に寛磨きを施し、口縁部内面に凸帯をもち、欠損してはいるが水平にのびて垂下させる器形と思われる。156は、胎土に砂を多量に含み、暗灰色を呈するのが特徴であるが、脚部・口縁部共に欠損している。環部のカーブから155とは異なる器形の高坏と思われる。

土坑3 (第119図、図版21)

7区中央やや西寄りで見出した土坑で、長さ2m以上の不定形なものである。深さは場所によって変化があり、最も深い部分で約0.5mを測る。埋土は暗茶灰色の粘土混砂層であった。

一遺物一 (第123・124図、図版47・56)

約20片の土器小片が出土したが、底付近(中期(1)の両溝基状盛り上りに達する)でやや大



第121図 7区中期(3)土坑2出土土器

かずつ上下に拡張している。頸部外面には刷毛目がみられる。

土坑3 (第119図、図版21)

溝3に切られて存在する長円形の土坑である。長さ3m以上、短径約1.5m、深さ0.5mを測る。埋土は上から暗茶灰色砂層、青灰色砂層、炭粒が混る黒色の粘土混りの砂層に分けられる。下層の炭の混る部分から多量の土器が出土した。ただしこれだけでは土坑の性格を明らかにできない。

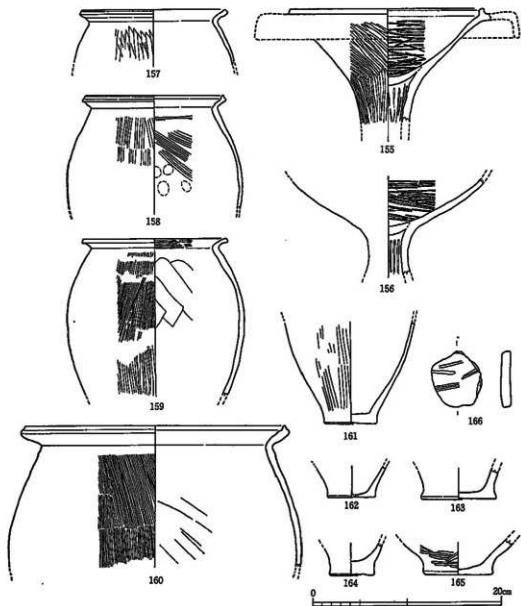
一遺物一 (第122図、図版46・47)

土器片は約100片に及ぶが、うち8割は接合した。その結果底部片も含めると甕が9乃至10個体、高坏が2個体認められる。壺は165がその可能性があるのみである。

きな破片を検出しており、図示する。167は掃描き紋で飾られた壺である。口縁部には端面に掃描き波状紋、上面に扇形紋を施している。168はやや大型の甕の口縁部である。口縁部はつまみ上げられ端部に握凹線が生じている。169も大型の甕と思われる下半部である。外面は

粗い刷毛と底部付近を笊削りで調整し、内面も丁寧な刷毛調整が施されている。

石器（S-31）は1点出土したが名付けようがない。槍先未製品か削器のような機能も考えられるが、図右面にみられる古い剝離痕をみるともとは石槌であった可能性もある。左面右側縁にみられる剝離痕はどちらかと言えば潰れであって、最終的にはそういう使われ方をしたのかも知れない。B-B'付近の内彎も潰れによって生じており、（S-21）の「石槍」にみられた刃潰れによく似ている。



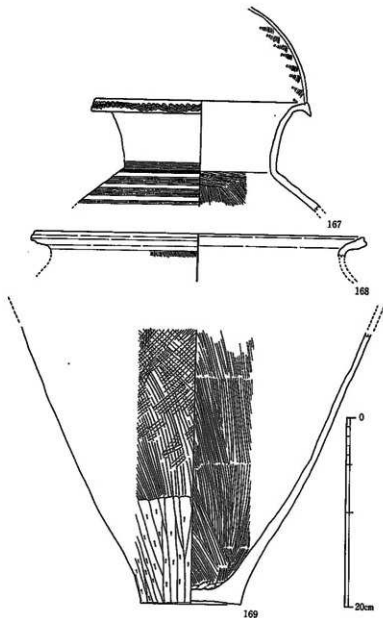
第122図 7区中層(3)土坑3出土石器

Pit 群 (第119図、図版21)

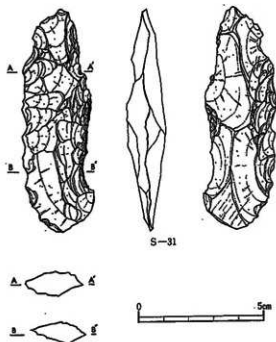
7区では約20個の Pit が検出された。小さなものともかく、径20~30cm、深さ約20cmに及ぶものがあって柱穴の可能性もある。柱痕と思われる Pit も存在しているが現状では建物を構成しない。Pit は他の遺構を切るものと逆に切られるものが混在している。いくつかの Pit から少量の土器片が出土している。

道状遺構 (第126図、図版22)

1区で検出された。基盤層は砂層でこれが凹凸を呈している他、明らかに帯状に盛り上げた部

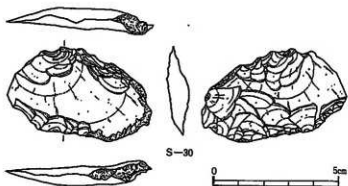


第123図 7区中期(3)土坑4出土土器



第124図 7区中期(3)土坑4出土石器

主に腹面にみられる調整の剥離度は不規則に観察される。



第125図 1区中期(3)道状遺構上面出土石器

木器は、ヤス状木製品がある(W-10)。長さ約19cm、径9mmのもので少し曲っている。全体を削り成形しており、両端は尖っている。

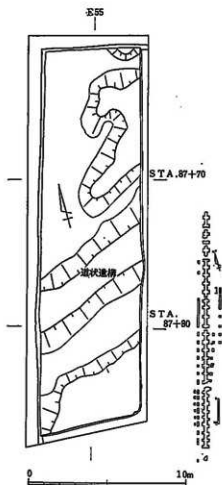
包含層

この中期(3)面は弥生後期(1)面と同一面であるため、その上に堆積する黒色の砂混り粘土層には後期の土器も混在する。7区ではこの包含層から約150片の土器小片と石器が出土している。

分が存在しており、これを道状遺構とした。下幅約4m、上幅約2m、高さ約0.4mを測る。盛り土は基盤層と同様の砂であり、粘土のブロックも混在していた。周囲に存在する凹凸などは(その1)調査区で報告されている「尾根状遺構」のようなものかも知れない。道状遺構の上面から、遺物が出土している。

—遺物—(第125・127図、図版54・55)

石器S-30は道状遺構の上面から出土した石器である。打面は自然面であったかと推定されるが背腹両面に剥離後の成形調整が加えられ除去されている。刃部は下縁部で作出されるがあまり丁寧な調整とは言い難く、



第126図 中期(3) 1区平面図

と思われる。

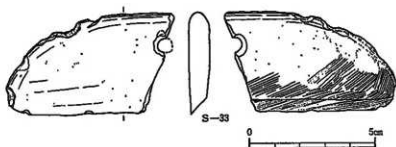


第127図 1区道状遺構出土ヤス状木製品

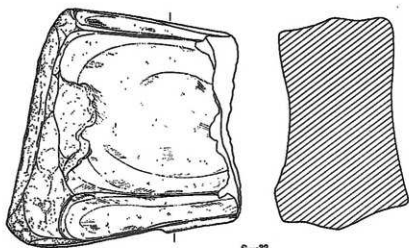
一遺物一(第128・129図、図版55・59)

31区黒褐色砂泥粘土層からは、緑泥片岩製の石庵丁(S-33)が出土した。半損しているうえ、周囲にキズが多く、かなり動かされてきたものらしい。背は丸く、片刃で、孔は両面から穿っている。刃が作られている面に擦痕が観察される。

中期(3)遺構面直上にまさに置かれていたような状態で砥石(S-32)が出土した。本体の半分を欠失するほか表面の一部が剝離しているが小口部分を除いて全平坦面を使用している。平面は基本的に4面であるが稜が形成されているため細かくは7面に分かれている。石材は軟質で黄白色を呈し、砂岩

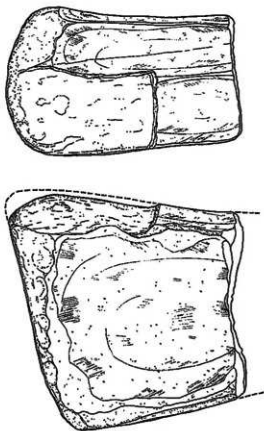


第128図 31区黒褐色砂泥粘土層出土石庵丁



金車削面を借用している

S-32



第129図 7区中期(3) 遺構面直上出土磁石

d. まとめ

弥生時代中期になると、前期まで続いてきた大小の河川がほとんど埋没し、それに伴って掘られた多くの溝も機能を停止した。そしてそれらの名残である凹凸が残るだけとなった。中期前半に遺跡中央部は一転墓域となり、10基余りの方形周溝墓・木棺墓が検出されている。その周囲には水田が営まれていた様子である。その後遺跡の南半は広く流路が通り、流水砂層に覆われる。この砂層上の微高地は中期中葉以降居住域となったようであるが、北半では変わらず水田が営まれている。

山賀遺跡の弥生時代中期で注目すべき点は、中期前半の周溝墓の実態が明らかになったことであろう。これらの周溝墓に葬られた人々は、前期において当地の開発に着手した集団のうちであろうがそれら共同体の具体相を考察するひとつの手がかりになると思われる。現在のところ山賀遺跡の周溝墓は、死者の年令にかかわらず一基に一埋葬が貫徹されているようであり、通常認められる河内平野における弥生時代中期周溝墓の複数埋葬例とのちがいが興味深い。

第4節 弥生時代後期の遺構と遺物

後期は遺構面を5面認めた。下面から(1)~(5)とする。もっとも調査区によって遺構が検出されない場合もあり、すべての調査区にわたって(1)~(5)まで確認しているわけではない。また、調査区間での対応も必ずしも明確ではないが、遺構の配置、土層の状況、レベルなどから対応関係を考えて。

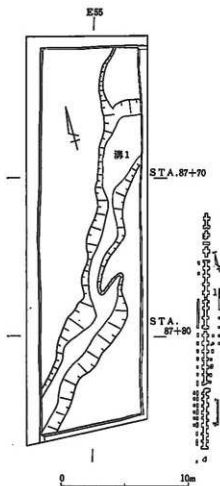
a. 後期(1)(付図11)

1・7・22・30区で溝を検出した。

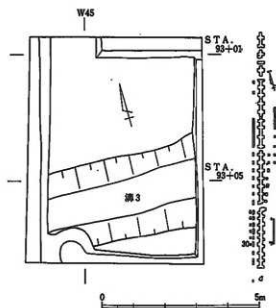
溝1(第130図)

1区で検出した南西から北東へ向かう溝である。平面形はかなりいびつで、幅が場所によって大きく異なり、上幅で約1.2~3mを測る。断面も不定形で、深さは0.2m前後と浅い。底面のレ

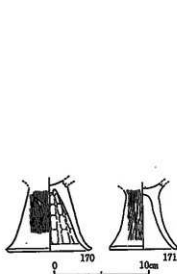
ベルは、南西端でおよそT.P.1m、北東端でT.P.0.9mで、北東に向かって緩やかに傾斜する。粘土によって埋まる。この溝は、自然堤防など河川によって形成された微高地にはさまれた低地に位置し、その低地の中でも高い方から低い方に向かってはしている。そのような在り方やいびつな平面形、さらにその低地が水田等に利用された形跡がないことなどから自然の溝である可能性が高い。



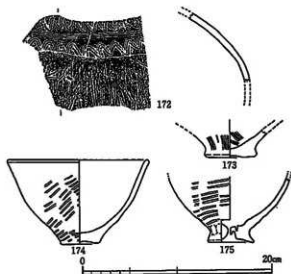
第130図 後期(1) 1区平面図



第131図 後期(1) 30区平面図



第132図 1区後期(1)溝1出土土器



第133図 7区後期(1)溝2出土土器

—遺物— (第132・133図・図版48)

溝の底にはほぼ密着して高環の脚部が出土した(170)。脚台部が大きく開き、裾で若干外反して脚端部を形成する。脚柱部外面は細かく丁寧な筥磨きを施す。脚台部は横撫でにより調整している。腐り礫を少量含み、角閃石は認められない。

171は、溝1から出土したものではないが、溝の強土と連続する暗緑灰色粘土層Ⅱから出土したので一稿に報告する。170同様脚柱部が大きく開き高環の脚台部との境は明瞭でない。脚柱部外面はやはり細かな筥磨きを施し、内面は下ろまで横撫で調整している。脚台部は横撫で調整し、端部は170と異なり丸くおさまられる。腐り礫を多く含む。170と共に穿孔は認められない。いずれも後期中頃のものと考えられる。

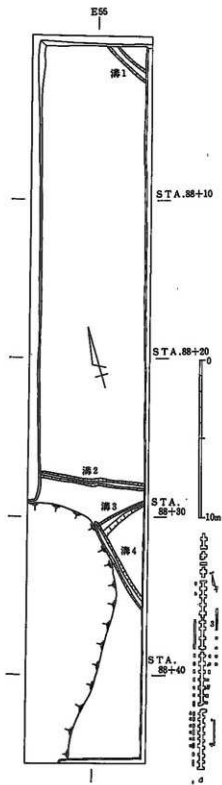
溝2 (第119図、図版21)

7区北東端で検出された。概ね南から北に向かってはしる。幅約1.5m、深さ約0.5mの断面V字形溝である。底約15cmは砂が堆積するが、それより上は粘土混りの砂で埋まっている。弥生時代中期後半の遺構と同一面で認めたが、その時期の遺構を明らかに切っている。遺物も第Ⅶ様式の土器がまとまって出土しており、本来はより上位の面から切り込んだものである可能性が高いが、断面観察においても確認は出来なかった。

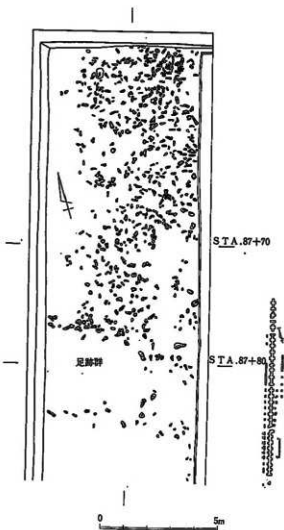
—遺物— (第133図、図版48)

弥生土器の壺(172・173)、鉢(174・175)の他細片が10数片出土した。

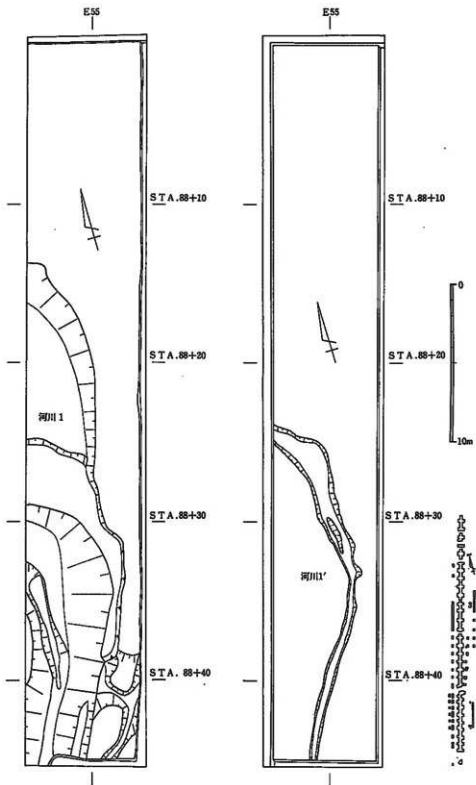
172は、肩部に横摺きの波状紋と直線紋(いずれも4条で1単位)が施されている。断続的であり、回転台を使用していないことが解る。また、同一個体と思われる破片が他に数片あり、それらから図示したより上に直線紋がさらに一単位加わり、頸胴部界屈曲部に突帯が貼り付けられていた状態が復元できる。外面は撫での後、横摺き紋を断し、その後文様帯より下を縦方向に筥



第134图 後期(2) 3区平面图



第135图 後期(2) 1区平面图



第136図 後期(3)3区平面図

磨き調整している。内面は撫で調整を施す。胎土は礫を少量含むが比較的精良である。角閃石は見られない。

173は、壺の底部で、外面を縦方向の刷毛調整、内面を撫で調整した後粗く刷毛調整している。角閃石は含まない。

174は鉢で形態は甕下半部と基本的に共通するが、口縁部が若干外反する。底部は若干上げ底になり、外面には指押さえが残る。体部外面は全体に敲き目が認められ、内面は撫で調整している。底部には穿孔が見られる。焼成後に雉を使って両側からあけたもので、一度は両側の位置がうまく合わず、あけなおされている。胎土は生駒西麓産である。以上いずれも後期に位置付けられる。

溝3 (第131図、図版23)

22・30区で検出した。西から東に向かってはしる。幅は約2.5mで、底から肩にかけてゆるく内傾し、深さは約0.6mを測る。底のレベルは、22区でおよそT.P.2.1m、30区の東端でT.P.2.6m、西端でT.P.2.7mと、西からやや傾斜する。東に隣接する(その4)調査区では同期の水田が検出されており、それへの灌漑用水路と考えられる。ちなみに、水田面のレベルはT.P.2.4~2.6mと22区の溝の底面より高いが、溝の深さが0.6mあることを考慮すれば、溝3からその水田に水を供給することは可能である。溝の堆積層には砂も認められ、水が流れていたことを裏付けている。

b. 後期(2)

1区で人間の足跡群を検出した。北部で密集し、南へ行くにつれまばらになる。粘土が基盤になるが、水田は確認できなかった。レベルは北から南に低くなっており、低湿地性の植物を採集したり、あるいは浅い沼に棲む魚などをとったりした痕跡とも考えられる。

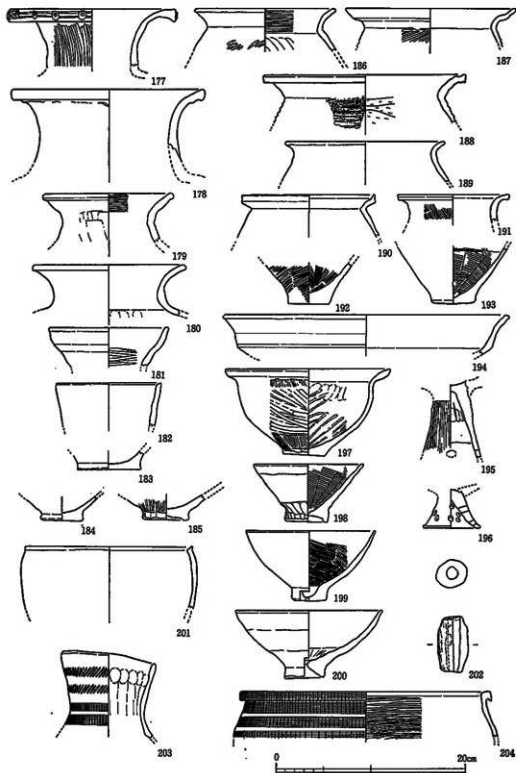
溝1~4 (第134図)

3区では溝を4本検出した。方向はそれぞれ異なるが、いずれも幅約0.5m前後、深さ0.05~0.20m位の細く浅い溝がある。溝2は西から東に、溝4は北から南に向かって低くなるが、他は底の傾斜が明確でない。粘土により埋まっている。掘られた目的は明らかではない。

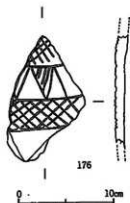
他の調査区では対応面は確認できなかった。

c. 後期(3) (付図12)

Aラインで河川とそれに伴う堤、その他ピット群、カニ穴群、粘土の落ち込み、31区では溝と落ち込み、足跡群を検出した。検出面は1~3区を除き灰黒色砂混粘土層の上面である。しかし、その面は場所によって時期を異にする可能性があり、遺物を伴わなかったAラインのピット群、カニ穴群、粘土の落ち込み、また31区の溝と落ち込み、足跡群などの時期については確定的でない。また堤は、灰黒色砂混粘土の直上に築かれたのではなく、間に河川の氾濫によると考えられる薄い砂層をはさむが、河川形成後間もなく当該河川に沿って築かれたと考えられる為、後期(3)として扱う。



第137图 3区後期(3)~(4)河川1出土土器、土製品



第138図 3区後期(3)~
(4) 河川1出土手焙形
土器

河川1 (第136図、図版24・25)

3~5区で検出された。蛇行しながら南北方向に流れる。東崩しか出ていないため、幅は明確でないが、3区では西壁の立ちあがりの下部が認められ、それから復原すると10m弱と推定される。深さは約2mある。底のレベルは3区でおよそT.P.0.2mを測る。4、5区では底を検出してないが、全体の地形から北流すると考えられる。砂礫で埋まり、礫は2.5cm位までのものを含む。比較的速い流れが想定される。

一遺物一 (第137~139図、図版47~49)

凡そコンテナ一杯分の遺物が出土した。その殆どは弥生土器で、他はわずかに土製品が見られる。弥生土器は後期に属するもの

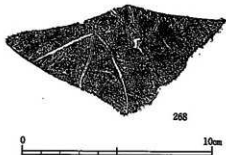
他、前・中期のものが混入していた。

後期の土器では、壺・甕・高杯・鉢・手焙形土器が出土している。

壺は広口壺(177~181)と長頸壺(182)がある。さらに広口壺は、直立する頸部から外反する口縁部の端を若干弧張し、端面に沈線と円形浮紋を施すもの(177)、それと同様の形態を示すが無文のもの(178)、肩の張らない体部から外屈する口縁部をもつもの(179)、大きく眼らむ体部から口縁部が外反しつつ立ちあがるもの(180)、受口の口縁部をもつもの(181)が認められる。177、178は頸部外面を縦方向に笄磨きし、179は体部外面に板撫でを施している。178は外面の調整不明。また、179は生駒西麓産の胎土を用いている。183~185は壺の底部である。185は外面を刷毛調整し、煤の付着が明瞭に認められる。

甕は体部外面に叩き目を持つもの(186~188・192)と持たないもの(189~191・193)がある。叩き目を持つものには、外反する口縁部の内面に刷毛調整を施すもの(186)、口縁部を受け口状につくるもの(187)、外反する口縁部の端に明瞭な外向面をつけるもの(188)などが認められる。186は、体部内面に板撫で、188は笄削りを施す。186は生駒西麓産の胎土を用いる。叩き目を持たないものでは、口縁部が体部から短かく外屈するもの(189)、口縁部が上に立ちあがるもの(190)、短かく外反する口縁部を持つもの(191)などが見られる。体部外面は190が撫で、191が刷毛により調整されている。191は壺の可能性があり、193は外面調整不明で鉢とも考えられる。

高杯は、杯底部から外反気味に外傾して立ちあがる口縁部を持つものである。195は高杯の脚柱部である。外面を縦方向の丁寧な笄磨きで調整し、四方に穿孔する。196はミニチュアの高杯の



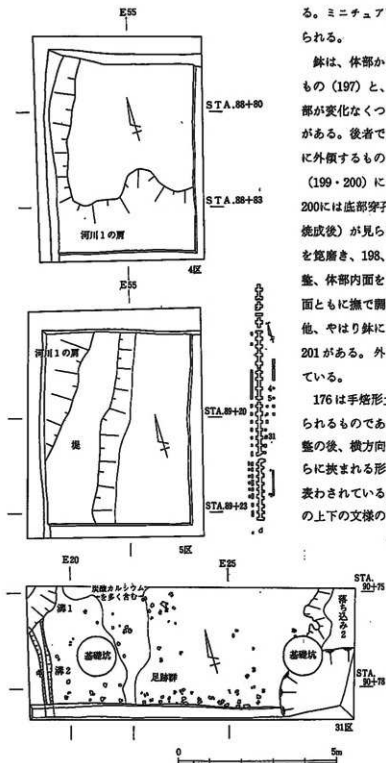
第139図 3区後期(3)~(4) 河川1出土土器

脚柱部で不規則に多くの穴をあけている。ミニチュア高杯にはやや底減が認められる。

鉢は、体部から外屈する口縁部をもつもの(197)と、外傾する体部から口縁部が変化なくつづくもの(198~200)とがある。後者では、さらに体部が直線的に外傾するもの(198)と内彎するもの(199・200)にわかれる。また、199・200には底部穿孔(199は焼成前、200は焼成後)が見られる。197は体部内外面を笕磨き、198、199は体部外面を撫で調整、体部内面を刷毛調整し、200は内外面ともに撫で調整を施している。その他、やはり鉢になると思われるものに201がある。外面には笕磨き調整を施している。

176は手焙形土器の覆部の破片と考えられるものである⁽¹⁾。外面には、撫で調整の後、横方向の斜格子紋帯2条とそれらに挟まれる形で鋸齒紋帯が細い線刻で表わされている。但し、破片のため、その上下の文様の有無などは解らない。施

文順序は横線を引いた後斜格子あるいは鋸齒を描く。また、斜格子は右斜め上方向の線を先に引いている。これら文様帯は右端でくずれを見せ、いずれも右斜め上方向の線が欠落する。内面は丁寧に横方向の笕磨きが施さ



第140図 後期(3)4・5・31区平面図

れている。胎土は細砂をやや多く、黒雲母・腐り礫を少量含む。焼成は良好で、表面の色調は灰黄褐色を呈す。

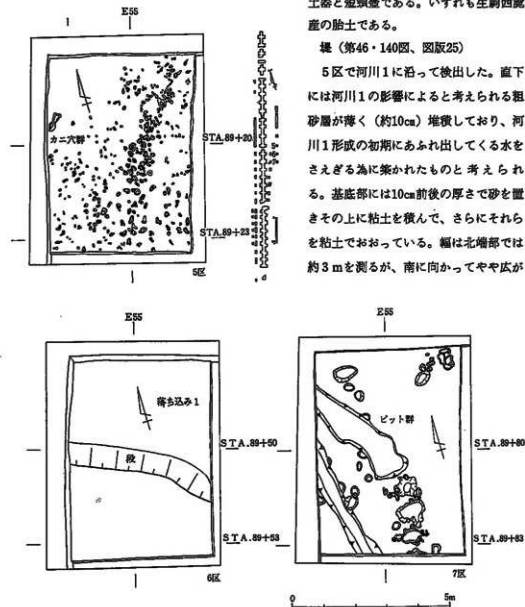
土製品としては、土甕(202)が出土している。棒状のものに粘土を巻いてつくられている。礫をやや多く含む。角閃石は見られない。

その他、記号文をもつ壺体部片(268)が出土している。胴部最大径付近の破片で、外面には煤が付着している。胎土は生駒西麓産のものである。

203・204は混入していた中期の水差形土器と短頸壺である。いずれも生駒西麓産の胎土である。

堀(第46・140図、図版25)

5区で河川1に沿って検出した。直下には河川1の影響によると考えられる粗砂層が薄く(約10cm)堆積しており、河川1形成の初期にあふれ出してくる水をさえぎる為に築かれたものと考えられる。基底部には10cm前後の厚さで砂を置きその上に粘土を積んで、さらにそれらを粘土でおおっている。幅は北端部では約3mを測るが、南に向かってやや広が



第141図 後期(3) 5・6・7区平面図

っており、4 m位にはなるようである。高さは約0.4mある。遺物は出土していない。

溝1 (第84・140図)

31区の北西端で検出した。南西から北東にはしるようである。幅は不明、深さはおよそ0.5mある。下半には砂混粘土層が堆積し、上半は暗灰色粘土で埋まる。いずれも自然に堆積したものである。また、下半の層には炭酸カルシウムが含まれる。遺物は出土しなかった。

溝2 (第140図)

31区の西端で検出した。ほぼ南北方向にはしり、溝1にとりつく。幅は、溝1付近でやや広く約0.5m、南端部では0.3m位である。深さ約5cmで、底のレベルは、北端部でT.P.2.56m、南端部でT.P.2.52mと南に向かってわずかに下がっている。粘土により埋まっていた。出土遺物はない。

ピット群 (第141図)

7区で検出した。不定形で、径0.05m～1mまでと大きさも様々である。深さも数cmから25cm位までである。性格は定かでない。遺物は出土しなかった。

落ち込み1 (第141図)

6区で認められた。灰黒色砂混粘土層がSTA.89+50付近で途切れ、北半部で落ち込みが見られるが、そこに約10cmの厚さで暗灰色粘土層が堆積している。暗灰色粘土層には植物遺体が含まれていた。(その2)調査区では同期の水田が検出されており、それに続く粘土層の可能性が考えられるが、どのあたりまで水田が広がっていたかについては明らかでない。遺物は出土していない。

落ち込み2 (第140図)

31区東端で検出された。東に向かって落ち込んで行き、茶灰色粘土の堆積により埋まっている。出土遺物はない。

足跡群 (第140図)

鹿の足跡と考えられるものが31区で検出された。深さは3～4cmを測る。

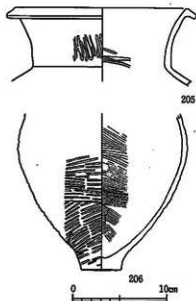
カニ穴群 (第141図)

5区の灰黒色砂混粘土層上面で検出した。付近には河川1が流れていたと考えられ、川のほとりにカニが巣をつくったのであろう。

d. 後期(4) (付図13)

後期(3)の河川1が引き続き認められるが、幅がより拡張した段階である。4～6区は全面砂におおわれてしまっている。広く浅い河川となって、川床が高くなり、水位も上がったと考えられる。(その2)調査区の「後期Ⅱ面溝1」と「後期Ⅲ面河川」はいずれも河川から水を引いたと考えられる溝であるが、前者が細砂で埋まるのに対し後者には砂礫が堆積しており、先へのべたようなことを背景により豊富に恒常的に水が供給されるようになった状況が想定される。

e. 後期(5) (付図14)



第142図 後期(5) 5-1区河川1
出土土器

(その2) 調査区で後期(4) 対応面をおおう砂層があり、河川の存在が考えられるが、STA.87+50付近でそれに伴う東西方向の堰が検出されている。今回の調査区では、この河川の続きと考えられる砂の堆積が、5-1・2区、及び8~10区で認められ、それらからすると、幅60~70mの広い川が推定復原される。深さは1m位である。この段階で周辺の景観は大きく変化した。

—遺物— (第142図、図版50)

5-1区で弥生土器の壺と甕が出土した。

壺(205)は、やや外傾する頸部と端部を外方へ屈曲させた口縁部を持つもので、頸部外面を縦方向の笄磨き、内面を横方向の笄磨きで調整している。また口縁部は横撫で、体部外面は撫でが施されている。胎土は砂を含むが比較的精良である。角閃石は見られない。

甕(206)は、口縁部を欠くが胴部最大径が中央より上にあり、やや肩の張る側面をもつ。外面には叩き目を残し、内面の下部約1/3を刷毛調整、その上部を撫で調整している。また、叩き目は下部と上部で方向が変わるが、上のものが明らかに下のものを切っている。粘土の織り目は叩き目の方向が変わる胴の下部と最大径を示す胴部のやや上に認められる。外面には煤が付着し、内底面には焦げつきが見られる。胎土には砂粒を含むが、角閃石は見られない。

甕(206)は、口縁部を欠くが胴部最大径が中央より

これらの土器は、後期でも前半に位置付けられるもので、(その2) 調査区の堰にひっかかって出土した土器群より古く位置付けられるが、肩に丁度、後期中頃の包含層があるため、そこからの混入が考えられる。

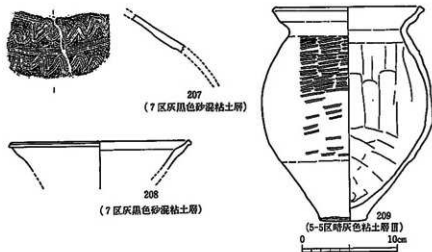
包含層出土遺物(第143図、図版50)

7区・31区・5-5区などで、弥生土器片が数十点出土したが、そのうち比較的良く残っているものについて紹介する。

207は7区灰黒色砂混粘土層から出土した壺で、肩に回転台を用いずに施した5条1単位の横描き直線紋と波状紋が見られる。弥生時代後期(1)の溝2から類例が出土しているが、胎土や1単位の条線の数が異なる。207は角閃石を多く含む生駒西麓産の胎土が使われている。

208は、鉢であろうか。口縁部は横撫で、体部内面は撫で調整により仕上げられている。体部外面は調整観察不能。器形、時期ともに明確ではない。

209は5-5区暗灰色粘土層Ⅱから出土した甕である。やや受け口状になった口縁部をもち、胴部最大径は中位よりやや上にある。口縁部から頸部内外面は横撫でを施す。また、体部外面は叩き目が見られるが、下部1/3は撫でにより殆ど消されている。内面は撫でにより調整されてい



第143図 各包含層出土土器

る。外面は煤の付着が夥しい。後期中頃に位置付けられる。

f. まとめ

後期(1)になると(その1)調査区に幅9m、深さ約1.3mの川が流れるようになる。その川には流水の攻撃面に堤と考えられる盛りあがりや伴い、周辺部における土地利用のうかがわせる。川の埋土からは遺存状態良好な土器も出土しているので近くに集落の存在も予測させるが、川の近辺に祭肥を考えさせる遺構や遺物の出土が認められるため、川からの出土遺物はそれとの関連も否定しがたい。また、堤状遺構の南には粘土の堆積が広がり、畦は検出していないものの水田として利用していた可能性はある。今回調査したAライン付近はその川の後背湿地となっていたようである。また、当該河川の南約700m以南にも水田が認められるが、これは別の河川から水を引いていた可能性が高い。

後期(2)では、河川の後背湿地としてのAラインに粘土の堆積が進み、後期(1)で見られた溝が埋ってしまい、その上に人間の足跡群が見られるようになった。河川の影響がより強くなり沼になっていたその辺りで人々は動植物の捕獲・採集を行っていたのであろうか。他の地区では、後期(1)とあまり変わらなかった可能性もあるが、全体に河川の影響が強くなり、積極的な土地利用が行なわれていなかった状況も考えられる。

ところが後期(3)になるとAラインと(その1)調査区で安定した流路(河川1)が形成され(両者はつながる可能性が高い)、その水を利用した水田としての土地利用が周辺部で明確になってくる。勿論その背景には後期(1)~(2)における河川の後背地としての粘土の堆積があることは言うまでもない。(その4)調査区でも用水路あるいは排水路と考えられる溝群が認められ、近辺に水田があるとも考えられるが、明確ではない。

後期(4)は後期(3)と基本的には変化しないが、畦畔や溝に若干変化が見られる。また、

河川1は、広く浅い川になり、水位もややあがったようで、河川から引かれていた溝に砂礫が堆積するようになる。

後期(5)になると近辺の環境は大きく変化する。(その2) 調査区を中心に大きな流路が形成され、調査区内での明確な土地利用は認められていない。しかし、その流路には堰が設けられており、近辺で水田が経営されていたことは明白である。

注(1) 奈良国立文化財研究所 佐原 真氏、岡木下正史氏から御教示を受けた。

第5節 古墳時代の遺構と遺物

ほぼ全体にわたって古墳時代の遺物を包含する層と遺構面を形成すると思われる基盤層を検出しているが、遺構や遺物は少なく、すべて古墳時代後期のものである。(付図16)

溝1 (第145図、図版26)

7区で検出したのは南北にのびる溝である。上幅0.5~0.7m、下幅0.4m、深さ約0.2mを測る。埋土は白灰色微砂であり、須恵器片が出土した。

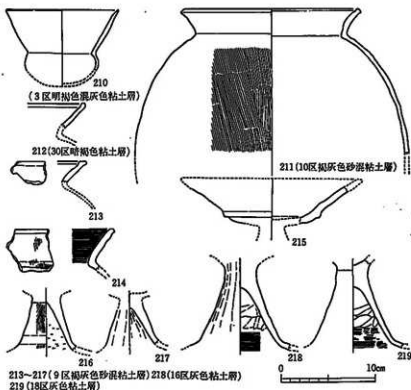
一遺物一 (第146図)

220は、T・K209型式に属する須恵器坏で、立ち上がりは小さくつまみ上げる程度で受部には沈線がめぐる。下半部を失っており笕削りは不明である。焼成は良好である。

溝2 (第145図、図版26)

溝1にやや斜行してすぐ北側で検出した溝である。上幅1m、下幅0.5~0.6m、深さ約0.2mを測る。埋土は溝1と共通するが、掘削した状況は溝というよりも Pit などが集合して溝状になったような様子であった。遺物は出土していない。

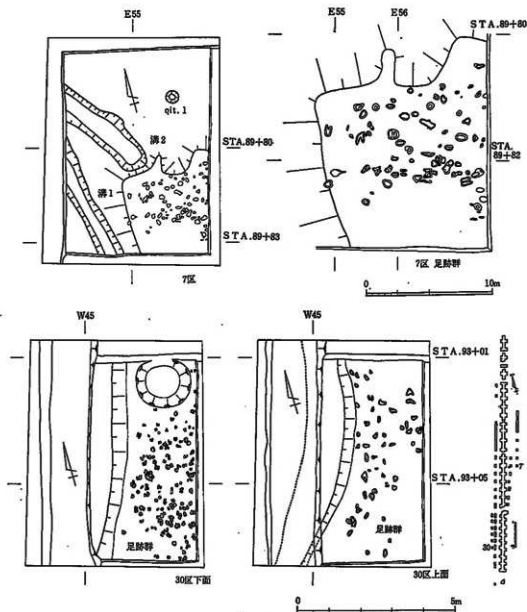
7区では南東部の遺構面がやや高まっており、その上面に牛や鹿と思われる足跡を検出している。内部には溝と同様に白灰色の微砂が入り込んでいた。



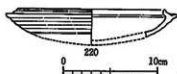
第144図 各包含層出土土器(1)

水田 (第145図、図版27)

30区では、畦状の盛り上がりで2層にわたる足跡の刻印された層を検出した。まず下面は、弥生時代後期の堆積層である暗褐色粗砂混粘土層上に暗灰色粘土層が薄く堆積し、人間そして動物と思われる足跡が多数検出された。また、半月形をした鋤跡もいくつかみられる。トレンチ西半部は攪乱を受けているが、暗褐色粘土層が約25cm盛り上っており畦と考えられる。ただトレンチ西壁ではそのまま暗褐色粘土層がみられるので、かなり幅広い畦もしくは、畦とは異なる遺構の



第145図 古墳時代後期7・30区平面図



第146図 7区溝1出土土器

可能性も考えられる。暗灰色粘土層上面から古墳時代後期の須恵器片が検出されている。

上面は、下面の水田直上に存在する。下面の畦?上に暗黄灰色粘土層が重ねて盛られ、畦を形成している。この畦はやや彎曲している。水田面では暗褐色砂混粘土層が堆積しており、人間の足跡がいくつかみられた。上面は灰白色

粗砂層あるいは褐灰色粗・細粒砂層で覆われており、この層に連続する29区の灰色砂混粘土層中から古墳時代後期の須恵器が出土している。

包含層

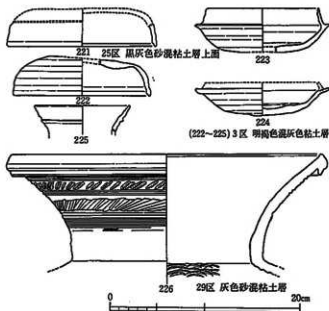
古墳時代の遺物は現代面にいたる各層からも出土しているが、古墳時代の堆積層と思われる包含層もいくつか指摘できる。以下遺物の説明と共に述べる。

一遺物—(第144・147・148図、図版50・51)

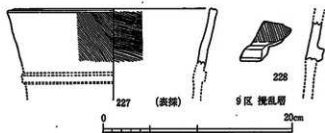
210は、小型丸底壺である。底部を失っているが全体に薄く丁寧なつくりである。赤褐色を呈している。表面刺摩のため調整などは明らかでない。布留式古相を示している。3区の明褐色混灰色粘土層中から出土した。

211は、10区褐灰色粘土混砂層から出土した やや胴長と思われる甕である。口縁端部内面にわずかな凹みがある。焼成は軟質で残存状態は悪い。外面は刷毛、内面は撫でによる調整。これを出土した包含層は、9～16区にわたって連続して認められるが、土師器片は多く含むものの須恵器片は含まない。212は、30区の暗褐色粘土層中から出土した。この層は、古墳時代後期水田

面の基盤層もしくは畦状の遺構と思われる。甕の口縁部小片であるが、端部は丸くおさめてわずかに内面に凹みをつくる。213～217は、9区褐灰色砂混粘土層から出土した。これは10区で211を出土した層と同一層である。布留式の甕(213・214)はいずれも口縁部小片であるが、口縁端部上面に面をつくり、内面に肥厚する213と、丸くおわらせる214があり、214は内外面に刷毛調整がみられる。215～217は高坏である。口縁部と底部の境に段がみられる215のほか、脚部では、外面刷毛調整で内



第147図 各包含層出土土器(2)



第148図 円筒埴輪

面笥削りを施す 216、内面にしほり目を残したままの 217 がある。218 は 16 区の灰色粘土層から出土し、219 は 18 区の灰色粘土層から出土した。共に外面は笥磨きかと思われ、内面は撫で + 横刷毛の調整がみられる。

221 は、25 区の黒灰色砂混粘土層上面から出土しており、弥生時代後期の堆積層上が即古墳時代後期の堆積となったようである。須恵器坏蓋口縁部の小片であるが、端部内面にやや凹部を有する面を形成している。222～225 は 3 区の明褐色混灰色粘土層から出土したものでこの層は 210 の小型丸底壺と同じ層である。222 は、口縁端部内面に面をもつ須恵器坏蓋で、225 は古式の甕の口縁部と思われる。須恵器坏は、立ち上がりの高い古い様相を呈する 223、新しい傾向の 234 がある。

226 は、29 区灰色砂混粘土層中から出土した甕の破片のうち、口縁部である。頸部は約 30 片の破片があるが接合しなかった。口頸部は大きく外反し、端部は上下に拡張し、断面三角形を呈するものである。頸部外面には甘い凹線がめぐらされ、その間帯に櫛状のものを押し付けた列点文（上段）と、笥を粗く押し付けることをくり返したような文様（下段）がみられる。また掻き目も施されている。

表採及び攪乱層から出土したものに円筒埴輪の小片が 2 点ある。227 は、今回調査に伴う道路付け替え工事に伴って前回の（その 2）調査区付近の工事中、立会を実施した時採集した。出土層位は現代の中央環状線建設時の攪乱層底付近である。口縁部はやや凹む面をつくっており、内外面共に斜めの刷毛調整が丁寧に行われている。228 は 9 区の工水管攪乱層から出土した。小片であるがやや斜行する縦刷毛が認められ、しっかりと突出したタガが特徴的である。

まとめ

山賀遺跡における古墳時代の遺構はそれほど顕著なものではない。しかし、前回調査では前期の建物群、後期の古墳などが検出されており、点的には重要な遺構が散見される。特に今回の調査でも時期が異なる複数の埴輪片を得ているので、河内平野部における小古墳を考える材料が著実に増加してきているわけである。弥生時代とは異なる古墳時代社会のあり方について考えるひとつの機会となろう。

第6節 奈良・平安時代の遺構と遺物

今回の調査では1～3区で奈良～平安時代の溝・ピットが検出された。鉄斑を多く含んだ灰色粘土層（黄褐色混灰灰色粘土層・明褐色混灰灰色粘土層）を基盤とする。検出面のレベルはT.P. 2.6m～3mで、南に高くなる。（付図17）

溝1（第149図）

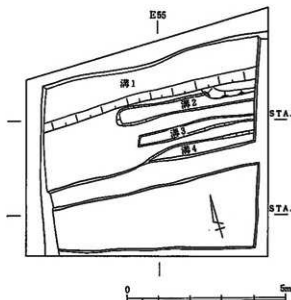
2区の北辺に沿って直線的に検出された。以降、その位置には現代まで溝が重複して認められ、それらは現代面方格地割と方向を一にしている。南西部を検出しただけで、幅・中心部の深さともに不明であるが、調査区内にかかった部分で、幅約1.7m、深さ約0.2mを測る。砂混粘土や砂によって埋まり、水が流れていた時とよどんでいた時があったらしい。底のレベルはT.P. 2.5m前後で、どちらに傾斜しているかは明確でない。

一遺物—（第150図、図版52）

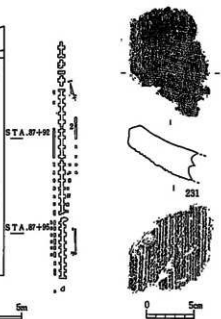
平瓦片が4点出土した。1点は表面が剥離しているが、その他は凸面に縄目叩き痕、凹面に布目が見られるものである。縄目は平行にとおり凹面に横骨による明瞭な凹凸が見られないところから1枚作りによるものと考えられる。231は側縁を笥割りで整形している。胎土は砂礫を多く含む。環元炎により硬質に焼かれ、灰色を呈している。奈良～平安時代のものである。

溝2～4（第149図）

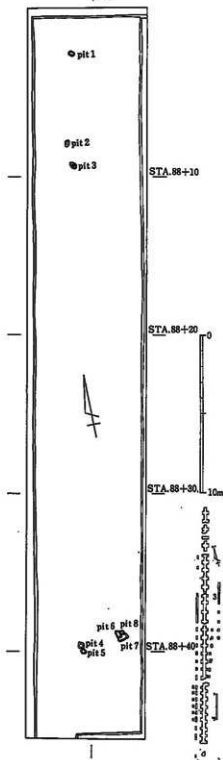
溝1の南に近接して、しかもそれに平行する溝が3本検出された。幅0.2～0.6m、深さ0.1～0.2mの浅くて細い溝である。それぞれ0.3m前後の間隔をおいてほぼ等間隔に並んでいる。溝は



第149図 奈良・平安時代2区平面図



第150図 2区溝1出土瓦

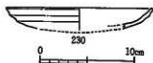


第151図 奈良・平安時代3区平面図

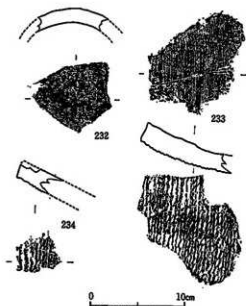
調査区半ばで途切れるが、上部削平による結果とも考えられる。底がどちらに傾斜するかは明瞭でないが、先のように考えると東に下がる溝になる。埋土は検出面を覆うのと同じ灰色粘土である。遺物は出土しなかった。

ビット1～9 (第151図)

1区北端部で1個、3区北部で3個、同南部で5個を検出した。分布密度は極めて低く、散在的である。平面形は、ややいびつなものもあるが、いずれも基本的には方形で、1辺(長方形では長辺)0.3～0.6mを測る。深さはビット1が約0.4mと最も深く、他は数cmから10数cmである。埋土は灰色粘土あるいは明褐色粘土である。遺物は復原できない。周辺が耕作地であったと考えられることから、あるいは農耕に関連するものであろうか。遺物は出土しな



第152図 2区灰色粘土層Ⅱ出土土器



第153図 3区灰色粘土層Ⅱ出土瓦

かった。

包含層出土遺物（第152・153図、図版51・52）

灰色粘土層Ⅱから土師器・黒色土器・須恵器・瓦等の破片が少量出土した。

土師器は皿が認められる（230）。口縁部に2段撫でを施し、端部を丸くおさめている。腐り礫が多くまじるが、胎土は比較的精良である。やや軟質で黄褐色を呈す。平安時代後葉のものである。その他、杯B（あるいは碗）、甕の破片と思われるものもあるが、小片のために全体の形状・時期などは明らかでない。

黒色土器は細片のため図化できなかったが、A類の碗が認められる。高台は細く低いもので、9世紀に位置付けることができる。

須恵器は古墳時代の杯が混入品として認められるが、それ以外は小片の為全体の形・時期などを明らかにできない。

瓦は平瓦と丸瓦がある。平瓦は凸面に縄目を残す。233では凹面に布目及び型の若干の凹凸が見られるが、桶巻きづくりによるものかどうかは定かでない。側縁はヘラ削りか撫でを施している。胎土は砂礫を少量、腐り礫をやや多く含む。やや軟質である。赤変し、二次焼成を受けていることが解る。これと同一個体と考えられるものが他に3点出土している。234は凹面に布目が見られない。胎土はやはり砂礫を少量含む他、腐り礫を多く含む。焼成は硬質で、色調は灰色を呈す。232は丸瓦片で、凸面を縄目絞きの後に撫で調整しているようである。凹面には布目が残る。胎土は砂礫をやや多く含む。焼成はやや硬質で、色調は表面が灰色、内部が灰白色である。

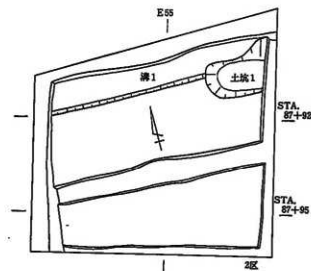
まとめ

（その6）の調査では前述のようにAラインで奈良～平安時代の溝とピットを検出した。（その1～その4）の調査でも奈良・平安時代の遺構が認められているが、それらは同一面で検出され、伴出遺物も少ないところから個々の遺構の時期については必ずしも明確ではない。しかし、いずれにしても溝・畦畔などが主体をなし、両時代を通じて主に耕作地として機能していたことが考えられる。奈良時代と平安時代の遺構がほぼ同じレベルで検出されるということは土地条件の安定化を物語るものであるが、奈良時代から平安時代にかけて耕作地として安定的に土地利用が行なわれていたという先の想定はそれと矛盾しない。また、溝や畦畔のなかなには現代方格地割と重なったり同じ方向性を持つものがあり、当該地域における方格地割の起源を示唆するが、それと共に奈良時代以降の比較的安定した地形環境をも傍証するものである。畦畔の検出例は多くないが、直上に後世の耕土層が重なったために誤された可能性もあり、どの範囲が耕地となっていたかまでは明確でない。

その他、（その4）調査区では土坑・ピット群が検出されており、古墳時代河川が掘った跡の微高地に立地する。不定形で、大きいものは長径約1mを測る。あるいは墓とも考えられるが確証はない。中のひとつから7世紀のものと考えられる土師器が出土している。

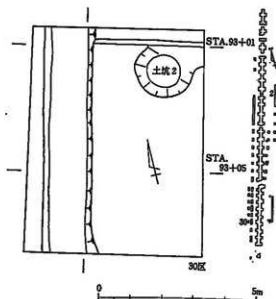
第7節 鎌倉・室町時代の遺構と遺物

溝・道状遺構・土坑などが認められた。しかし、B・Cラインでは工業用水管の埋設により大部分攪乱を受けていることもあり、全体として検出遺構・出土遺物は極めて少ない。基盤は基本的に粘土層で、平安時代の遺物包含層となっている。検出面のレベルはT.P.2.8~3.6mで、南に向かって高くなる。(付図18)



溝 (第154図)

2区の北辺に沿って見られる。下層には奈良~平安時代の、上層には近世と近・現代の溝が重なり、現代方格地割と同じ方向性を持つ。やはり北側が調査区外に出るため全幅・中心部の深さは不明である。調査区内にひっかかった部分で幅約1m、深さ約0.2mを測る。下半には細粒砂混り粘土、上半には中・粗粒砂の堆積が見られる。底のレベルはT.P.2.7m前後で、傾きは明確でない。土師器・瓦器・須恵器の小片が5~6点出土した。時期等は明らかでない。



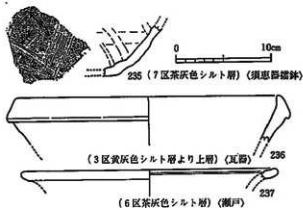
道状遺構 (第156図、図版28)

1区の中央部で、東西方向にはしる幅約2m・高さ約0.1mのシルトの盛りあがりが見出された。検出状況は明確なものでなく、性格も明らかでないが、畦畔としては低平である。道の可能性も考えられようか。遺物は伴わない。

土坑

13区中央残存部の断面観察により認められた。平面形は不明である。断面で上幅約1.9m、下幅約1.3m、深さ約0.7mを測る。底は砂に塗り

第154図 鎌倉・室町時代2・30区平面図



第155図 包含層出土土器・陶器

ており、素掘り井戸の可能性はある。粘土により埋まっているが、下部は砂が多く混じる。

—遺物—

土師器・瓦器・須恵器・瓦の他弥生土器・黒色土器も含めて約50点の破片が出土した。小片のため大部分は形状・時期について明らかでないが、平安時代末の土師器小皿・瓦器碗を含み、時期的に平安時代末まで遡る可能性がある。

土坑2 (第154区)

30区北端部で検出した。平面は円形で、径約1.8m、深さ約1mを測る。底は砂層に達している。粘土及び砂混粘土などで埋まる。井戸であろうか。

—遺物—

陶器・瓦・須恵器の小片が各1点出土した。陶器は常滑焼の壺か甕の体部破片と考えられる。時期は不明。

須恵器は6世紀の杯で、混入品である。

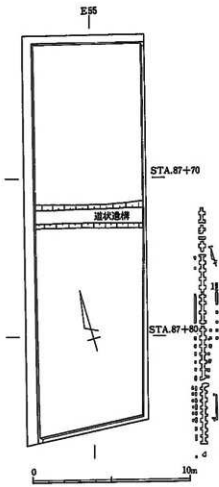
包含層出土遺物 (第155・157図、図版51)

土師器・須恵器・瓦器・陶器・白磁・瓦などの破片がまばらに出土した。すべて小片で、器形・時期などの明確でないものが多い。

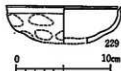
235は須恵器の襷鉢で、内面を撫で調整した後5本1単位の播目を櫛状工具でつけている。底部外面に糸切りや筥切りの痕は見られない。胎土は砂粒をやや多く含む。焼成は硬質で、色調は灰色を呈す。

267は同じく須恵器の甕体部片で、外面に平行叩き目を残し、内面は撫で調整を施している。胎土は砂粒をやや多く含む。焼成はやや軟質、色調は灰色である。

236は瓦器の鉢で、小片のために播目の有無は



第156図 鎌倉、室町時代1区平面図



第157図 6区赤灰色シル
ト層出土土器

解らない。口縁部も横撫で、体部内面を撫で調整しているが、体部外面は不調整のようである。胎土は精良、焼成は軟質で、色調は表面が黒色、内部が灰白色を呈す。

237は美濃瀬戸の鉢で、淡黄緑色の透明釉がかけられている。

229は7世紀の土師器杯で、混入したものである。

まとめ

鎌倉・室町時代では先の調査も含めて溝・畦畔・水田・井戸等農耕に関わる遺構が顕著に認められた。奈良・平安時代に引き続き耕作地として機能していた様子がうかがえる。溝や畦畔はやはり古代条里・現代方格地割と同じ方向性を示すものが多い。また、(その2)調査区南端部の条里坪境畦畔が交わる部分の近接地点で畦畔の下から馬の首を埋納したらしい土坑が検出されている。雨乞いの儀式に関わるものと考えられる。その他、土坑やピット群も検出されているが、個々の性格については明らかでない。

第8節 江戸時代以降の遺構と遺物

江戸時代から現代の遺構については時期的に必ずしも明確に弁別できないが、江戸時代を主体とする遺構面と近・現代遺構面が認められる。以下では前者を江戸時代面、後者を近・現代面としてわけて報告する。

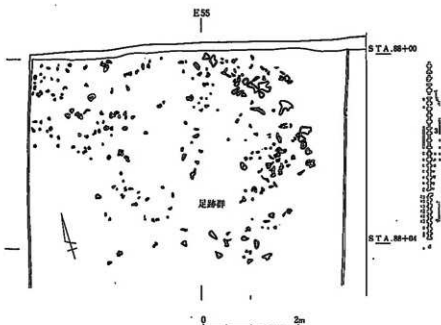
江戸時代面 (第158～160図、付図19)

溝・ピット・土坑・段・足跡等が検出され、農耕関係の遺構が顕著である。水田畦畔は検出されていないが、近・現代面が直上に重なるため裏されたのであろう。

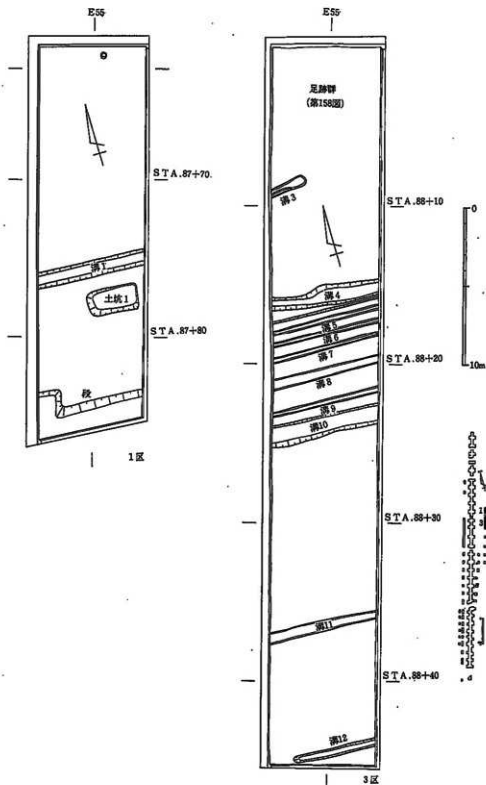
溝は基本的に古代条里・現代方格地割の方向に合致する。2区溝2は農耕用排水路と考えられるもので、奈良～平安時代以降現代に至るまで同じ位置に溝が重複して掘られている。3区の溝5～9はほぼ平行する直線的な細い(幅0.2～0.4m)もので、鋤によるものであろう。その南北には溝と平行する段があり、周辺より約0.1m高くなっていることから畑の跡ではないだろうか。その段に沿って溝14と溝10が検出されている。幅1～2m、深さ約0.2mを測る。水が常時流れていたり、たまっていた形跡はなく、雨水などの排水溝と考えられる。1区溝1なども同様の機能を持っていたと考えられる。その他、溝11・12のような細い溝が各所に認められる。鋤溝や一時的な排水の目的などで掘られたものであろう。

ピットは1区北端で単独で検出している。何の為に掘られたものかは不明である。

土坑は1・26・27区で検出された。27区の土坑3は、深さ約1.5mで、その半分ほどが砂層を



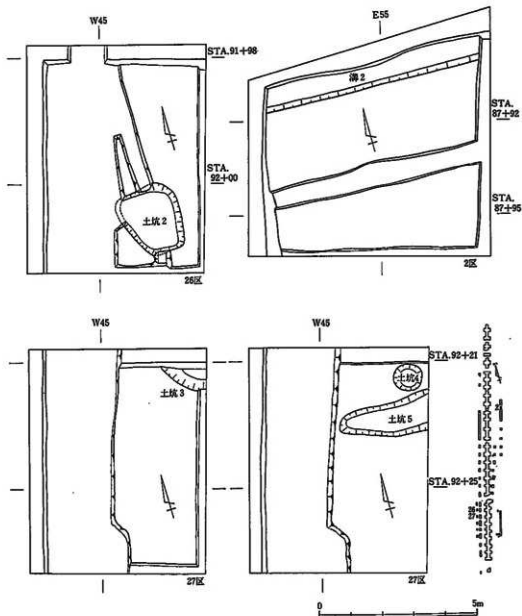
第158図 江戸時代3区平面図



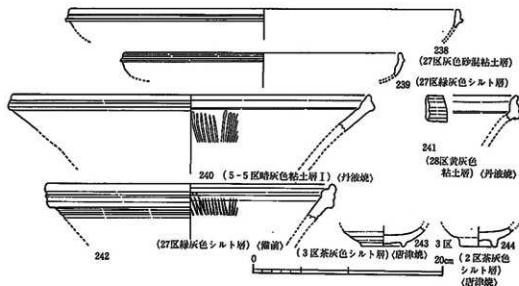
第159图 江戸時代1・3区平面图

抜き、茶掘り井戸の可能性が高い。平面形は、全体を検出していないため、明確でない。埋土にはブロック土が混在し、ひと息に埋められたようである。遺物は出土しなかった。26区の土坑2は0.5mの深さを持つ土坑で、灰色粘土によって埋められている。性格は不明である。その他土坑1・4・5などは深さ0.1~0.25mの浅い土坑である。性格はやはり解らない。

段は、溝のところで触れた3区の段の他、1区の南端部でも検出された。いずれも0.1m前後の段差があり、耕作面の造成の結果と考えられる。あるいは振り揚げ田であろうか。3区の段で



第160図 江戸時代2・26・27区平面図



第161図 各包含層出土土器、陶器

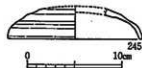
は間に排水を目的とする溝が掘られていたことは先述したが、1区の段にも、断面観察によると幅約0.8m深さ約0.15mの溝が伴う可能性が考えられる。

足跡は3区の北部で集中して認められた。人間のものも含まれ、淡黄灰色細砂により埋まっていた。足跡が残されていた付近は周辺より地面がやや低く、地面がより軟弱であったのだろうか。また、北凡そ10mのところにある溝からあふれ出した水により足跡内に砂が運び込まれたためにそれが残されたことも考えられる。

—遺物— (第161・162図、図版53)

遺構からの出土例も若干あるが、殆ど包含層から出土した。いずれも小片で、土師器・須恵器・瓦器・染付・瓦・土製品などがあるが、古い時期の混入品も多い。総量でコンテナに半分位ある。

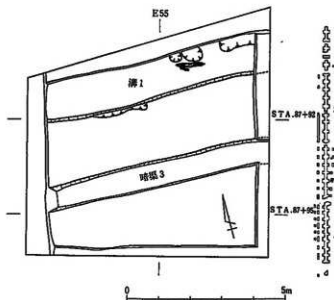
238・239は炆烙鍋である。口縁部及び体部内面は横撫で調整が施されている。付部外面に細かな凹凸が見られ、金雲母片が多く付着しているのは型づくりによる離れ砂の使用を示すものであろう。体部器壁は2mm前後と非常に薄くつくられている。口縁部下にはつば状の突帯がめぐる。238のそれは比較的突出度が大きく端面を持つのに対し、239では突出度が小さく、端を丸くおさめている。時期差なのか、あるいは生産主体の違いによるものなのであろうか。胎土はいずれも精良である。素焼きであるが硬質に焼かれ、色調は、238が灰白色、239が淡茶褐色である。外面には煤が付着する。



第162図 3区江戸時代溝3出土土器

240・241は丹波焼の搦鉢である。240が砂粒を多く含むのに対し、241は比較的精良である。口縁部の形態から、240が17世紀第2四半期、241が18世紀前半のものと考えられる。

242は備前焼の搦鉢である。先の鋭利な棒状工具で連続的に搦



第163図 現代1・2区平面図

土した混入品であるが遺存状態が比較的良いので紹介した。

近・現代面（第163・165図、図版28・29、付図19）

2区の溝1は現代方格地制の里境に位置する溝である。奈良～平安時代の条里地制と同じ方向性を持ち、奈良～平安時代以来同じ位置に重複して溝が掘られてきたことは再三述べてきたところである。やはり農耕用排水路として機能したものであろう。調査区内で幅約1.6m、深さ約0.3mを測る。底は西に向かってやや下がるようである。

土坑は1・3・5区で検出された。大小あるが、ほぼ隅丸方形で、深さは0.2m～0.5mを測る。何のために掘られたものかは明らかでない。

段は1区で検出された。耕作地の造成によるものと考えられる。掻き挙げ田であろうか。段差は約0.2mを測る。

暗渠は、土管・竹筒+木の枝・木の枝をそれぞれ埋め込んだものが見られた。竹は、半載して節を欠いた後再び合わせて用いられ、周囲に枝をからめて埋め込まれている。木の枝だけの暗渠は、それが束ねて埋め込まれていた。暗渠1・4は土管、2・3・5～9・12・13は竹筒と木の枝、10・11は木の枝を用いたものである（付図19）。いずれも方格地制の方向に沿って東西あるいは南北方向につくられている。

一遺物一（第164図・図版51）

土師器・瓦器・須恵器・陶器・磁器・瓦の破片が旧耕土から出土している。すべて小片である。江戸時代以前のものが多いようであるが、近世以降の染付なども含まれている。

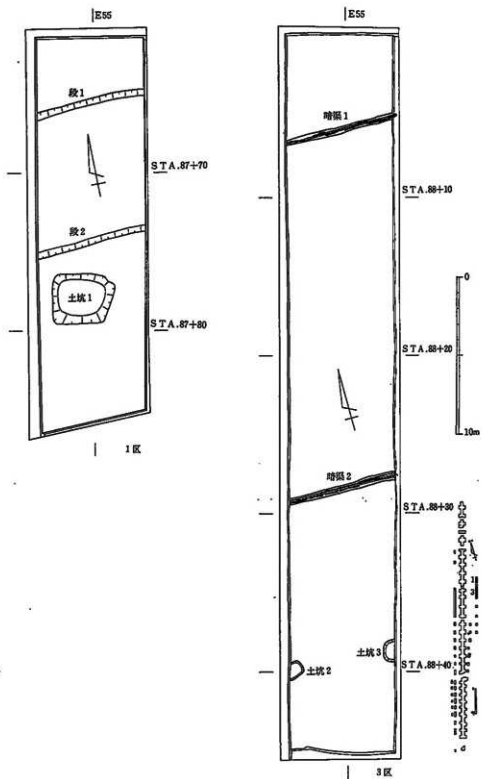
り目をつけている。砂をやや多く含み、赤橙色を呈す。口縁部の形態から17世紀後半のものと考えられる。⁽²⁾

243・244は唐津焼の碗である。243は、底部外面には釉をかけず、内面にはぶい黄橙色を呈する釉をかけている。244は内外面に茶色と白の釉を横状にかけるが、内底面では焼成前に釉が輪状に掻きとられている。

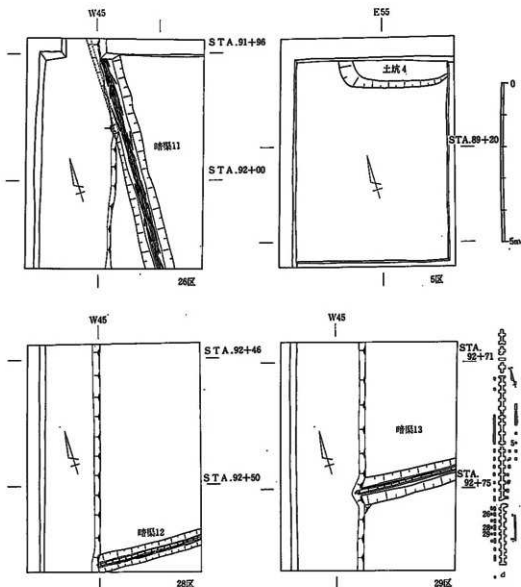
245は7世紀前半の須恵器杯蓋である。3区溝3から出



第164図 3区旧耕土出土瓦



第165图 现代1·2区平面图



第166図 現代5・26・28・29区平面図

246・266はいずれも滲入品で、246が凹面に布目を持つ平瓦、266が中国製の白磁である。

まとめ

見てきたように調査区一帯は江戸時代以降も前代に引き続き田圃地帯であった。残された遺構の多くは農耕に関係するものである。さて、その中でも極めて特徴的な注目すべき遺構（群）がいくつか認められる。以下、それらについて詳述し、まとめとする。

ひとつは、当該地周辺において奈良～平安時代に施行されたと考えられる条里地制と同じ方向性を持つ溝や畦畔あるいは暗渠である。中には2区の溝のように、奈良～平安時代以降同じ位置

に溝が掘られてきた例もある。同じ区画原理に基づく方格地割ではあっても時代によりそれを支えた社会的背景には当然異なったものが考えられるが、形式上にせよ諸例は奈良～平安時代の条里地割が現代の方格地割まで継承されたことを物語るものである。その背景として、ひとつには自然条件の安定化ということがあげられよう。つまり、地形や水系に大きな変化がなく、同じ地割・灌漑体系が合理性を持ち続けたということである。もっともそれは単に自然条件の問題にとどまるわけではなく、治水・灌漑技術の発達とも関わり、少なからず社会的な問題ではあるが。

いまひとつは掻き揚げ田で、今回の検出例の他、(その2・その4)調査区でも出土している。掻き揚げ田は、江戸時代に初めてつくられたものでなく、古代・中世から存在したと考えられているが、少なくとも河内平野では江戸時代以降急速に造成が進んだことは遺構の検出状況からうかがえるところである。掻き揚げ田は夏の用水不足と冬の湛水に強いと言われ、先の背景には江戸時代初期の大和川付け替えによる水不足に一因があると考えられる。が、その中で、活発な商業活動や貨幣経済の浸透を背景として商品作物たる綿花の栽培が河内平野に導入されるに至り、畑地の必要性から掻き揚げ田の造成が促されたことが考えられる。ちなみに今回の調査区でも江戸時代の層から綿の花粉が検出されている。

さて、大和川の付け替えに伴う水不足については掻き揚げ田の他にもそれをより顕著に物語る遺構が見られる。それは井戸である。勿論、それ以前にも井戸は見られるが、江戸時代になると急激に多くの井戸が掘られ、その1からその6の調査区で総数23基が検出されている。しかも、頑丈な木組みや瓦質井戸枠を伴って、深いものでは4m位掘り抜き、長期的により安定的に多くの水を得ようという意図が見てとれる。旧大和川(長瀬川)に近い佐堂遺跡では井戸の検出例が少なく、美園遺跡では検出されていない。大和川付け替えによる旧大和川の水量の絶対的な減少は、旧大和川から離れた山賀遺跡周辺でより深刻な水不足をもたらしたのではないだろうか。

次に、現代の特徴的な遺構として暗渠がある。北限はS.T.A.88+00付近で、南は文井東遺跡北端部S.T.A.94+50付近に及ぶ。土管暗渠・竹暗渠・そだ暗渠があることは先述したとおりである。現代方格地割に平行し、南北方向には1町ごと、東西方向には、部分的に抜けている所もあるが、1町に5条が基本であったようである。これは1944年につくられたもので、第2次大戦中に生産の増大を計って実施されたのであろう。

その他、(その1)調査区で独立柱建物1棟、(その4)調査区では道・粘土探掘坑などが検出されている。

註(1) 広瀬和雄「5.陶器」『能勢町における埋蔵文化財の調査1』能勢埋蔵文化財研究会・能勢町教育委員会(1985)

(2) 鈴木重治・松藤和人「同志社キャンパス内出土の遺構と遺物」同志社大学校地学術調査委員会(1978)

第Ⅶ章 理化学分析の成果

1. 花粉・珪藻分析結果と山賀遺跡の自然環境

a. はじめに

山賀遺跡（その5）及び（その6）の調査において採取した土壌試料149点について、花粉分析と珪藻分析をバリノ・サージュエ株式会社に委託した。その結果は、「山賀（その5）資料花粉分析、珪藻分析報告」及び「山賀（その6）採取土壌の花粉分析及び珪藻分析報告」において報告を受けた。ここでは、それら報告を全体的にふまえたうえで代表的試料となるもの32点を抜出して分析結果を掲載した。32点の資料はいずれも（その6）調査の3区から採取したものである。したがって分析結果は、バリノ・サージュエの（その6）の報告書から抜粋したが、試料点数や図・表の番号、遺構番号の他、土層の年代や名称等もその後の検討の結果変更を加えたものについては書きかえ、また一部付け加えた。花粉分析に基づいた古環境の復原はバリノ・サージュエのものを転載したが、章の最後で、珪藻分析の結果も含め、発掘調査の所見をふまえて古環境について若干の検討を加えた。（YMG 6-3とは、山賀遺跡（その6）調査・3区を示す）

b. 花粉分析

試料

試料は山賀遺跡（その6）の各地点より採取された合計32点である。採取地点、試料番号・土質等については第4表・第167・168図を参照されたい。

分析方法

花粉分析の方法は下記の手順で行なった。

試料約20g秤量（湿重）—HF処理—重液分離—アセトリシス処理—KOH処理—封入—検鏡
封入は、プレバート1枚当たりの樹木花粉が約200個体になるように行ない、検鏡はプレバートの全面を走査し、出現した全ての花粉・胞子化石を同定した。

分析結果及び考察

花粉分析の結果は各試料について同定した分類群の個体数で表示し、第5・6表を作製した。第5・6表の中から主な化石について第169・170図としてダイアグラムで示した。なお、第169・170図における出現率は、各樹木花粉の場合、樹木花粉の同定総数、各草本花粉とシダ類胞子の場合、花粉・胞子化石の同定総数を基数とした百分率である。主な化石の写真は第171・172図に載せた。なお、表・図の中でハイフォンで結ばれた分類群は両者間の識別が困難なものである。

次に地点ごとに述べる。

○YMG 6-3 STA. 88+15 (No. 1~4, 奈良~平安時代以降)

樹木花粉は、奈良~平安時代から現代に向けてアカガシ亜属が減少、マツ属（主にニヨクマツ亜属）が増殖し、コナラ亜属は近世にピークをもつ消長を示している。草本花粉とシダ類胞子は

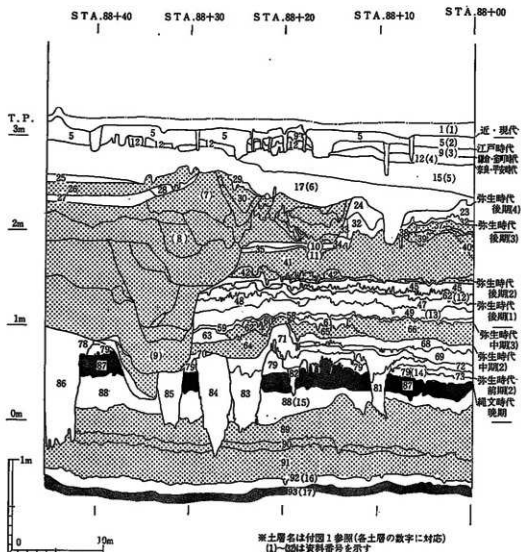
イネ科が顕著に多産し鎌倉～室町時代以降ではソバ属とワタ属等の栽培植物と考えられる花粉が産出する。また、アブラナ科も連続的に産出し江戸時代以降に増加する。水生植物はオモダカ属・ミズアオイ属・キカシグサ属・ミズワラビ属・サンショウモ等が低率で産出する。

○YMG6-3 STA.88+15 (№5・6、古墳時代)

アカガシ亜属、T.-C.・スギ属が多産し、シイノキ属・コナラ亜属・マツ属等を伴う。マツ属はやや増加の傾向が見られる。草本花粉とシダ類胞子はイネ科が多く、カマツリグサ科・ヨモギ属を伴う。

○YMG6-3 STA.88+30 (№7～12、弥生時代後期)

№7、8は花粉の産出が非常に少なかった。№9～12は、アカガシ亜属・T.-C.・スギ属が



第167図 3区分析試料採取層位図

第8節 江戸時代以降の遺構と遺物

江戸時代から現代の遺構については時期的に必ずしも明確に弁別できないが、江戸時代を主体とする遺構面と近・現代遺構面が認められる。以下では前者を江戸時代面、後者を近・現代面としてわけて報告する。

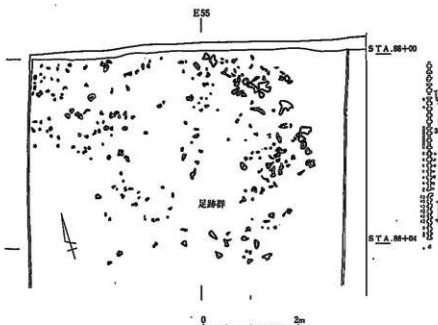
江戸時代面 (第158～160図、付図19)

溝・ピット・土坑・段・足跡等が検出され、農耕関係の遺構が顕著である。水田畦畔は検出されていないが、近・現代面が直上に重なるため裏されたのであろう。

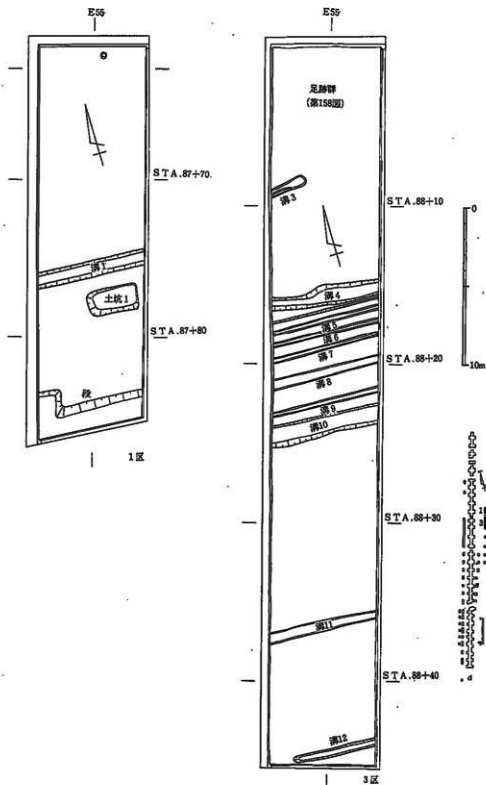
溝は基本的に古代条里・現代方格地割の方向に合致する。2区溝2は農耕用排水路と考えられるもので、奈良～平安時代以降現代に至るまで同じ位置に溝が重複して掘られている。3区の溝5～9はほぼ平行する直線的な細い(幅0.2～0.4m)もので、鋤によるものであろう。その南北には溝と平行する段があり、周辺より約0.1m高くなっていることから畑の跡ではないだろうか。その段に沿って溝14と溝10が検出されている。幅1～2m、深さ約0.2mを測る。水が常時流れていたり、たまっていた形跡はなく、雨水などの排水溝と考えられる。1区溝1なども同様の機能を持っていたと考えられる。その他、溝11・12のような細い溝が各所に認められる。鋤溝や一時的な排水の目的などで掘られたものであろう。

ピットは1区北端で単独で検出している。何の為に掘られたものかは不明である。

土坑は1・26・27区で検出された。27区の土坑3は、深さ約1.5mで、その半分ほどが砂層を



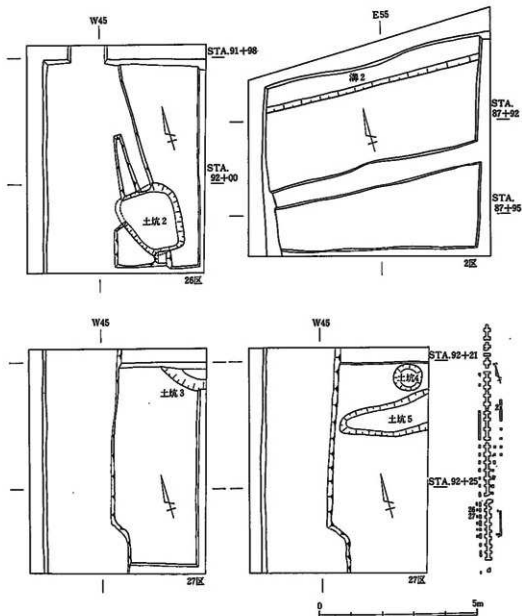
第158図 江戸時代3区平面図



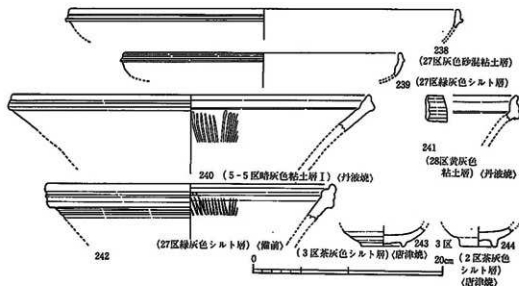
第159图 江戸時代1・3区平面图

抜き、茶掘り井戸の可能性が高い。平面形は、全体を検出していないため、明確でない。埋土にはブロック土が混在し、ひと息に埋められたようである。遺物は出土しなかった。26区の土坑2は0.5mの深さを持つ土坑で、灰色粘土によって埋められている。性格は不明である。その他土坑1・4・5などは深さ0.1~0.25mの浅い土坑である。性格はやはり解らない。

段は、溝のところで触れた3区の段の他、1区の南端部でも検出された。いずれも0.1m前後の段差があり、耕作面の造成の結果と考えられる。あるいは振り揚げ田であろうか。3区の段で



第160図 江戸時代2・26・27区平面図



第161図 各包含層出土土器、陶器

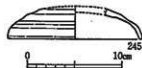
は間に排水を目的とする溝が掘られていたことは先述したが、1区の段にも、断面観察によると幅約0.8m深さ約0.15mの溝が伴う可能性が考えられる。

足跡は3区の北部で集中して認められた。人間のものも含まれ、淡黄灰色細砂により埋まっていた。足跡が残されていた付近は周辺より地面がやや低く、地面がより軟弱であったのだろうか。また、北凡そ10mのところにある溝からあふれ出した水により足跡内に砂が運び込まれたためにそれが残されたことも考えられる。

—遺物— (第161・162図、図版53)

遺構からの出土例も若干あるが、殆ど包含層から出土した。いずれも小片で、土師器・須恵器・瓦器・染付・瓦・土製品などがあるが、古い時期の混入品も多い。総量でコンテナに半分位ある。

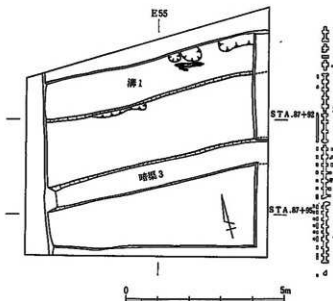
238・239は炆烙鍋である。口縁部及び体部内面は横撫で調整が施されている。付部外面に細かな凹凸が見られ、金雲母片が多く付着しているのは型づくりによる離れ砂の使用を示すものであろう。体部器壁は2mm前後と非常に薄くつくられている。口縁部下にはつば状の突帯がめぐる。238のそれは比較的突出度が大きく端面を持つのに対し、239では突出度が小さく、端を丸くおさめている。時期差なのか、あるいは生産主体の違いによるものなのであろうか。胎土はいずれも精良である。素焼きであるが硬質に焼かれ、色調は、238が灰白色、239が淡茶褐色である。外面には煤が付着する。



第162図 3区江戸時代溝3出土土器

240・241は丹波焼の搦鉢である。240が砂粒を多く含むのに対し、241は比較的精良である。口縁部の形態から、240が17世紀第2四半期、241が18世紀前半のものと考えられる。

242は備前焼の搦鉢である。先の鋭利な棒状工具で連続的に搦



第163図 現代1・2区平面図

土した混入品であるが遺存状態が比較的良いので紹介した。

近・現代面（第163・165図、図版28・29、付図19）

2区の溝1は現代方格地制の里境に位置する溝である。奈良～平安時代の条里地制と同じ方向性を持ち、奈良～平安時代以来同じ位置に重複して溝が掘られてきたことは再三述べてきたところである。やはり農耕用排水路として機能したものであろう。調査区内で幅約1.6m、深さ約0.3mを測る。底は西に向かってやや下がるようである。

土坑は1・3・5区で検出された。大小あるが、ほぼ隅丸方形で、深さは0.2m～0.5mを測る。何のために掘られたものかは明らかでない。

段は1区で検出された。耕作地の造成によるものと考えられる。掻き挙げ田であろうか。段差は約0.2mを測る。

暗渠は、土管・竹筒+木の枝・木の枝をそれぞれ埋め込んだものが見られた。竹は、半載して節を欠いた後再び合わせて用いられ、周囲に枝をからめて埋め込まれている。木の枝だけの暗渠は、それが束ねて埋め込まれていた。暗渠1・4は土管、2・3・5～9・12・13は竹筒と木の枝、10・11は木の枝を用いたものである（付図19）。いずれも方格地制の方向に沿って東西あるいは南北方向につくられている。

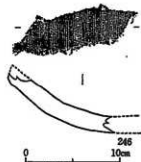
一遺物一（第164図・図版51）

土師器・瓦器・須恵器・陶器・磁器・瓦の破片が旧耕土から出土している。すべて小片である。江戸時代以前のものが多いようであるが、近世以降の染付なども含まれている。

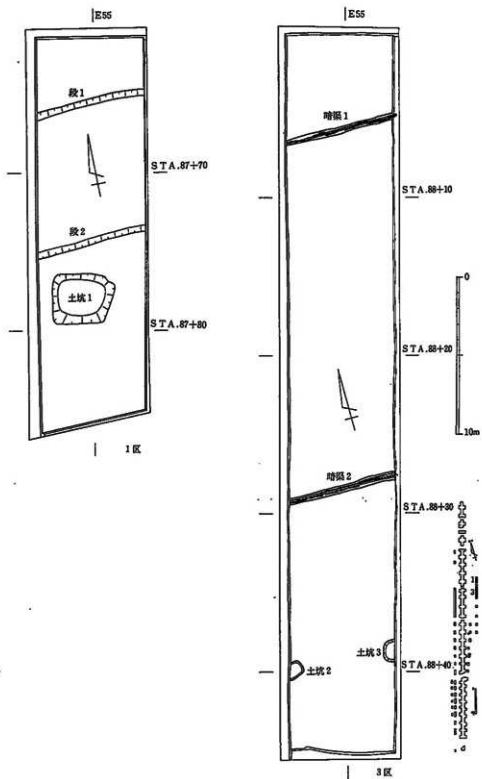
り目をつけている。砂をやや多く含み、赤橙色を呈す。口縁部の形態から17世紀後半のものと考えられる。⁽²⁾

243・244は唐津焼の碗である。243は、底部外面には釉をかけず、内面にはぶい黄橙色を呈する釉をかけている。244は内外面に茶色と白の釉を横状にかけるが、内底面では焼成前に釉が輪状に掻きとられている。

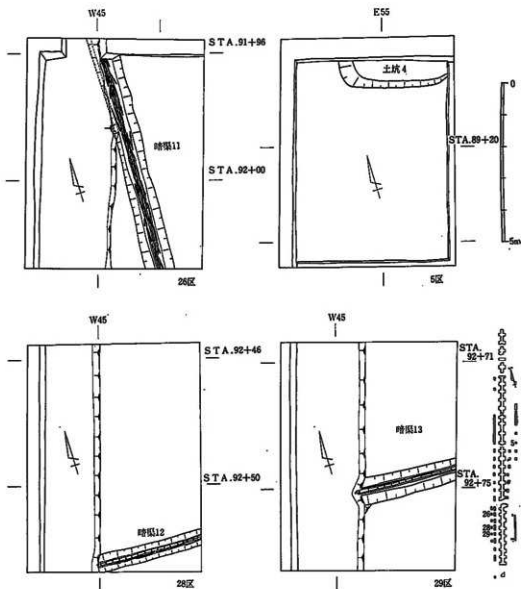
245は7世紀前半の須恵器杯蓋である。3区溝3から出



第164図 3区旧耕土出土瓦



第165图 现代1·2区平面图



第166図 現代5・26・28・29区平面図

246・266はいずれも滲入品で、246が凹面に布目を持つ平瓦、266が中国製の白磁である。

まとめ

見てきたように調査区一帯は江戸時代以降も前代に引き続き田圃地帯であった。残された遺構の多くは農耕に関係するものである。さて、その中でも極めて特徴的な注目すべき遺構（群）がいくつか認められる。以下、それらについて詳述し、まとめとする。

ひとつは、当該地周辺において奈良～平安時代に施行されたと考えられる条里地制と同じ方向性を持つ溝や畦畔あるいは暗渠である。中には2区の溝のように、奈良～平安時代以降同じ位置

に溝が掘られてきた例もある。同じ区画原理に基づく方格地割ではあっても時代によりそれを支えた社会的背景には当然異なったものが考えられるが、形式上にせよ諸例は奈良～平安時代の条里地割が現代の方格地割まで継承されたことを物語るものである。その背景として、ひとつには自然条件の安定化ということがあげられよう。つまり、地形や水系に大きな変化がなく、同じ地割・灌漑体系が合理性を持ち続けたということである。もっともそれは単に自然条件の問題にとどまるわけではなく、治水・灌漑技術の発達とも関わり、少なからず社会的な問題ではあるが。

いまひとつは掻き揚げ田で、今回の検出例の他、(その2・その4)調査区でも出土している。掻き揚げ田は、江戸時代に初めてつくられたものでなく、古代・中世から存在したと考えられているが、少なくとも河内平野では江戸時代以降急速に造成が進んだことは遺構の検出状況からうかがえるところである。掻き揚げ田は夏の用水不足と冬の湛水に強いと言われ、先の背景には江戸時代初期の大和川付け替えによる水不足に一因があると考えられる。が、その中で、活発な商業活動や貨幣経済の浸透を背景として商品作物たる綿花の栽培が河内平野に導入されるに至り、畑地の必要性から掻き揚げ田の造成が促されたことが考えられる。ちなみに今回の調査区でも江戸時代の層から綿の花粉が検出されている。

さて、大和川の付け替えに伴う水不足については掻き揚げ田の他にもそれをより顕著に物語る遺構が見られる。それは井戸である。勿論、それ以前にも井戸は見られるが、江戸時代になると急激に多くの井戸が掘られ、その1からその6の調査区で総数23基が検出されている。しかも、頑丈な木組みや瓦質井戸枠を伴って、深いものでは4m位掘り抜き、長期的により安定的に多くの水を得ようという意図が見てとれる。旧大和川(長瀬川)に近い佐堂遺跡では井戸の検出例が少なく、美園遺跡では検出されていない。大和川付け替えによる旧大和川の水量の絶対的な減少は、旧大和川から離れた山賀遺跡周辺でより深刻な水不足をもたらしたのではないだろうか。

次に、現代の特徴的な遺構として暗渠がある。北限はSTA.88+00付近で、南は文井東遺跡北端部STA.94+50付近に及ぶ。土管暗渠・竹暗渠・そだ暗渠があることは先述したとおりである。現代方格地割に平行し、南北方向には1町ごと、東西方向には、部分的に抜けている所もあるが、1町に5条が基本であったようである。これは1944年につくられたもので、第2次大戦中に生産の増大を計って実施されたのであろう。

その他、(その1)調査区で独立柱建物1棟、(その4)調査区では道・粘土探掘坑などが検出されている。

註(1) 広瀬和雄「5.陶器」『能勢町における埋蔵文化財の調査1』能勢埋蔵文化財研究会・能勢町教育委員会(1985)

(2) 鈴木重治・松藤和人「同志社キャンパス内出土の遺構と遺物」同志社大学校地学術調査委員会(1978)